

稲元日焼原

— 福岡県宗像市所在窯跡群の調査 —

宗像市文化財調査報告書

第 22 集

1989

宗像市教育委員会

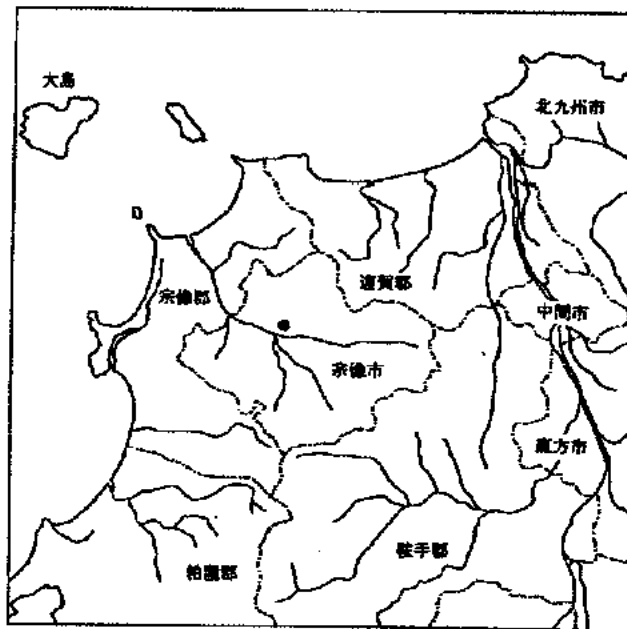
委員会

INA MOTO HI YAKE BARU
稲元日焼原

— 福岡県宗像市所在窯跡群の調査 —

宗像市文化財調査報告書

第 22 集



1989

宗像市教育委員会

宗像市教育委員会

社会教育課

文化財担当

3263

巻頭カラー



日焼原 2 号窯跡断面

序

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市への通勤圏となっており、両政令都市の結節都市としての様相を濃くしています。

本市はこのような状況のなかで、「学術・文化都市」としての将来構想実現へ向けて着実に歩みを続けています。

今回報告の遺跡は、市北部の大型住宅開発に先行して発掘調査を実施した遺跡です。発掘調査では古墳時代の窯跡群が検出され、数多くの重要な遺物が出土しています。

宗像市内を東西に貫流する釣川の北部に分布がみられる窯跡群は、県下では旧筑紫郡の牛頸窯跡群に匹敵するほどの大窯跡群といえます。

今回の調査は、現段階での当該地域における須恵器生産の最古期にあたり、古代窯業生産の解明にとって重要な位置を占めることがわかりました。

本書が広く文化財の保護および学術研究の一資料として貢献することを念願するとともに、発掘調査全般にわたってご協力いただいた多くの方々に心から感謝の意を表する次第であります。

平成元年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 森 下 照 清

例 言

1. 本書は、宗像市教育委員会（当時は宗像町）が1982（昭和57）年に発掘調査を行った縮見日焼原竊跡群の報告書であり、宗像市文化財調査報告書の第22集にあたる。
2. 発掘調査は、宗像市が大和団地株式会社からの受託事業として実施し、福岡県教育委員会の援助を得た。
3. 出土遺物の整理は、宗像市教育委員会文化財整理室と九州歴史資料館（指導 岩瀬正信）とで行った。
4. 遺構実測図は酒井仁夫・川述昭人・木下修・原俊一・伊崎俊秋・斉藤・大庭・三角が作成した。
5. 遺物実測は若松三枝子・佐藤みゆき・伊崎が行った。
6. 遺構・遺物実測図の浄書は豊福弥生・鶴田佳子・伊崎が行った。
7. 遺構写真は原・伊崎が、遺物写真は石丸洋・須原悦子が撮影した。
8. 本書に示した方位は国土調査法第II座標系にもとづく座標北である。
9. 掲載した実測図のうち、出土土器の縮尺は基本的に1/3であるが、断面の下端右側に◆印を付したものは1/6である。
10. 本書の執筆はI-A-1とI-Bを原が、そのほかを伊崎が行った。
11. 本書の編集は伊崎が行った。

本文目次

	(頁)
I. はじめに	1
A. 調査の経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査中の経過	2
B. 位置と環境	4
II. 調査の記録	6
A. 遺構の概要	6
B. 窯跡	8
1. 1号窯跡	8
2. 2号窯跡	19
3. 3号窯跡	26
4. 4号窯跡	37
C. 竪穴遺構	46
III. おわりに	54
A. 遺構について	54
B. 遺物について	55

図版目次

図版1	稲元日焼原窯跡群航空写真
図版2	稲元日焼原窯跡群全景(東から)
図版3	(上) 日焼原1号窯跡(南から)
	(下) 日焼原1号窯跡(北から)
図版4	(上) 日焼原1号窯跡窯尻上層土器出土状態(北から)
	(下) 日焼原1号窯跡窯尻上層土器出土状態(南から)
図版5	(上) 日焼原1号窯跡窯尻上層土器出土状態(西から)
	(下) 日焼原1号窯跡焼成室壁面工具痕
図版6	(上) 日焼原1号窯跡前庭部(東から)
	(下) 日焼原1号窯跡前庭部上層K-1
図版7	(上) 日焼原2号窯跡(東南から)
	(下) 日焼原2号窯跡(北西から)

- 図版 8 日焼原 2 号窯跡断面
 図版 9 日焼原 2 号窯跡煙出し・窯尻部分
 図版 10 (上) 日焼原 3 号窯跡 (東南から)
 (下) 日焼原 3 号窯跡 (北西から)
 図版 11 (上) 日焼原 3 号窯跡前庭部断面
 (下) 日焼原 3 号窯跡 1 次床面土器出土状態
 図版 12 日焼原 4 号窯跡 (東から)
 図版 13 (上) 日焼原 4 号窯跡 (東から)
 (下) 日焼原 4 号窯跡 (西から)
 図版 14 日焼原 1 号窯跡出土土器 1
 図版 15 日焼原 1 号窯跡出土土器 2
 図版 16 日焼原 1 号窯跡出土土器 3
 図版 17 日焼原 1 号窯跡出土土器 4
 図版 18 日焼原 2 号窯跡出土土器 1
 図版 19 日焼原 2 号窯跡出土土器 2
 図版 20 日焼原 2 号窯跡出土土器 3
 図版 21 日焼原 2 号窯跡出土土器 4
 図版 22 日焼原 2 号窯跡出土土器 5
 図版 23 日焼原 3 号窯跡出土土器 1
 図版 24 日焼原 3 号窯跡出土土器 2
 図版 25 日焼原 3 号窯跡出土土器 3
 図版 26 日焼原 3 号窯跡出土土器 4
 図版 27 日焼原 3 号窯跡出土土器 5
 図版 28 日焼原 3 号窯跡出土土器 6
 図版 29 日焼原 3 号窯跡出土土器 7
 図版 30 日焼原 3 号窯跡出土土器 8
 図版 31 日焼原 4 号窯跡出土土器 1
 図版 32 日焼原 4 号窯跡出土土器 2
 図版 33 日焼原 4 号窯跡出土土器 3
 図版 34 日焼原 4 号窯跡出土土器 4
 図版 35 日焼原 4 号窯跡出土土器 5
 図版 36 日焼原 4 号竪穴出土土馬 (T416)
 図版 37 日焼原窯跡群出土土馬・紡錘車等
 図版 38 日焼原窯跡群 K-1, 4 号窯跡, 1 号竪穴出土土器

插图目次

		(頁)
第1图	遺跡位置图 (1/50,000)	5
第2图	遺跡周辺地形图 (1/5,000)	6
第3图	稻元日燒原窯跡群遺構配置图 (1/200)	折込
第4图	日燒原1号窯跡実測图 (1/80)	折込
第5图	日燒原1号窯跡出土土器実測图① (1/3)	10
第6图	日燒原1号窯跡出土土器実測图② (1/3, 1/6)	11
第7图	日燒原1号窯跡出土土器実測图③ (1/3)	12
第8图	日燒原1号窯跡出土土器実測图④ (1/3, 1/6)	13
第9图	日燒原1号窯跡出土土器実測图⑤ (1/3, 1/6)	14
第10图	日燒原1号窯跡出土土器実測图⑥ (1/3, 1/6)	15
第11图	日燒原1号窯跡出土土器実測图⑦ (1/6)	16
第12图	日燒原1号窯跡前庭部上層出土K-1出土状态実測图 (1/20)	17
第13图	日燒原K-1実測图 (1/4)	18
第14图	日燒原2号窯跡実測图 (1/80)	折込
第15图	日燒原2号窯跡断面图 (1/40)	折込
第16图	日燒原2号窯跡出土土器実測图① (1/3)	21
第17图	日燒原2号窯跡出土土器実測图② (1/3)	22
第18图	日燒原2号窯跡出土土器実測图③ (1/3)	23
第19图	日燒原2号窯跡出土土器実測图④ (1/3)	24
第20图	日燒原2号窯跡出土土器実測图⑤ (1/3, 1/6)	25
第21图	日燒原3号窯跡実測图 (1/80)	折込
第22图	日燒原3号窯跡断面图 (1/40)	27
第23图	日燒原3号窯跡坏出土状态実測图 (1/20)	28
第24图	日燒原3号窯跡出土土器実測图① (1/3)	30
第25图	日燒原3号窯跡出土土器実測图② (1/3)	31
第26图	日燒原3号窯跡出土土器実測图③ (1/3)	32
第27图	日燒原3号窯跡出土土器実測图④ (1/3)	33
第28图	日燒原3号窯跡出土土器実測图⑤ (1/3)	34
第29图	日燒原3号窯跡出土土器実測图⑥ (1/3)	35
第30图	日燒原3号窯跡出土土器実測图⑦ (1/3)	36
第31图	日燒原4号窯跡実測图 (1/80)	折込

	(頁)
第32図 日焼原4号窯跡断面図(1/40)	38
第33図 日焼原4号窯跡出土土器実測図①(1/3)	40
第34図 日焼原4号窯跡出土土器実測図②(1/3)	41
第35図 日焼原4号窯跡出土土器実測図③(1/3)	42
第36図 日焼原4号窯跡出土土器実測図④(1/3)	43
第37図 日焼原4号窯跡出土土器実測図⑤(1/3, 1/6)	44
第38図 日焼原4号窯跡出土土器実測図⑥(1/3, 1/4)	45
第39図 日焼原1～3号竪穴出土土器実測図①(1/3, 1/6)	48
第40図 日焼原3・4号竪穴出土土器実測図②(1/3)	49
第41図 日焼原4・5号竪穴出土土器実測図③(1/3)	50
第42図 日焼原窯跡群出土土器その他実測図(1/2)	52
第43図 日焼原4号竪穴出土土製品(盒)実測図(1/4)	53

表 目 次

	(頁)
稲元日焼原窯跡群出土土器観察表①～⑭	57～80

写 真 挿 図

	(頁)
Fig.1 故 酒井仁夫氏をかこんで(久原遺跡)	3
Fig.2 日焼原1号窯跡	17

I. はじめに

A. 調査の経過

1. 調査に至る経過

宗像町（現宗像市）稲元地区に大和団地株式会社が開発に乗り出したのは1972年12月以降のことである。現在（1989年3月）までに4期にわたる工事が実施され、約60万㎡に及ぶ面積が宅地化されている。

1期工事（約13万㎡）では、1974年の冬に現地踏査を行い、古墳時代の円墳を4基確認した。同年の12月19日には事業者から埋蔵文化財の発掘届が出され、協議を経た後の翌1975年2月から3月にかけて天理大学を中心とした調査団による発掘調査が実施された。

調査開始時に、事前踏査で確認されていた、最北よりの円墳1基は、重機により破壊されて消滅していた。調査の途中で新たに3基の古墳が発見され、最終的には6基の古墳が発掘されて、翌1976年に報告書が刊行された。^(注1)

調査にかかる資料のうち、出土遺物は宗像市教育委員会に、実測図・フィルム等の資料は天理大学に保管されている。

1次調査の段階で南側および、東側に延びる丘陵尾根上にも連続する2群の古墳群が認められており、2期工事部分ではあるが、継続して調査をしてほしいとの協議があった。このため1975年7月から9月にかけて、藤井祐介氏を代表とする稲元古墳群遺跡調査会によって、事業地にはいる南側の1群である、丘陵尾根上に分布する5基の古墳と1基の甕骨器の調査が行われた。調査終了後の1976年9月に調査概要が出された。^(注2)

調査にかかる全ての資料は宗像市教育委員会に保管されている。

1981年夏になって2期工事（約25万㎡）が着工の運びとなり、既調査以外の事業地内の文化財についての依頼があった。8月から9月にかけての現地踏査の結果は、現状での遺構の検出にはいたらなかったが、宗像特有の掘りかたの深い遺構検出の経験から、主要な尾根上に重機による試掘を行った。結果として遺構は検出されずに工事は着工となった。

同年の12月に入って大字稲元字日焼原在住の田中一氏から自宅前の工事中の斜面に大量の須恵器と炭の層が見られるとの連絡をうけて、現地へ急行したところ、丘陵南側の急斜面に灰原を切るようにして竈跡の断面が露出していた。急拠大和団地株式会社と協議を行い、福岡県教育委員会文化課の派遣を得て、年明けの1月から調査に入り、2月には完了することができた。

注1. 稲元古墳群調査団「稲元古墳群第1期調査報告 1975春」1976

注2. 稲元古墳群調査団「稲元古墳群第2期調査報告」1976

1. はじめに

2. 調査中の経過

稲元窯跡群日焼原支群の発掘調査は1982（昭和57）年1月13日から2月12日までの間に実施した。

1月13日に、それまで調査していた相原の現場から器材を移動し、テントを設営して発掘を開始した。翌14日まで晴れていたものの15日午後からは小雨となり夜にはそれが雪にかわって翌16日から19日まで3日間も降り続いた。20日には晴れ間がのぞきはじめてもののテントは倒壊し、かつ調査地点が斜面のため滑って危険なので結局22日から再開したのであった。

この22日には開発業者たる大和団地の担当の人と調査日程について協議することとなり、2日半ばまでに終わってくれるよう要請があった。27日頃には窯が4基と竪穴（土壌）が数基存するのみとわかり、2月半ばを目ざして途中日曜日も返上して調査を進めていった。

2号窯跡が20次にもわたる床面を有していたためにやや発掘に手間どったが、途中の小雪、みぞれをものりこえて2月9日には発掘を終了した。翌10日にはヘリコプターによる航空写真を撮影し、12日に遠景写真を撮って全てが終了となった。この間、正味24日間を要した。

調査着手時には2・3号窯前庭部の崖面から下方の都市計画道路面までは10mほどの絶壁となっており斜面であることもあわせて、きわめて危険を伴うものであった。そのような中、雪、みぞれ、小雨の中を発掘調査に従事された作業員の皆さん（下記）と関係各位に深甚の謝意を表します。

なお、調査の端緒から現場にともに立ち、しばらくの間いっしょに調査した酒井仁夫氏は去る1988年1月11日、他界された。慎んで御冥福を祈り上げます。

〔調査の組織〕

〈発掘調査〉（1982年1～2月）

総括	宗像市教育委員会	教育長	竹原 瑛（故人）
		教育部長	白木 国明
		社会教育課長	牧田 俊次
		社会教育係長	竹村 功
	（庶務）	主 事	北野 隆文
	（会計）	主 事	石松 幸子
調査担当	福岡県教育委員会管理部文化課		
		主任技師	酒井 仁夫（故人）
		主任技師	川達 昭人
		主任技師	木下 修
		技 師	伊崎 俊秋

A. 調査の経過

整理

総括	宗像市教育委員会	教育長	森下 照清
		教育部長	山田 政信
		社会教育課長	吉田 繁利
		文化係長	尾山 清
	(庶務・会計)	主 事	大賀由美子
整理担当	福岡県教育委員会指導第二部文化課	主任技師	伊崎 俊秋

◎発掘に従事された皆さん

宮田寿喜・田中 一・長谷川和幸・花田 茂・中村好太郎・石田喜代子・桜井順美・
石田信香・龍井彰子・小方幸代・長谷川和枝・長谷川テル子・中島幸子・齊藤・大庭
・三角



Fig.1 故 酒井仁夫氏をかこんで(久原遺跡)

B. 位置と環境

稲元日焼原遺跡は行政区の大字稲元字日焼原に所在し、市の北部、宗像郡玄海町と遠賀郡岡垣町との境にある孔大寺山(499.0m)から西南に派生する丘陵上に位置する。遺跡は南北に深く開析された東向き丘陵の急斜面にある。遺跡を含む一帯は1954年までの旧河東村(河東・須恵・山田・平等寺・稲元・池浦)である。^(注1)現在の大字河東・須恵・山田・稲元は市の大半の窯跡の分布域となっている。稲元は中世までは「稲本」とよばれていた。^(注2)

かつて大字河東字大浦の丘陵から、須恵器の土馬の報告がなされている。^(注3)最初の窯跡の調査は当時の福岡教育大学教授の波多野皖三氏によって1971年に実施された。^(注4)その後窯跡発見の報告が2件続いた。^(注5)1982年には稲元黒巡遺跡の調査が実施され、6世紀後半の窯跡が確認された。^(注6)本遺跡ののる丘陵の西側尾根線上では2件の古墳群の調査が1975年に実施されている。^(注7)市内で調査された3件の横穴群は稲元を中心として釣川の北部に全て分布がある。^(注8)

注1. 平安遺文金石文編49 大治5(1130)年10月23日付の経簡に「筑前国宗像宮内河東村太日光寺」とある。

注2. 平安遺文金石文編346 稲元八幡宮付近出土の仁平4(1130)年9月23日付の経簡に「鎮西筑前之國宗像宮内稲本村」とある。経簡は滑石製で周囲を木炭で充填していたという。円形の筒身、方形の屋根形の蓋、宝珠が残存する。

注3. 田中幸夫 1935「筑前発見祝登馬の二例」考古学雑誌25巻7号 報告資料は稲元日焼原遺跡のものとしており、工房が同一の可能性もある。この報告を機会に出土地周辺を河東大浦遺跡として記しておくたい。

注4. 波多野皖三 1976「黒巡須恵窯址」筑紫史論第一号 斎舎建設により2基の窯跡が確認されているが、遺物の紹介がなく時期等については不明。

注5. 黒次雄 1979「宗像郡須恵新池の窯跡群の須恵器」警視の胡6号 大字稲元字日焼原地内にあり、3基の窯跡が報告され、6・7世紀にあたる。

中川研治 1980「宗像郡宗像町河東字須恵露辺に所在する窯跡群について」地域相研究8号 この地は大字須恵字宮ノ裏にあたり、6・7世紀の須恵器が紹介されている。あわせて新池地区の採集資料と大字須恵字平原採集資料も記載されている。

注6. 1982年、宗像市教育委員会調査。丘陵を挟んだ2つの小谷に各1群の窯跡がみつめられた。A群は10基程度の窯跡が想定でき、このうちの並列する3基の調査を行った。B群は数基程度と考えられ、1基のみを調査した。

注7. 西谷真治ほか 1976「稲元古墳群 第1期調査報告」稲元古墳群調査団 未調査破壊消滅古墳1基、調査古墳は6基である。前期の単独墳1基と5世紀の横穴式石室を主体部とする円墳5基で構成されている。

藤井祐介ほか 1976「稲元古墳群 第2期調査報告」稲元古墳群調査団 尾根線上に5世紀から6世紀にかけて連続する5基の古墳と火葬墓1基を調査している。

注8. 福岡久戸横穴群、稲元久保横穴群、須恵須賀浦横穴群。

B. 位置と環境



1. 稲元日焼原遺跡 2. 稲元古墳群 3. 久戸古墳群 4. 稲元久保遺跡
 5. 須恵須賀浦遺跡 6. 釣川遺跡 7. 河東大浦遺跡 8. 稲元黒庭遺跡
 9. 稲元黒庭竊跡 10. 稲元日焼原新池の竊跡 11. 須恵宮ノ裏古池の竊跡

●古墳群 ■前方後円墳 ■横穴墓群 ▲竊跡群

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

II. 調査の記録

A. 遺構の概要

1982年1月13日～2月12日の正味24日間における発掘調査で検出した遺構・遺物（土器以外の特殊品）は次のようであった。

• 窯跡4基

1号窯—3回の床面…1号竪穴に切られる。前庭部に合せ覆あり。

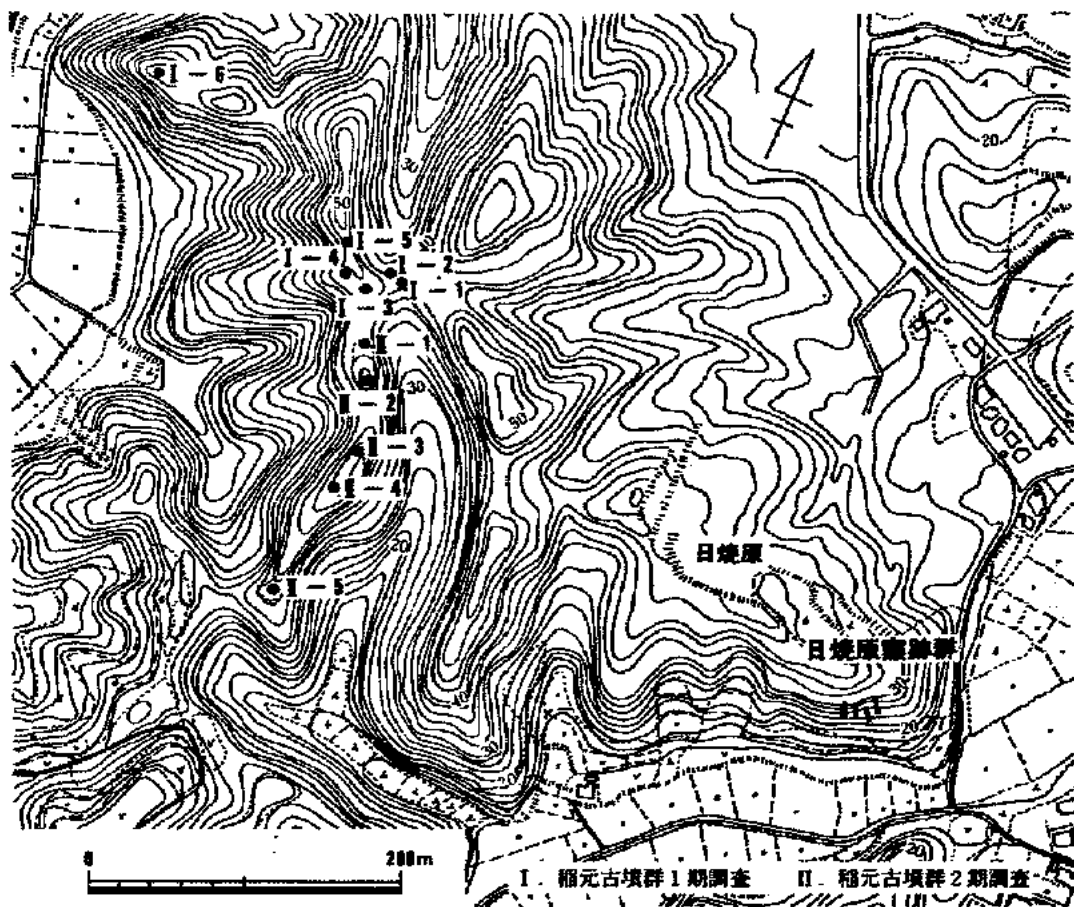
2号窯—20回の床面…枳鉢車出土

3号窯—7回の床面…4号竪穴に切られる。

4号窯—9回の床面

• 竪穴5基

4号竪穴から土馬・埴製盒?・製塩土器?出土



第2図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

A. 遺構の概要

4基の窯（図版1・2、第3図）は、大略東南から北西に向かって主軸をもち、等高線に直交する方向に築かれている。4基ともに築窯当初はトンネル状に地山をくりぬいたものであったと思われる。全て無階無段の登窯である。

各窯跡の説明の前に、窯体各部の呼称を含めた概要を記しておこう。

灰原……窯で焼き損じた土器等を捨ておく所であるが、各窯ともに前庭部からの続きとなっている。本来は1・4号に見るような今次検出部分は全て前庭部として、本来の灰原はさらに下方の谷に存したとすべきなのであろうが、今回は前庭部・灰原を一連のものと捉える。

前庭部……焚口の手前にあって作業場的な所となるものだが、前述の灰原との区別は明確でない。

焚口……窯への製品の出し入れ口であるとともに、薪をくべる所であり、さらには窯内部を還元状態にするために閉塞する所である。

燃焼部……薪を燃やす場所をさす。次の焼成部との境は明確でないものが多く、床面の傾斜変換の度合いによってそれと指摘しうる程度である。

焼成部……製品（須恵器）を置き並べて焼いた場所である。床面傾斜はわりと急である。階段等の施設を付加したものはなかった。

窯尻平坦部……窯尻の前面に、平坦といえるほど平らではないものの焼成部床面とは明らかに傾斜を異にする部分がある。これを窯尻平坦部と称しておく。あるいは煙道のために設けられたものかもしれない。

窯尻……煙道のとり付く所である。

煙道……煙出しの施設である。

排水溝……窯の両側に付設されている。焚口の方から見て右排水溝、左排水溝とする。

窯後方遺構……1・2号に付設されているもので、煙出し・排水溝よりさらに後方（上方）に土塊状の掘込みとして存する。

2・3号窯については調査開始のきっかけとなったことでもあるが、その前庭部を削りとられていた。

なお、各窯跡の床面は操業開始時を1次として、順次新しい操業毎に床面次数が増えることとなるのであるが、本書においては調査時点の確認床面次数のまま（すなわち、新しい方から古い方へ番号が増えていく）で報告することとする。従って、最終操業時（窯を廃棄した時）の床面が1次床である。とくに遺物の今後の取扱いに混乱が生じることを恐れるためである。

今回の報告は、時間的な関係もあって全ての出土遺物をおさえきれずに終わっている。その責はいずれ果たしたい。以下の遺物説明では、とくにことわらない限り全て須恵器である。

B. 窯 跡

1. 1号窯跡 (図版3-6、第4図)

検出した4基のうちでは最も西端にあり、2号窯と寄り添うが如くに位置するが切合いはない。1号竪穴に燃焼部右壁の一部を切られていた。主軸方位はN-29.5°-Wで、焚口-窯尻間が9.5m、検出分の総長16.64mを測る。排水溝が「ハ」字状にとり付き、窯後方遺構が付属する。最高所から下方への標高差は約7mに及ぶ。燃焼部での床面の重なりは3回分が見られるが、3回ともに床面プランはほとんど同じであった。地山をくりぬいての地下式の構造にて造られたものであろう。なお、窯体掘削の際の工具痕が壁面でもとくに焼成室によく残っていた。

前庭部は焚口部分を要として手前の方に扇形に開いた形状となる。その西端部には深さ90cmで直径55-75cmの大きめのピットが掘られているもののその機能はわからない。また、焚口のすぐ東側では上層から土師器の合せ甕(K-1)が検出された。これについては後述する。この前庭部のさらに南側には、東西3.5m、南北2.2+αm、深さ30cm程の不整形をしたくぼみがあって、焚口から続く平坦面との境に段をもっている格好となる。発掘時にはこの一段低くなった部分を灰原とし、第1層=赤褐色土層、第2層=黒色土層として遺物を取り上げた。その出土土器を見るに、第1層には窯本体の土器とは異なる新しい時期のものが混ざっているのがわかる。これはその一段低くなった部分(灰原)が新しい時期になってもまだ埋まりきらずにくぼみになったままであった所に土器が投棄された結果なのであろう。この部分を後の掘削による土壌とするには、第2層の土器に混入がないことから否定的にならざるをえない。そこには直径30-35cm、深さ30cmの小ピット1個がある。

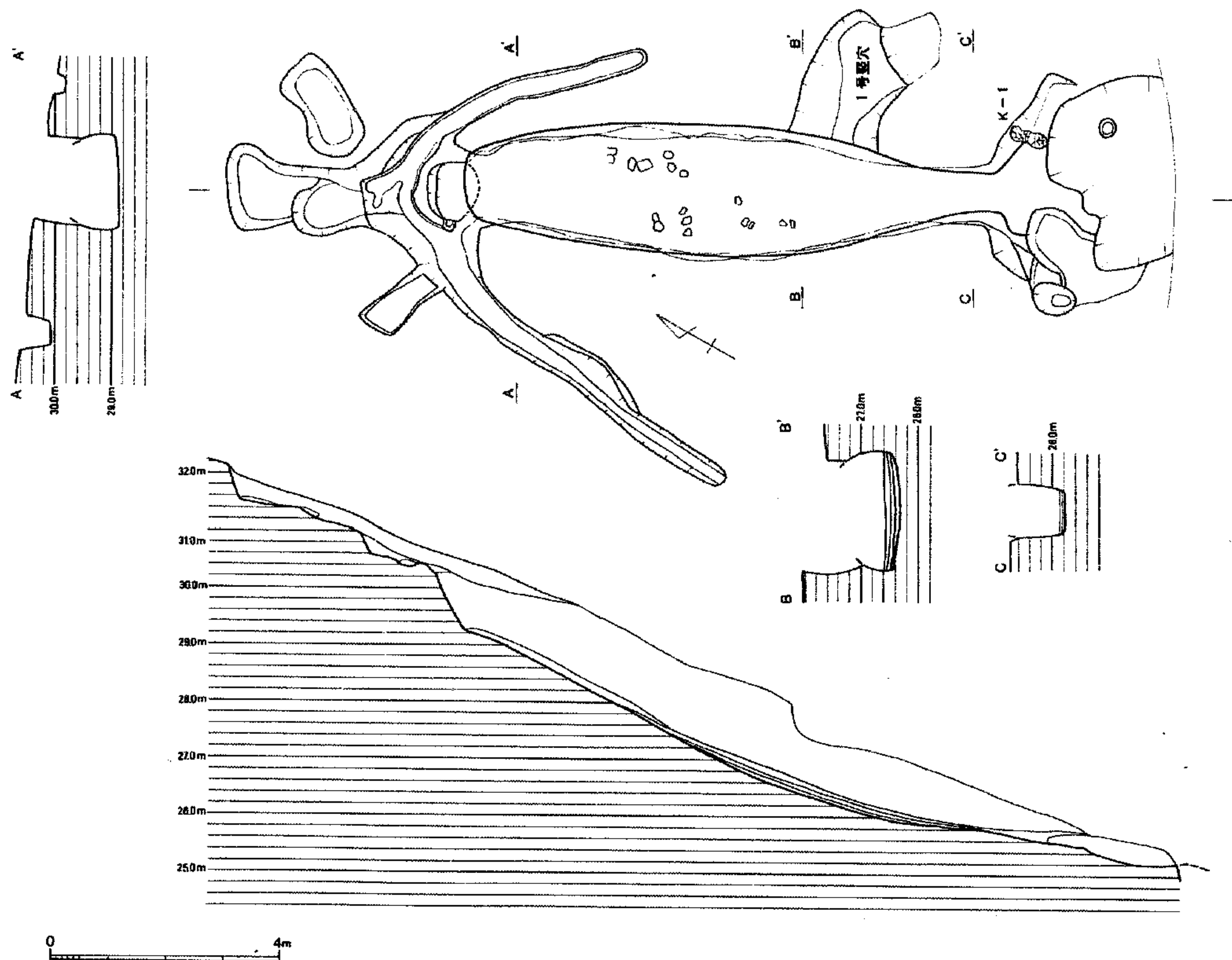
焚口は幅75cmでかなり狭い。

燃焼部は焚口から160cm程の所までであろう。ここから床面の傾斜が少し変わってくるし、また壁面が外へ開いて床面が広がっていく。最も狭い部分が幅66cmを測る。

焼成部は最大幅2.3m、長さ8.7mを測る。床面から天井部までの高さは推定で1.1m程であったと思われる。床面は3回の貼りなおしを行うが、壁面については修復の痕跡はなかった。最終操業時(1次)の床面上には焼台に利用したと思われる須恵器甕の破片と自然石とが20個弱残っていた。床面の傾斜は、1-3次を通じて焼成部の始まりのあたりでは、15-18°をなすが、焚口から4.5m付近では22°-25°と急勾配になる。壁面の工具痕は刃部幅5.5-6.0cm、長さ12cm程のものが見られる。おそらく鉄製品の刃先によるものだろう。

煙道の手前で、焼成室からの床面傾斜が変化して長さ75cm程の部分が緩やかとなり窯尻に至る。窯尻の幅は1.2m。そこから煙道が64°の急角度で立上っている。焚口から窯尻までは、9.5mを測る。

煙道はいま1.35mが残り、煙出し口に近い方は外上方へ屈折している。西側に小さなピット



第4图 日镜原1号窟跡実測图 (1/80)

B. 窯跡

状の段がつくのを見ると、煙出し口は1つではなかったのかもしれない。

窯尻～煙道の上層から須恵器の甕・高坏など数個体分が出土した。天井部陥没後のくぼみに煙出し口の方から投棄されたものである。

排水溝は窯本体に「ハ」字状に取り付く。左排水溝は長さ7.6mまでのびている。煙道の近くに幅50cm、長さ140cm、深さ18～63cmの長方形プランの土壌が付随している。右排水溝は窯に沿うように長さ4.9mまでのびる。

窯後方には性格不詳の掘込みがある。不整形土壇3つが連続して階段状となっている。

出土遺物（図版14～17、第5～11図）

床面・焚口～燃焼部のものと、灰原、排水溝、窯尻上層と分けて図示した。1～3次床面と灰原2層までの土器（1001～1041・1046～1049・1066～1068・1072）はまちがもなくこの窯の操業期間中のものであるが、灰原1層には混入（1057～1063）がある。1063～1065・1069～1071・1073～1076は明確にしがたいが1063を除いてこの窯に伴うものとする。窯尻上層と排水溝出土の土器は後出のものとされる。多分に2～4号窯操業時に土器が投棄されたものだろう。伴うものとしては坏蓋・坏身・高坏・甕・壺・甕があり、大甕の破片が多かった。

坏蓋は立上りがかなり高い（長い）のを特徴としており、その中で1005・1008・1009は形態上やや特異とされよう。このような器形のも物が存するということが注意される。全体に筒形に近い形状をとる。口唇部内側には段もしくは沈線をもつ。1001・1012～1014は掘みを欠失し、1001を除いて外天井部にはカキ目が著しい。これらは高坏の蓋になろうか。1013の外天井部には補修痕がある。1002・1031・1034の受部先端はきわめてシャープである。

坏身も立上りが高く、これも筒形に近い。口唇部内側に沈線もしくは明瞭な段をもつ。1014・1016～1018・1047の受部端面には何かで押えつけてついた圧痕がある。1021の口縁部から体部にかけてには補修痕がみえる。1020の底体部にあるヘラ記号はきわめて浅いもので、ヘラ先で少し擦過したという程度のものである。1048はきわめて深く丸みのある器形となる。1037の蓋とセットになるものであろうか。

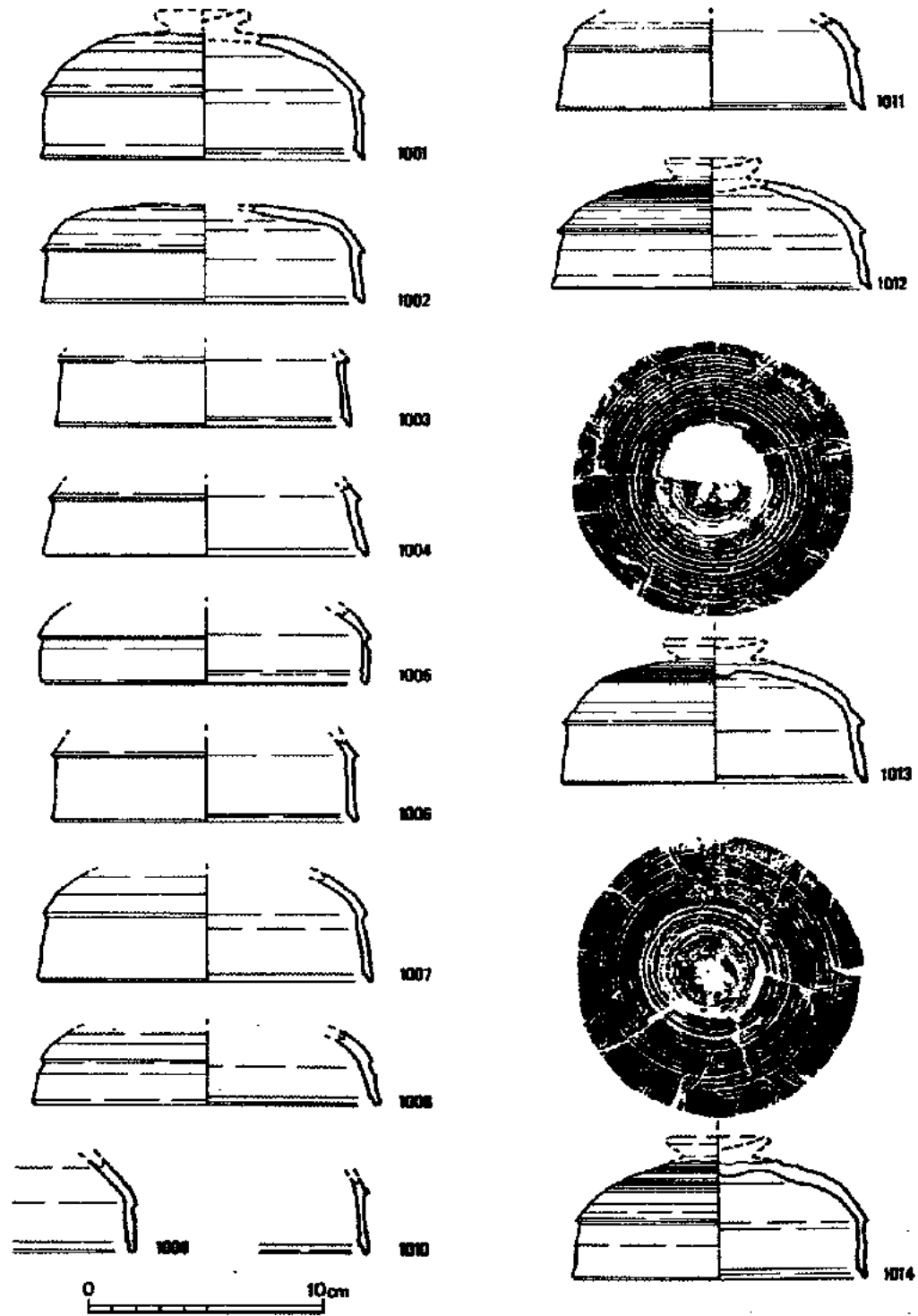
甕は1024～1026のように細身で繊細なつくりをなす。1063のそれは後出のものと判断する。1027は壺になろうか。1064は変形してかような器形になったとすればもとは壺形となる。変形したものか否かがよくわからない。

壺は1066・1067ともに口縁部はよく似ている。

甕の波状文も流麗なものも多く、乱れは少ない。1073は焼成は土師器のそれであるが器形的には須恵器とも土師器ともどちらにもとれそうである。1076はあるいは器台の裾部かもしれない。

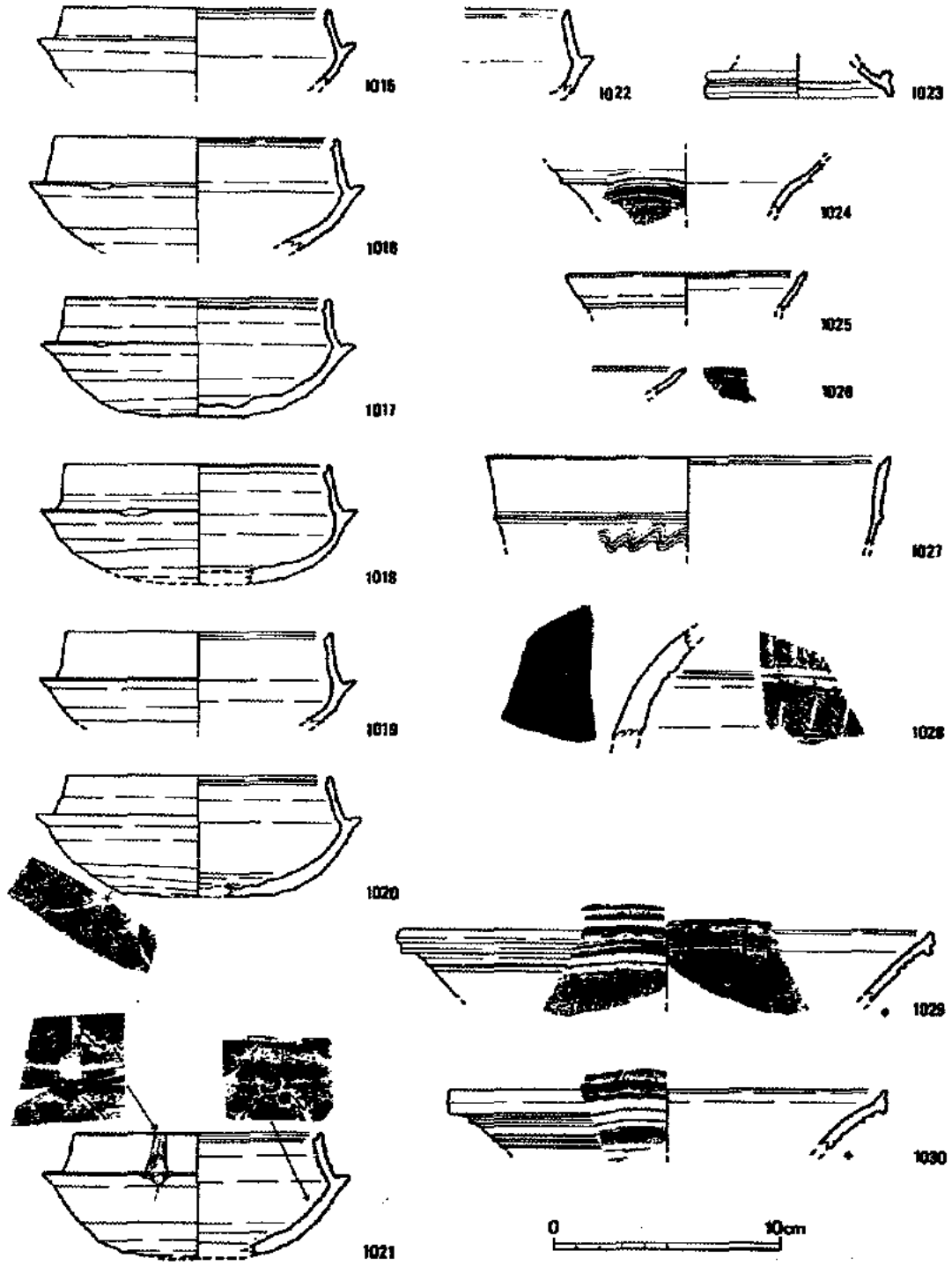
後出のものとして1062の蓋は全く時期はずれとしか言いようがない。

II. 調査の記録



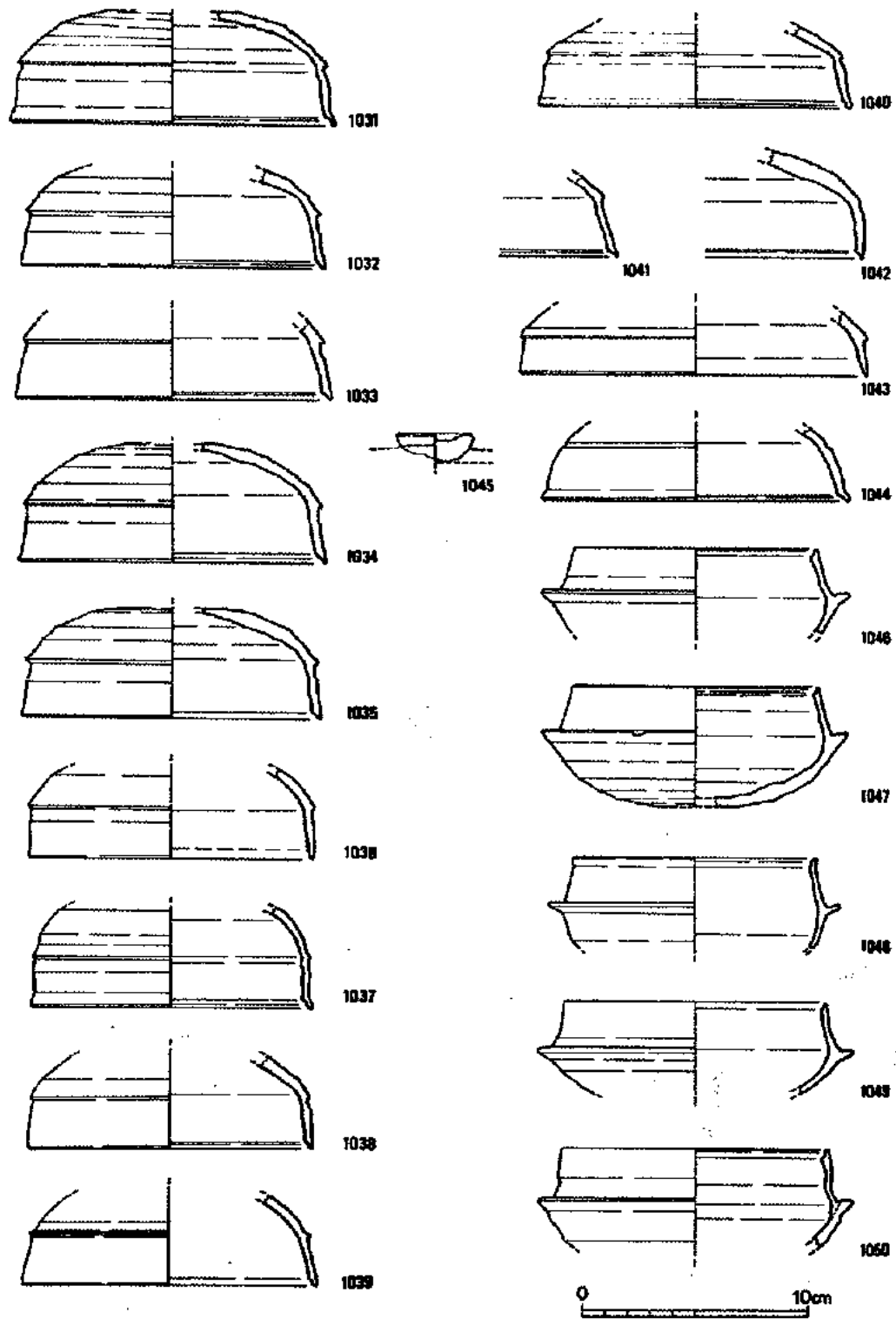
第5図 日焼原1号窯跡出土土器実測図①(1/3)

B. 窯跡



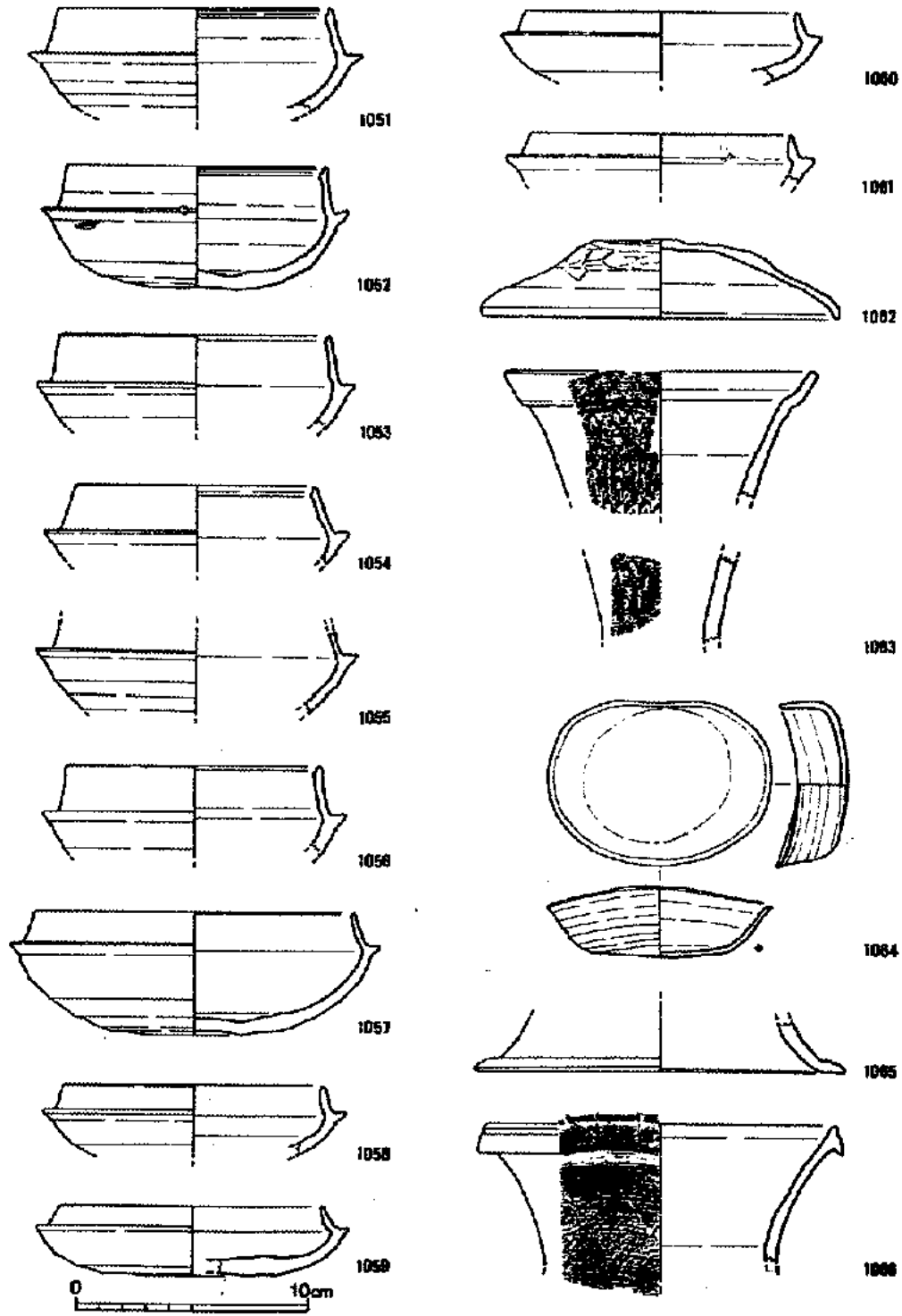
第6図 日焼原1号窯跡出土土器実測図② (1/3, 1/6)

II. 調査の記録



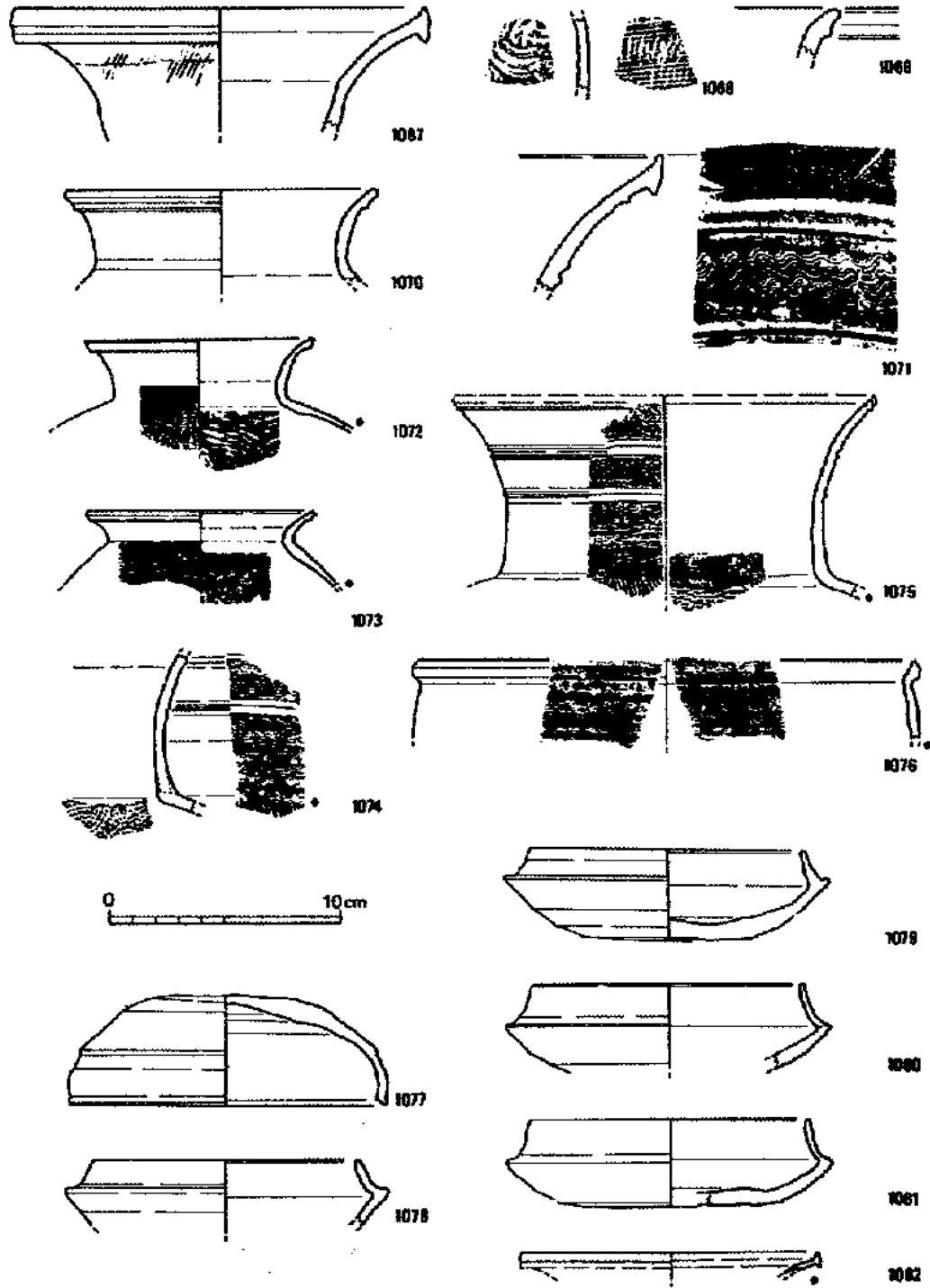
第7圖 日焼原1号窯跡出土土器実測図③ (1/3)

日. 窯跡



第8圖 日燒原1号窯跡出土土器実測図④ (1/3, 1/6)

II. 調査の記録



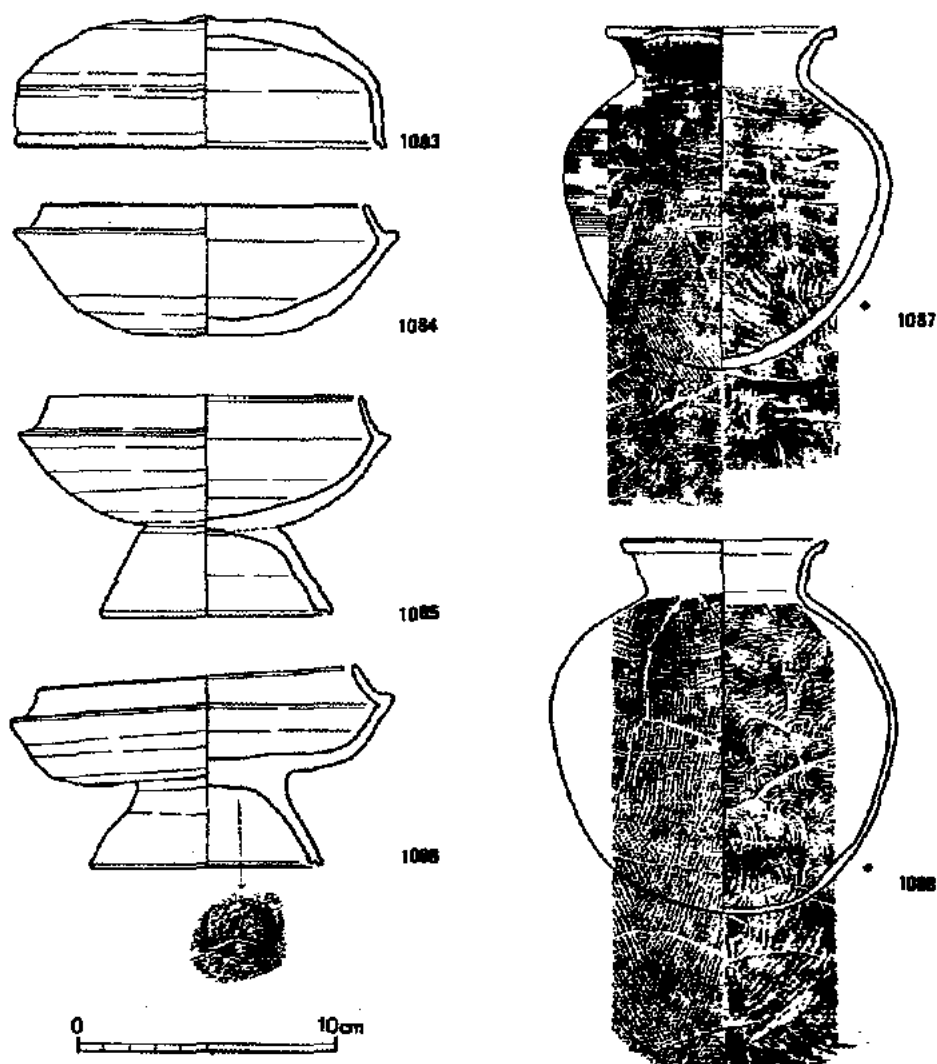
第9図 日焼原1号窯跡出土土器実測図⑤ (1/3, 1/6)

B. 窯跡

・富尻上層出土品（図版16・17、第10・11図1083～1092）

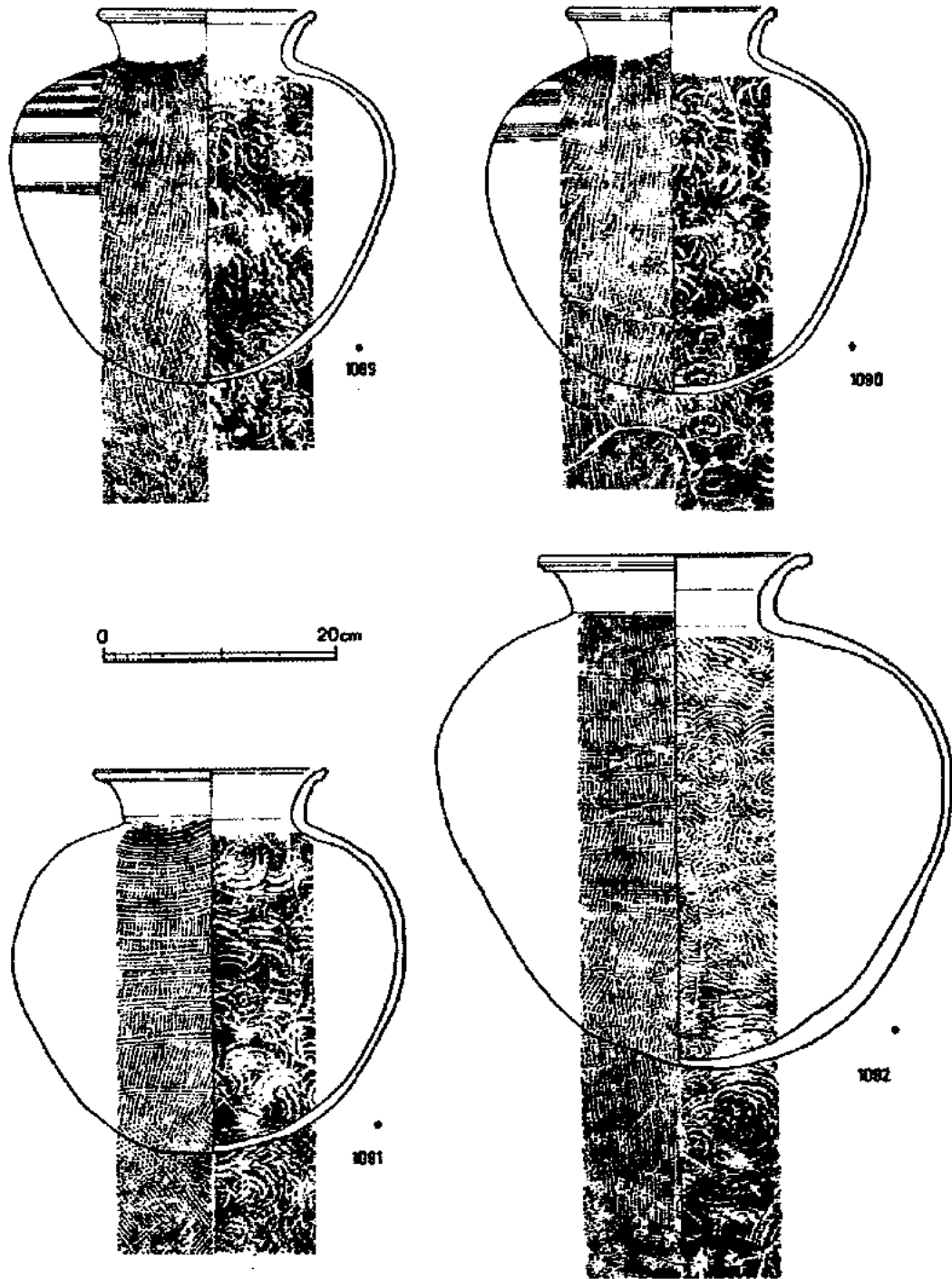
窯尻付近の天井部が陥没した所に投棄された一括の土器である。2～4号窯の作業期間中になされた行為であろう。坏蓋・坏身が各1、高坏2、甕6がある。この器種の組合せ、あるいは投棄された場所とを鑑みれば、これらが偶々焼き損じたものをまとめて捨てたものであるとは考えにくい。むしろ、何か祭祀的な意味あいを感じられる。

なお、ヘラケズリ方向のわかるもの25点中、右（時計）回りは10点であり、坏蓋12点中7点、身12点中3点の内訳となる。後出の土器では12点中4点であった。



第10図 日焼原1号窯跡出土土器実測図⑤ (1/3, 1/6)

II. 調査の記録



第11図 日鏡原1号窯跡出土土器実測図⑦(1/6)

K-1 (図版6、第12図)

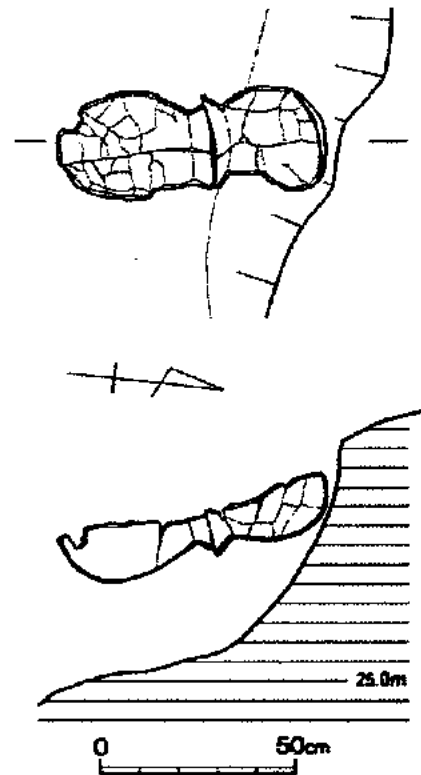
1号窯前庭部の焚口より東方1m付近にある。前庭部掘り方の内部で、検出壁面上端より20cmくらい下にあるが、上半は削平されて存しない。完形にて存した時は検出面より上方に出たはずである。床面からは50cm程浮いている。この甕を置くための掘り形は確認できなかった。つまり、前庭部がある程度埋まっただけで、くぼみとなった所に2個の甕を据えた(置いた)ものと思われる。

甕はN-8°-Wの方向に北側を高くして、15.5°の傾斜角で置かれていた。2個のほぼよく似た形態の土師器甕が口を合わせており、2個ともに上半部を削平されている。北側の高い方を上甕、南側を下甕としておこう。上下合わせて総長70cmになる。甕棺としてのあり方と同じ埋置状況であるが、これが果たして甕棺であるのか、全く別の用途のために置かれたのか、判断しえない。しかし、多分に後者と思われる。

時期的には、1号窯本来の時期とは関係なく、灰原1層から出土した1057~1061の6世紀後半代と1062の8世紀前半代という2つのいずれかに属するとみてよいだろう。4号窯の類似品等を考えると前者の可能性が高い。なお、同形状の破片が灰原1層からも出土している。

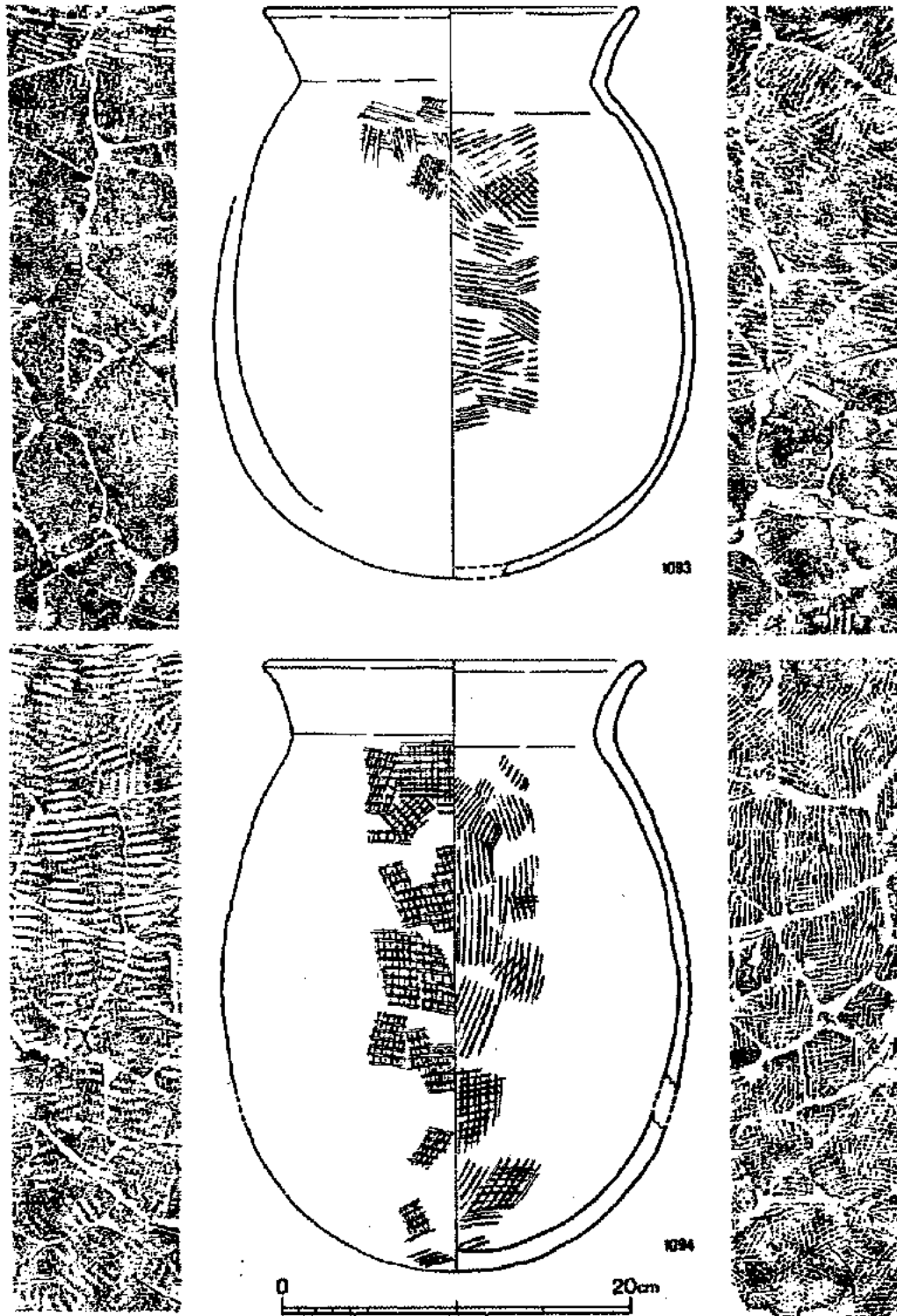


Fig.2 日焼原1号窯跡



第12図 日焼原1号窯跡前庭部上層出土
K-1出土状態実測図(1/20)

II. 調査の記録



第13図 日焼原 K-1 実測図 (1/4)

B. 窯跡

上壺(図版38、第13図1093) 土師器甕である。約1/2の残存で、復原口径21.4cm、器高34cm。胴部最大径はやや歪つになっているため反転すると合わなくなるが、26.5~27.8cmを測る。口縁はごく僅かに外反しつつ開き、端部を丸くとり。肩部はほとんど張ることなく胴部へ移行し、かなり下膨れとなって丸底で終わる。胴部は内面がほぼ平行に近い弧状の当具痕、外面は擬格子の平行タタキを施す。口縁周辺は回転なでである。砂粒をかなり多く含む粗い胎土である。明茶色を呈し、外面胴部下半に黒斑がある。

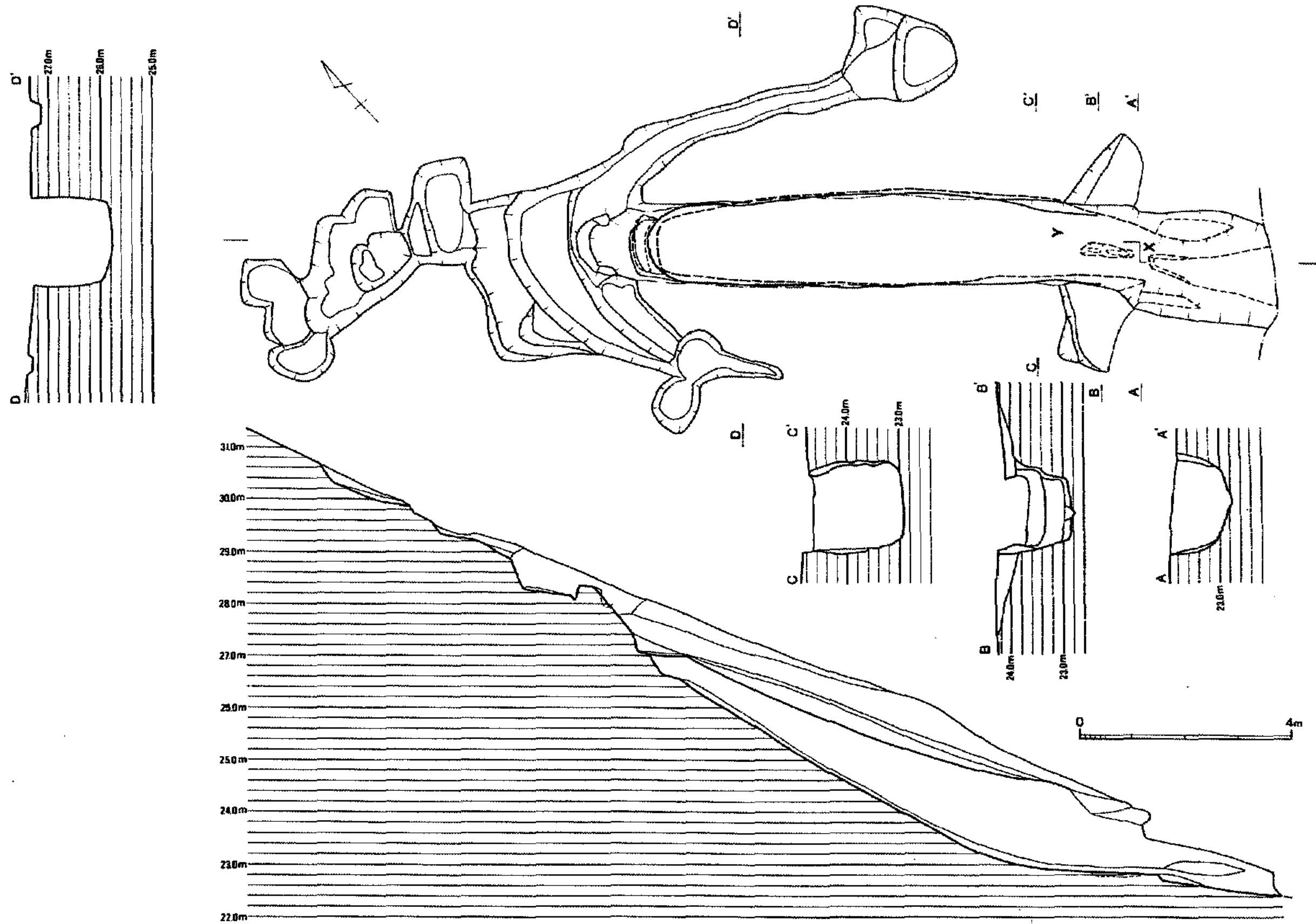
下壺(図版38、第13図1094) 1093より多めの2/3程が残存する土師器甕である。復原で口径21.9cm、器高35.8cm、胴部最大径27.0cmを測る。大きく外反する口縁部は端部を四角くとり、肩部はほとんど張らずに胴部へ移行して分厚い丸底で終わる。胴部はやや下膨れに近い形状を呈するが1093ほどではなく、全体では倒卵形と言ってよいだろう。調整は1093と全く同じである。胴部2ヶ所に黒斑があり、1は中位で径6cm程、もう1つは中位~下位で $16 \times 8 + \alpha$ cm程のものである。この2つは相対する位置にはない。

2. 2号窯跡(図版7~9、第14・15図)

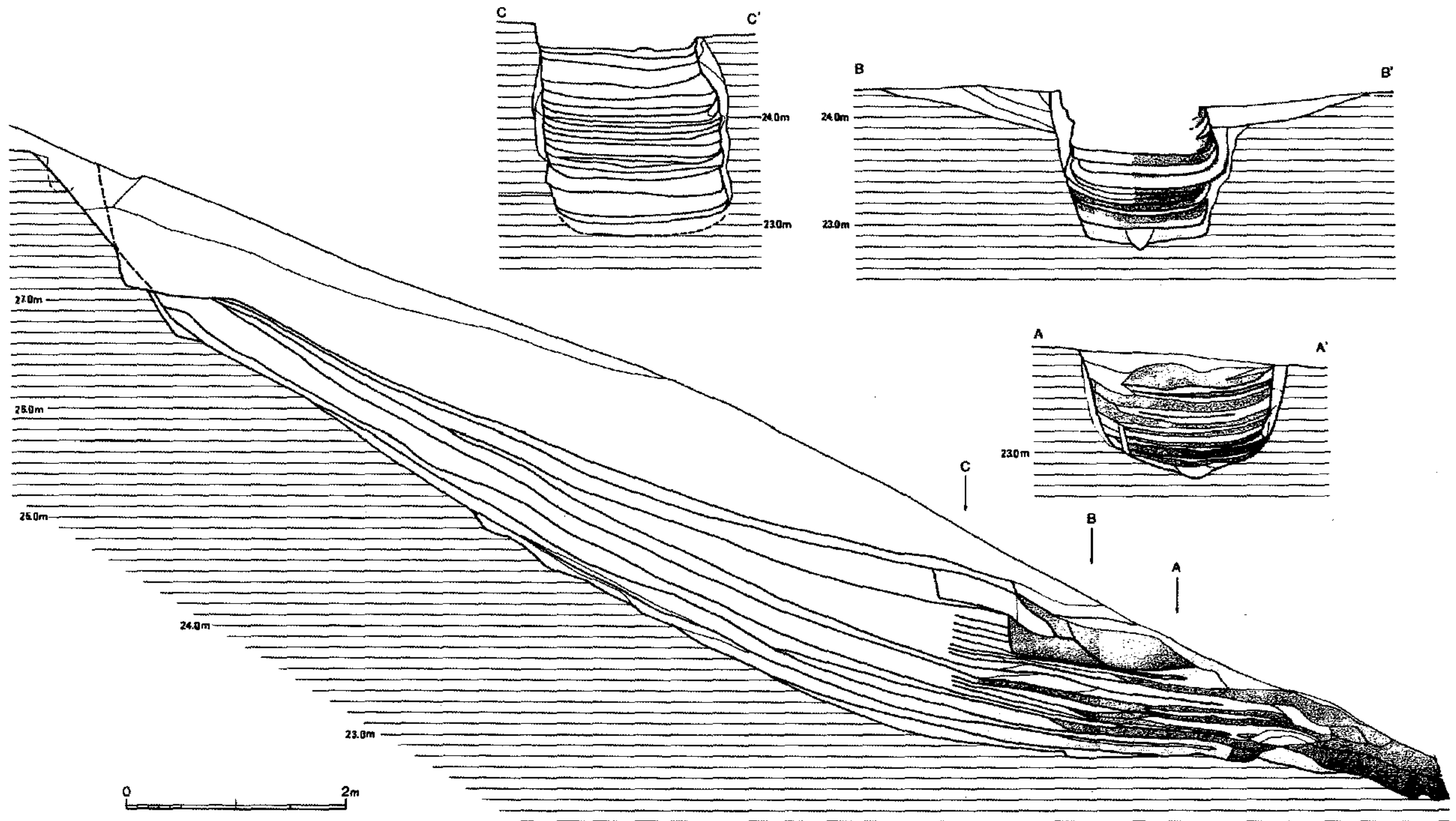
1号窯跡の東方6~7mの所にあり、主軸をN-47.5°-Wにとる。灰原の所は調査着手前に削りとられていた。排水溝は「八」の字形にとりつき、窯後方には1号窯と同様の遺構が付属する。結果として20回分の床面の重なりを認めたが、排水溝・窯後方遺構ともに最初から最後まで付設されていたのか否かはわからなかった。窯本体は長い長形状となり、それにやや主軸をかえて前庭部がとりつく。操業開始期は焚口がすぼまっている。図示した平面形は破線部分が操業当初、実線は1~3次のもと考えてよい。その途中の4~19次については明確にしない。

前庭部は、各操業時の窯本体のあり方、つまり焚口がどこに位置するかで、各床面ごとに異なることになる。いまは、焚口の前面部分をさすとするのみで、カットもあることから各床面ごとにそのあり様を示すことはできない。ただ第14図中のX地点の所は20次、Y地点は1~3次での焚口と考えられるので前庭部のとりつき部分としてよいだろう。鳥翼形もしくは矩形の広がりや段とがある。灰原へ続く部分として見れば黒色土と赤色土とがほぼ交互に堆積していた。灰と焼土とをかき出したものである。

焚口についても、その箇所は土層断面においてほぼ押えられるが、各床面時の平面的あり方は捉えられなかった。1~3次と20次については前述のとおりである。3次の焚口は4~7次床面を切って35cm程の段がつく。1・2次も段がつくので、新しくなるとこのように焚口部分の改造を行ったものであろう。焚口幅は20次で1.0m、1~3次で1.3mを測る。

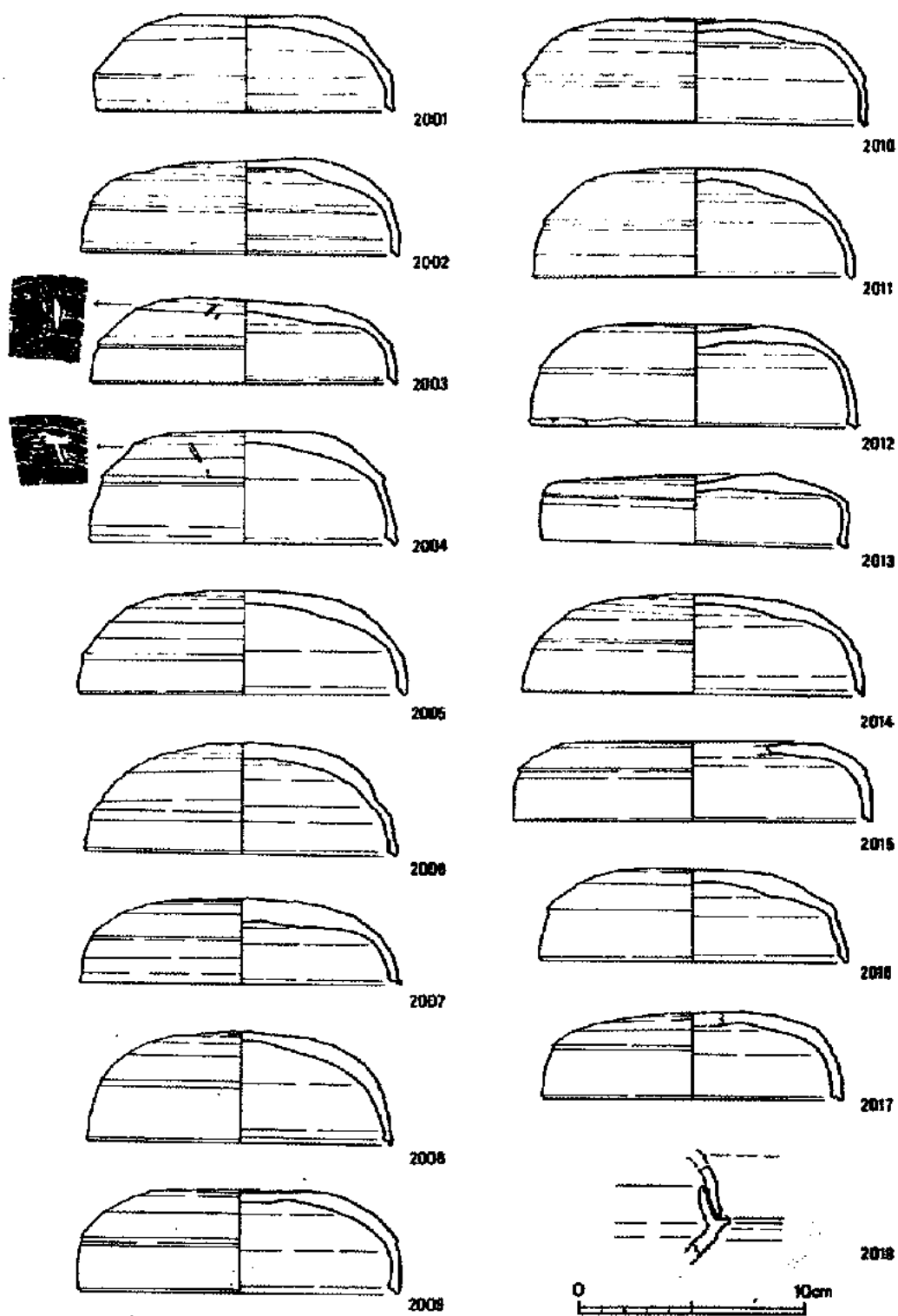


第14图 日烧原2号窟跡实测图 (1/80).



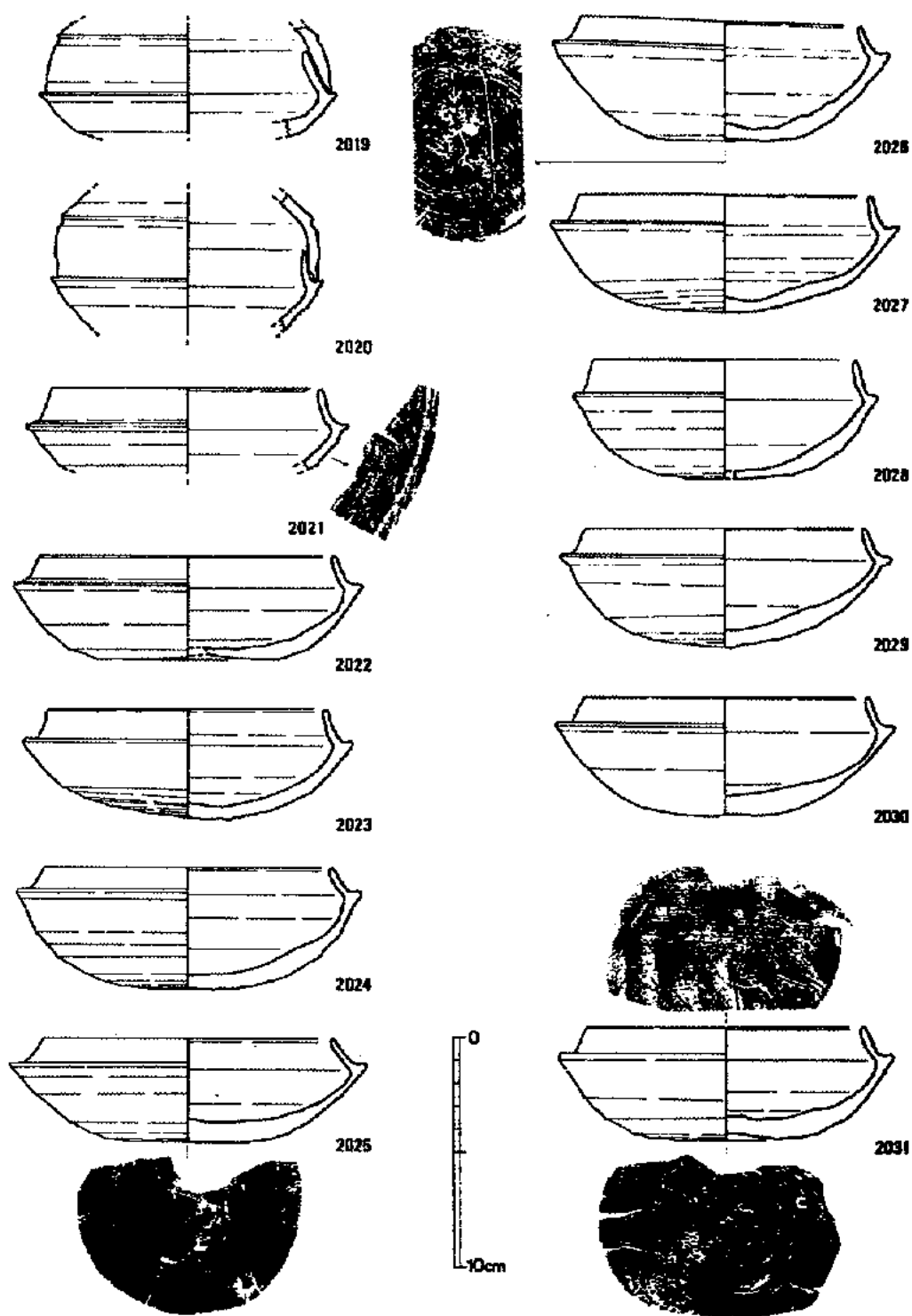
第15图 日烧原2号窑跡断面图 (1/40)

B. 窯跡



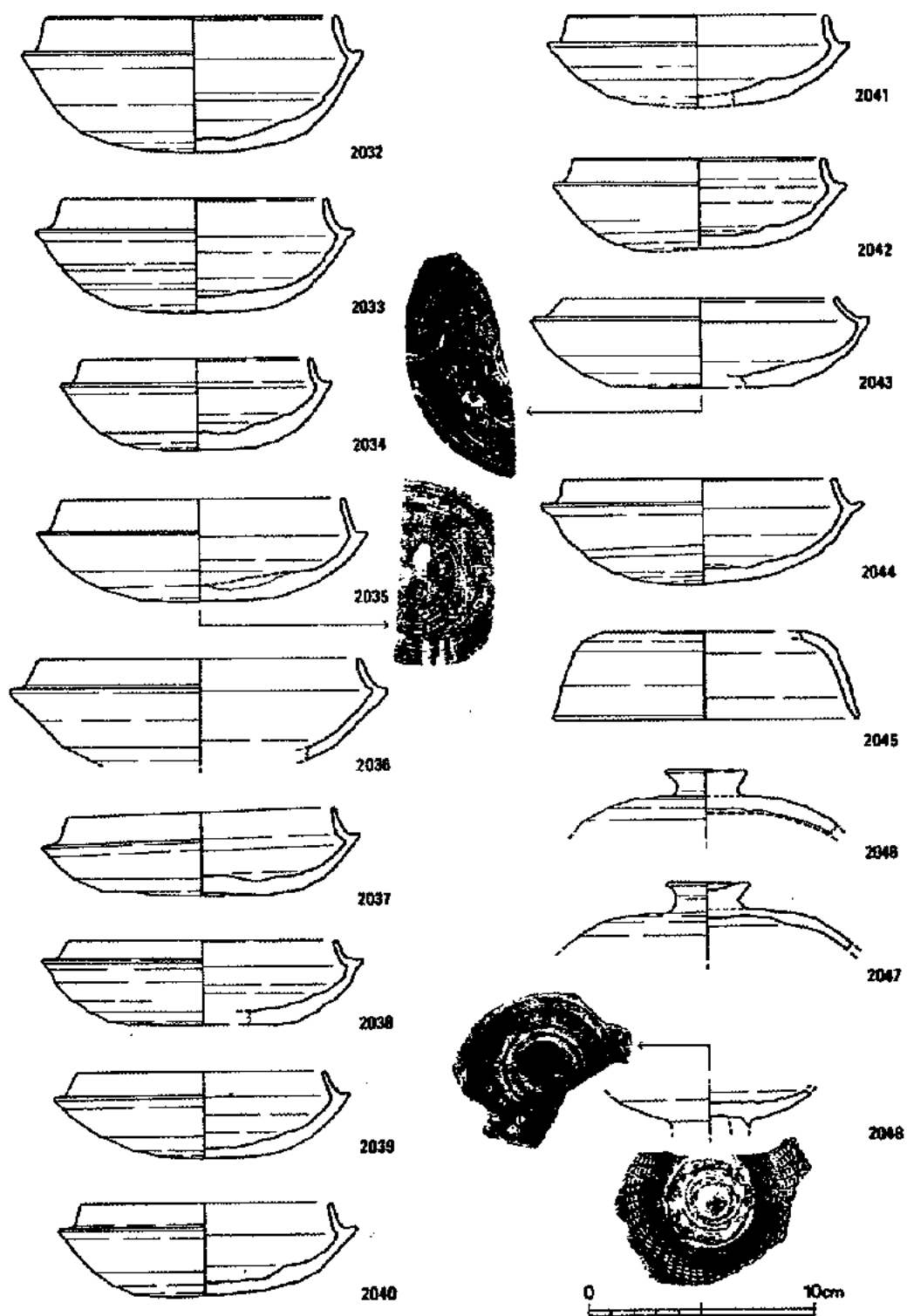
第16图 日烧原2号窯跡出土土器実測图①(1/3)

II. 調査の記録



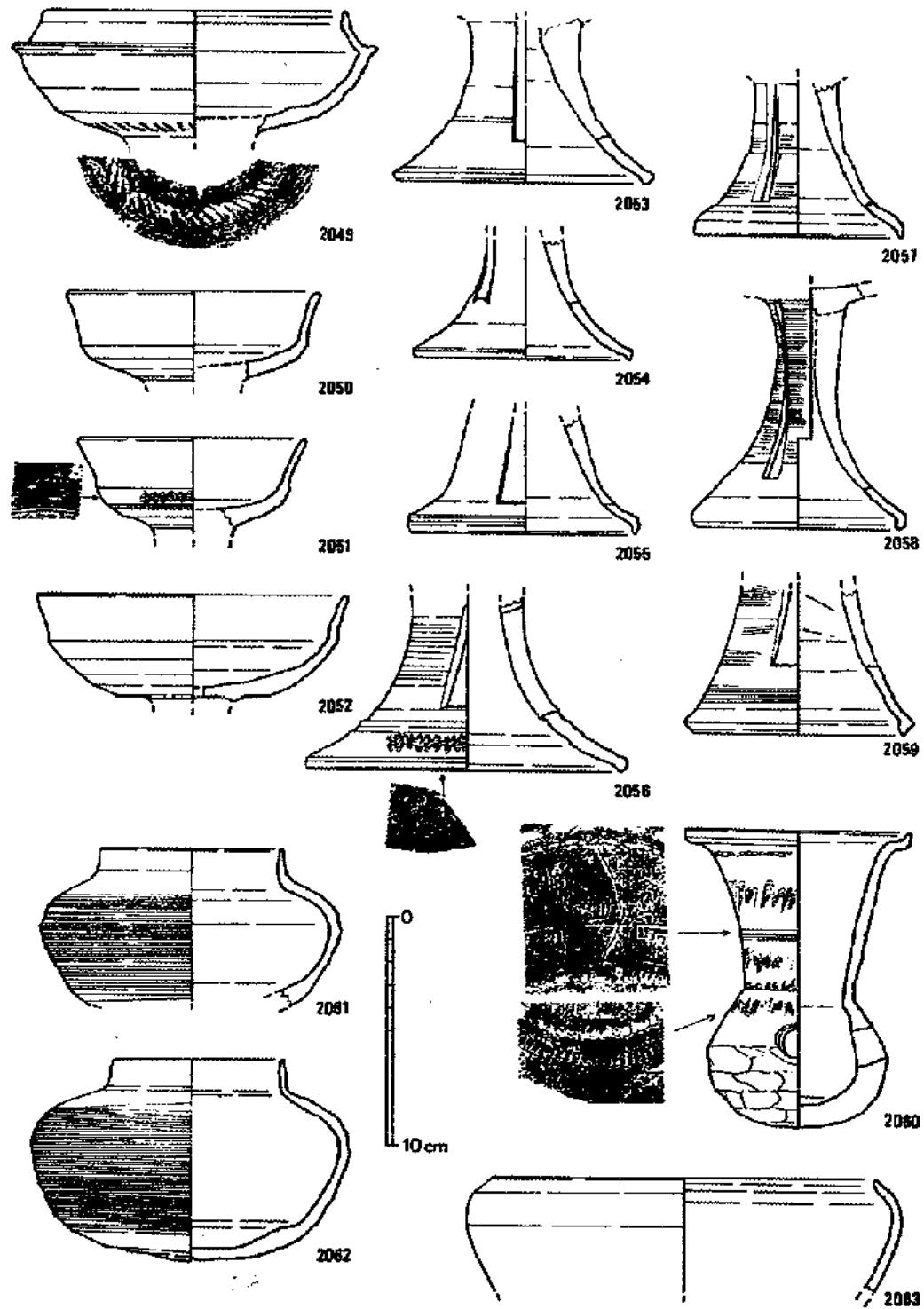
第17図 日鏡原2号窯跡出土土器実測図② (1/3)

B. 窯跡



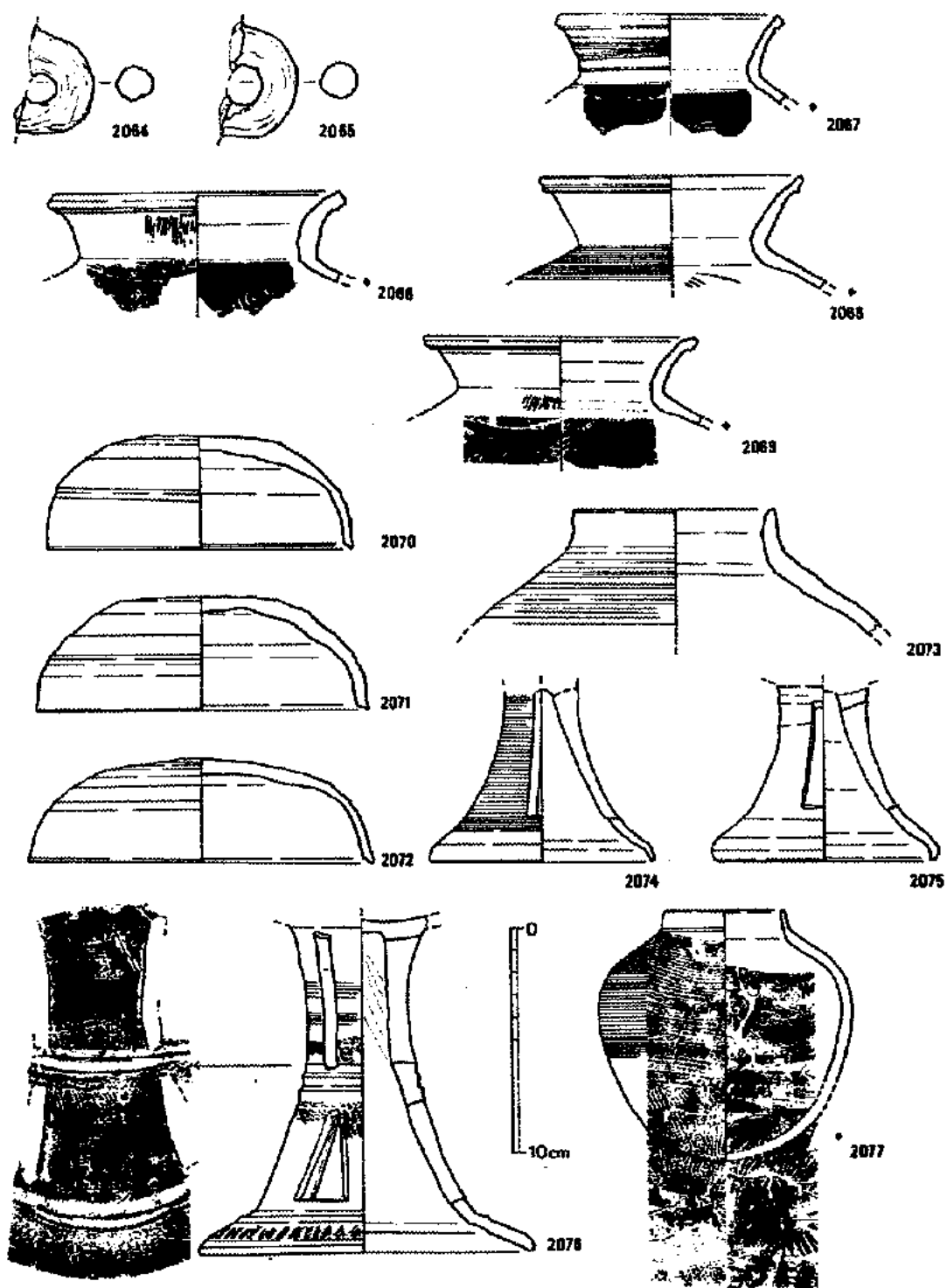
第18图 日烧原2号窯跡出土土器実測图③ (1/3)

II. 調査の記録



第19図 日鏡原2号竈跡出土土器実測図④ (1/3)

B. 窯跡



第20图 日烧原2号窯跡出土土器実測図⑤ (1/3, 1/6)

II. 調査の記録

坏の蓋と身とは2018~2020の如くにセットとして焼成されたことは間違いない。

高坏は有蓋と無蓋とがあり、有蓋の2049は口唇内面に段を有する。その底部に施された刺突文原体は8本の橢圓である。2048の刺突文も8本橢圓である。これの内面は同心円当具痕らしい。これらの蓋は2046・2047のような揃み付きであろう。無蓋のものは小型と中型とがある。2056は長脚の二段透孔になるのかもしれない。これのみ4個の透孔で他の2053~2055、2057~2059は三方透しである。

甕2060は波状文も粗くてつくりは雑な様だが、観るにはたえる佳品としてよい。ずっしり重みがあり正立で転ばない。

甗は2061・2062ともに蓋をしての焼成であり、2062はその蓋の口径10cm程とわかる。

鉢2063は鉄鉢形になろうか。右排水溝出土品にも鉢がある。

提瓶は環状の耳のみがある(2064・2065)。

甕は肩部外面はカキ目を施し、内面には同心円当具痕を見る。みな灰被りで正立にての焼成ということがわかる。別に口縁下に波状文をもつ破片がある。

排水溝から出土した甕(2069)は肩部にかかった緑色の自然釉が美しい。

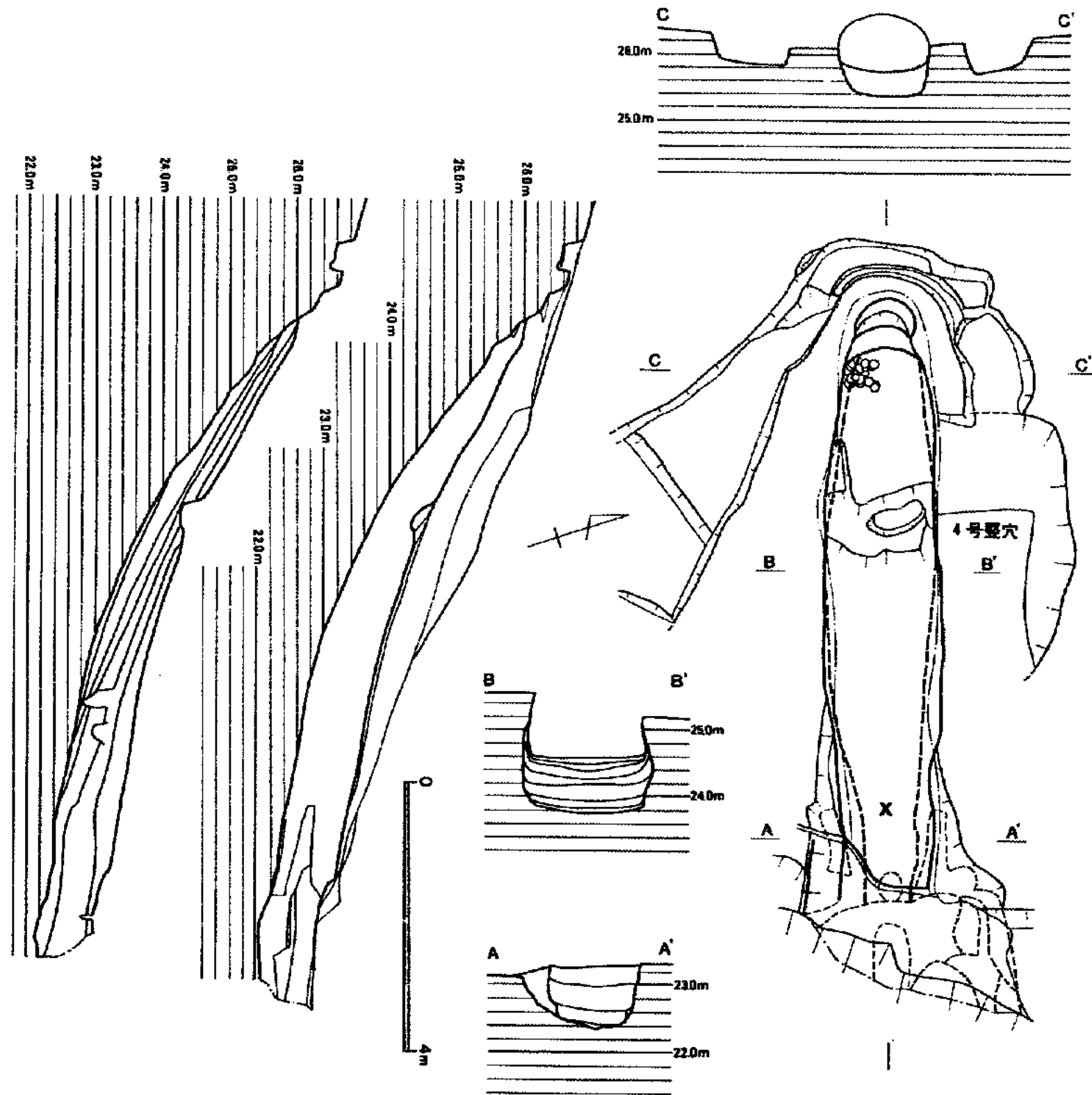
窯後方遺構から出土したもの(2070~2077)のうち、2075や2076は各々2057、2076によく似ており、窯本体と同時期の所産であろう。2076は長脚二段透しである。壺・甕も出土している。

ヘラケズリのあり様は、43点のうち時計回りが13点であった。坏蓋は18点中9点、坏身は23点中4点という内訳になる。

紡錘車(図版37、第42図) 1次床面の窯尻平坦部から出土した。かんらん石に似た蛇紋岩製である。平面形は全くの正円ではなく、上面径3.6~3.8cm、下面径4.2~4.4cmの直径を測る。孔径0.65~0.75cmで厚さ1.1cm、重さ34.65g。裏面には擦過の条線が多数みえるものの表面にはごくわずかしみえない。この紡錘車が何故に窯内の床面上に遺存したのかわからない。あるいは窯尻平坦部の出土位置は煙出し口の直下にあたるので、廃窯時にそこから投げこまれたことも考えられる。

3. 3号窯跡(図版10・11、第21~23図)

2号窯の北東8m付近にあり、主軸をN-72°-Wにとる。前庭部の前面は調査着手時にすでに削りとられていた。7つの床面を確認したが、5~7次と1~3次とでは平面プランが異なっている。5~7次は焚口が狭く焼成部中央付近で胴張りとなる。1~3次では焚口が広くてずん胴の形状を呈する。排水溝は「ハ」字形に付属する。右側は4号竪穴に切られ、左側はかなり広がり伸びて2号窯の近くまで達し、その先端付近を3号竪穴と2個のビットに切ら



第21图 日烧原3号墓跡実測图 (1/80)

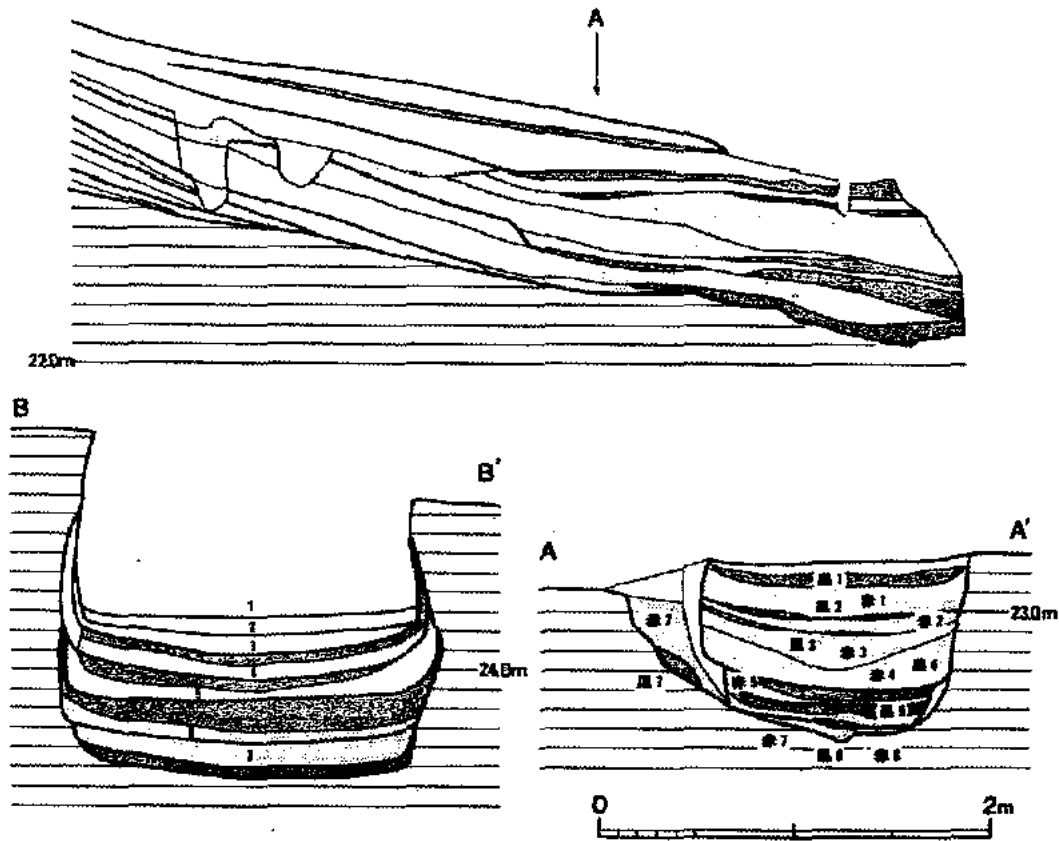
B. 窯跡

れる。排水溝を含めた全長は11.6mを測る。

前庭部は大半を削られているが、1～3次・4次・5～7次の各次でその形状が少し異なる。しかし、全体としては4号窯の前庭部のようになるのだろう。5～7次は第21図の破線部分をそれとしてよいと思われる。東側に段があるのは1～3次の時のものかもしれない。残存最大幅3.3m。4次は第21図のX地点より手前側が前庭部となろう。1～3次は5～7次とあまりかわらない位置となる。

焚口の形状は、操業開始期には狭くしていたものが、次第に広がって行く。5～7次では65cmの幅しかないが、4次になると96cm、1～3次では123cmとなる。各床面次ともに前庭部との間には段を有する。

燃焼部から焼成部へははっきりした区別が得にくい。床面の傾斜、広がり等でおおよそはわかる。5～7次が1.35m、3・4次が1.1m、2次が1.3m、1次が1.6m程の長さを燃焼部としていたようである。7次ときには焚口のすぐ前方に浅いピットが掘られている。



第22図 日焼原3号窯跡断面図 (1/40)

II. 調査の記録

燃成部は、焚口から3 m付近まではわりと緩やかに登ってゆくが、そこから俄に傾斜が急になってゆき、7次るときで $22^{\circ}\sim 36^{\circ}$ 、1次では $20.5^{\circ}\sim 27.5^{\circ}$ を測る。床面最大幅は1.6~1.8mで、4次るときが最も広い。7次るときで最深部は1.8mを測る。1次るときは床面に不整形の掘込みがあるもののその意味はわからない。

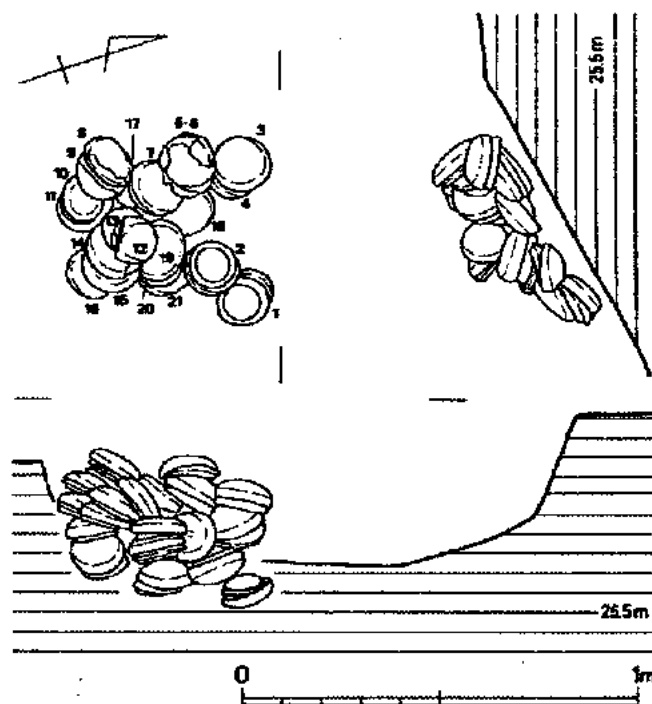
窯尻には3次を除いて緩やかな平坦部がある。焚口から窯尻までは1~7次で8.07~8.93mを測り、2次が最も長い。

煙出しは1~7次ともわりと急で、 $58^{\circ}\sim 66^{\circ}$ の傾斜で立上っている。

最終1次床面には窯尻に近く須恵器環がまとまって出土した。環の蓋と身の21セットがあり、それらは環蓋内に環身をおとしこんだ重ね方であって、1と2が内面を上に向けている以外は全て蓋の外天井部が上を向くようにして置かれていた(図版11、第23図)。これは焼成時の姿そのままではなく後に置いたものである。3と4、5・6・7・17、8~11、12~16、19~21は各各がひとまとまりの単位として重なっている。

排水溝は右側が3 mまで伸びた所で4号竪穴に切られている。左側は2.5 m付近まで伸びてから広く浅くなってゆき、6 m程の所で窯の主軸と直交するように屈折してのびてゆく。その先端までは9.3mを測る。先端近くは3号竪穴に切られている。

窯後方遺構は付属しない。



第23図 日焼原3号窯跡環出土状態実測図(1/20)

B. 窯跡

出土遺物（図版23～30・37、第24～30図）

前庭部が削平されていて7次の床面しかなかったのに遺物が多いのは、最終床面（1次）に21セットの坏が置かれていたことも一因である。排水溝出土品を最後として器種ごとに図示する。坏蓋・坏身・高坏・甃・壺・鉢・甕・提瓶？・器台がある。

坏蓋は天井部に丸みのあるものと扁平なものの双方を見る。その形態差は新古を意味していないようだ。口縁内側には沈線もしくは段が入り、そのあり方にも程度差がある。窯壁の一部や窯体内での噴出物の付着したものが多い。3010には外天井部に3本の棒の先端で押しつけたと思われる痕が付いている。3014は体部に成形時の接合痕のわかる部分がある。3015と3027の口唇部外面は何かの固形物体の上に押しつけてこするようにして面をとっている。その意図するところはわからない。3023・3024の外天井部にはワラの茎のものらしい圧痕が付いている。ヘラ記号ではない。3025は撮みが付いていたらしい。3026には別の坏の破片が融着する。3030の天井部は静止ヘラケズリで、これは壺の蓋になろうか。

坏身は総体に立上りがやや高い方である。しかし口唇部は全て丸く納めており、段などは見られない。受部の所に蓋をして焼成した痕跡を留めるものがいくつかある。3032の受部外端の所には指か何かで押えてへこんだ部分がある。3040はヘラケズリは右回りだが、回転では左回りに施されているのがわかる。また断面で見ると、粘土帯貼り合わせの痕跡が伺える。加えて口縁の一部に補修痕をみる。

〈1次床面出土の坏群〉

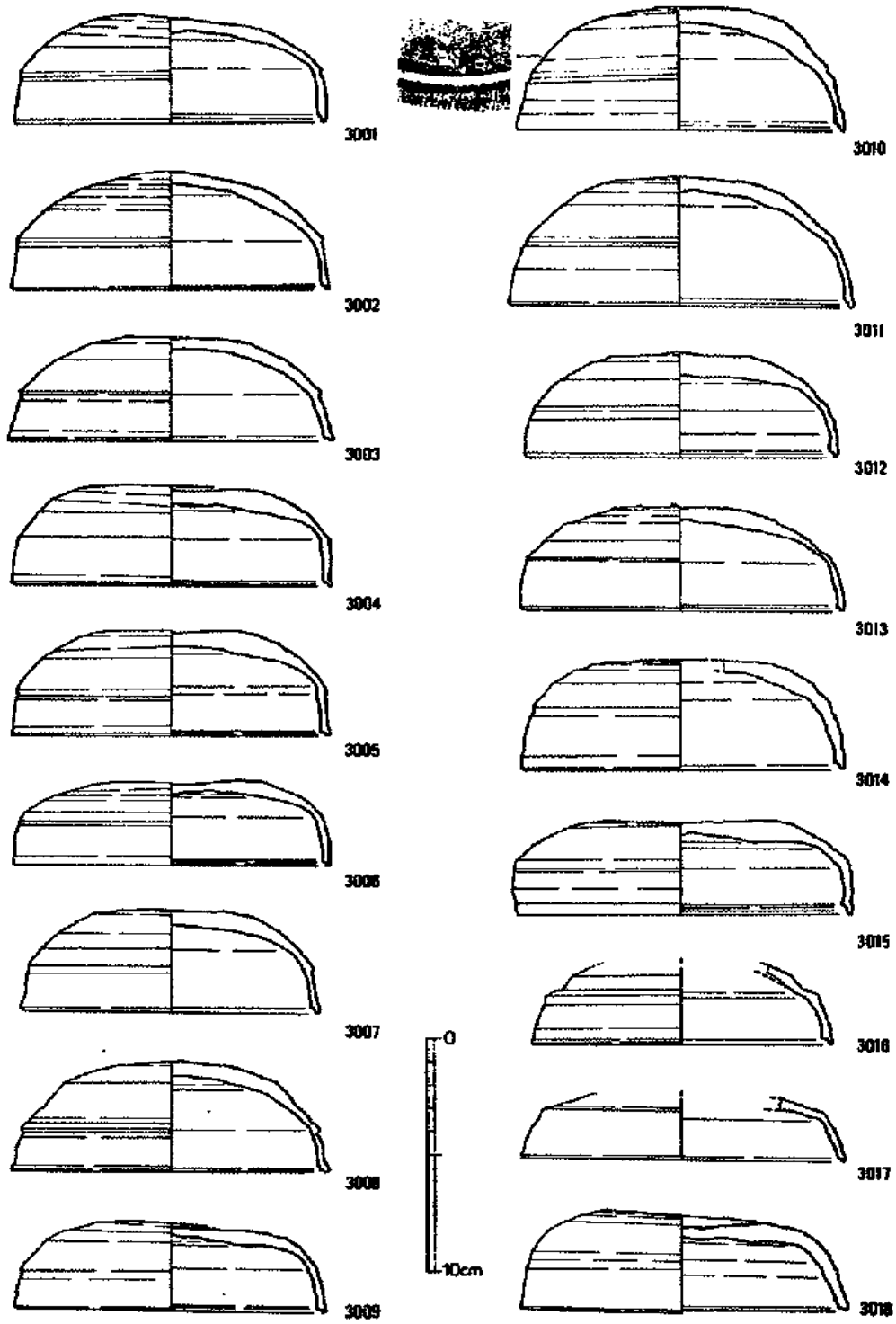
3045～3086は、3045・3046が第23図の坏1、3047・3048が坏2というように順次対応させている。これら21セットはほとんど全てが完形で、器形・法量ともよく似かよっている。

蓋は口径13.2～14.8cm、器高4.0～5.2cm、身は口径11.1～12.4cm、器高4.3～5.6cm、受部径13.3～14.7cmの範囲に納まる。3056・3068は立上り部分に補修の痕跡がある。3061・3063・3070の外側にあるのはヘラ記号とするより偶然の擦過痕とすべきであろう。3064の立上り外面にはひっかき傷みたいなものがある。3065の内面には整形の最終時に、つまみあげた時の指のあとと思われる粘土のケバ立ち痕が1.3cm間隔で3個ある。この痕跡は他のいくつかの個体にも見られる。3067の内面には3010のそれと同じような押圧痕がある。3071と3083の内天井部には同心円当具痕らしきものが見えるけれども断定はできない。坏2・12・13・20・21の蓋は各々作りがよく似ている。

高坏は坏部・脚部ともにヴァリエーションに富むようだ。脚部部の形状は丸く納めるものが多いが、全体に多様である。透孔は3091・3096が4個で、他は3個になる。3093・3097の坏部との接合面には浅い溝を掘り込んでいて接着がしやすいようにしてある。

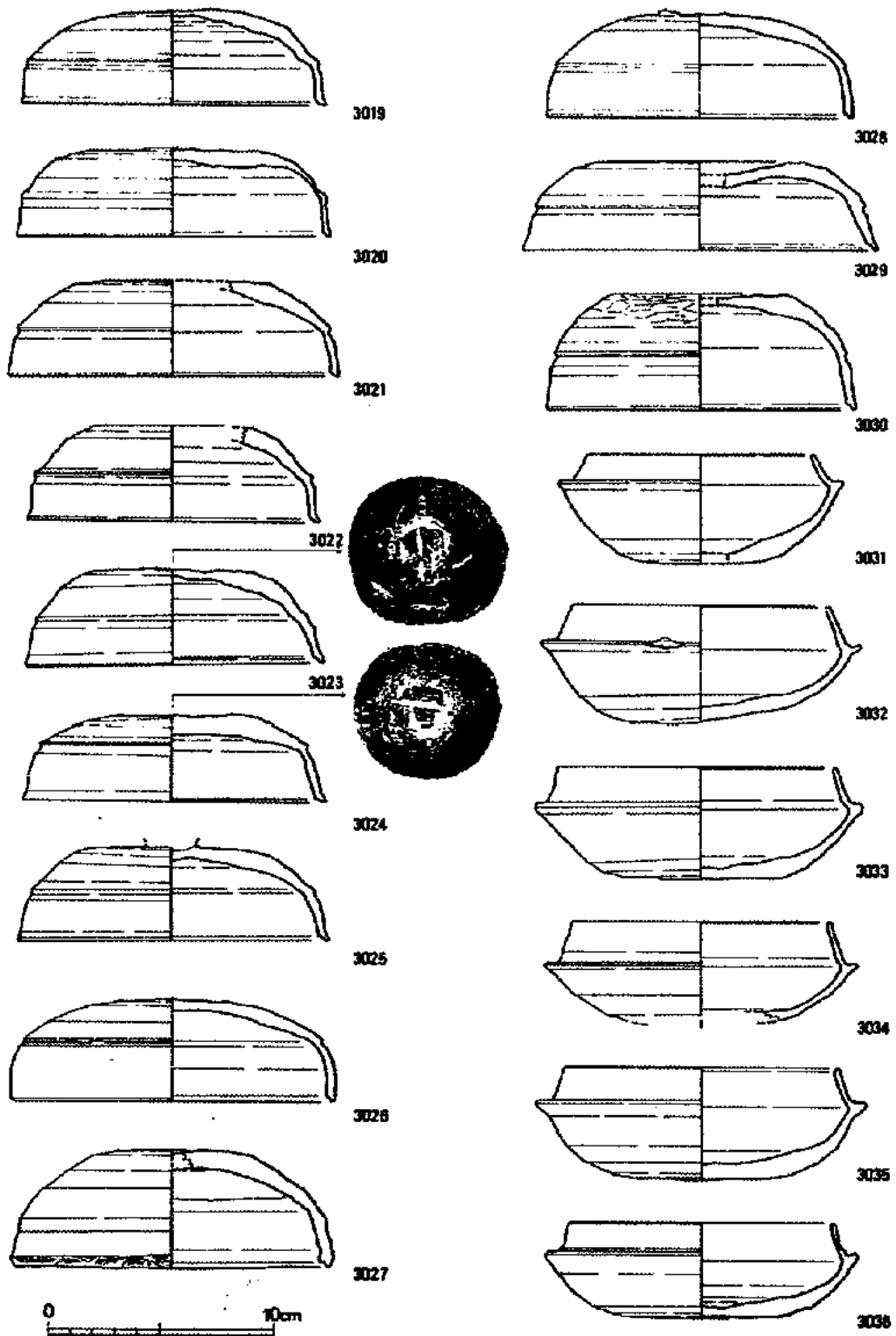
甃3098は細身のつくりである。

II. 調査の記録



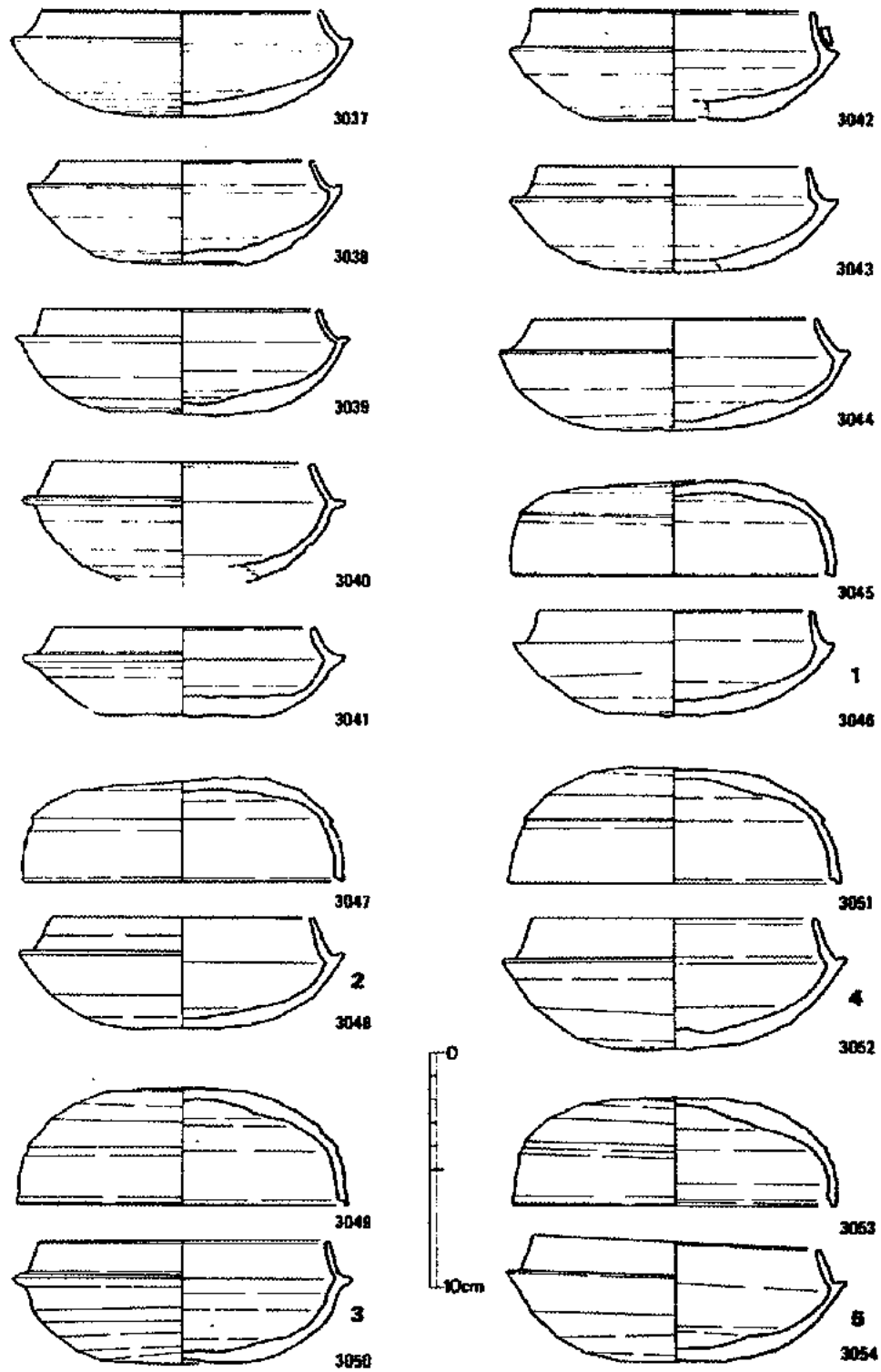
第24図 日焼原3号竈跡出土土器実測図① (1/3)

B. 甗 钵



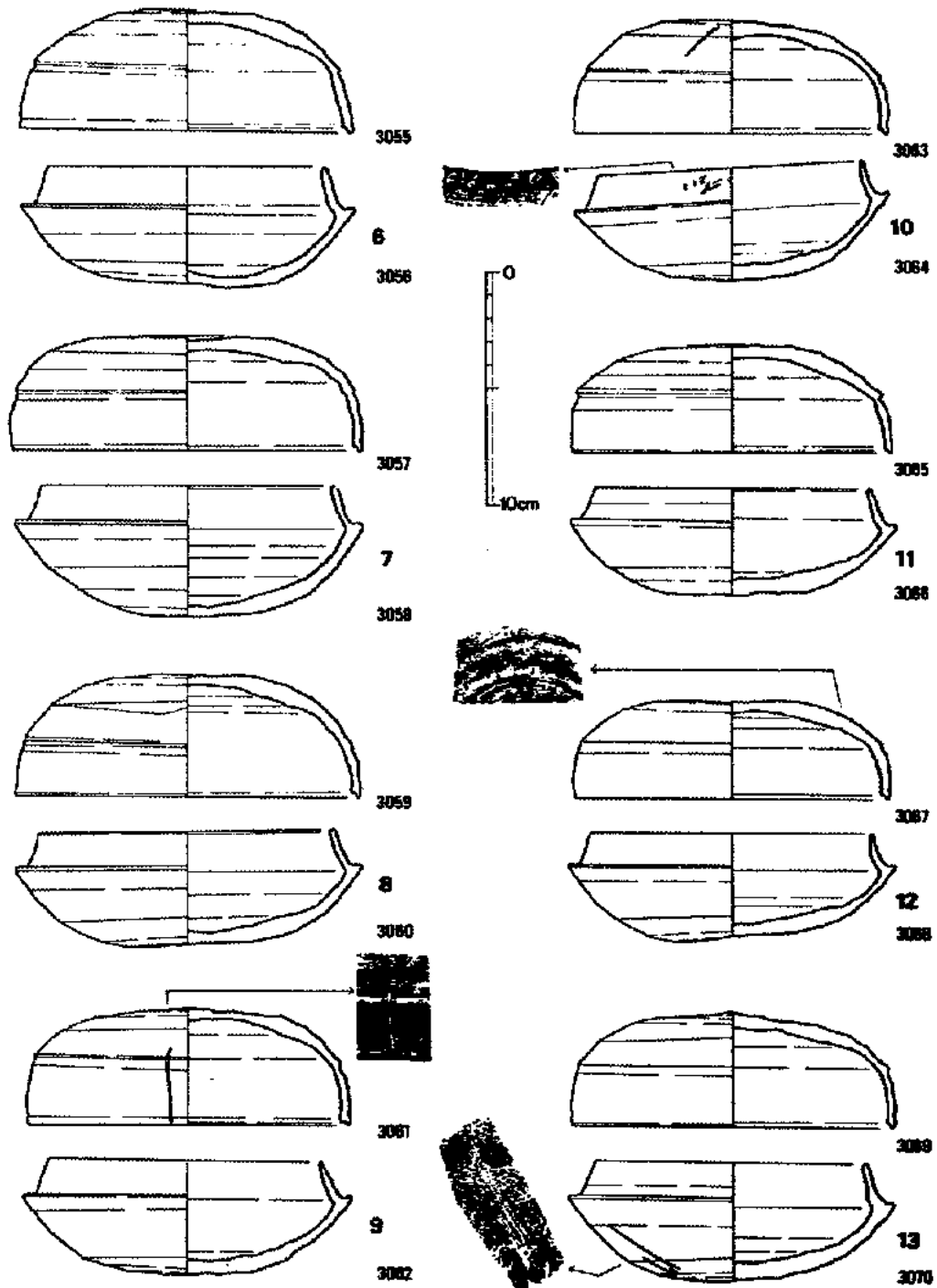
第25图 日烧原3号甗钵出土土器实测图② (1/3)

II. 調査の記録



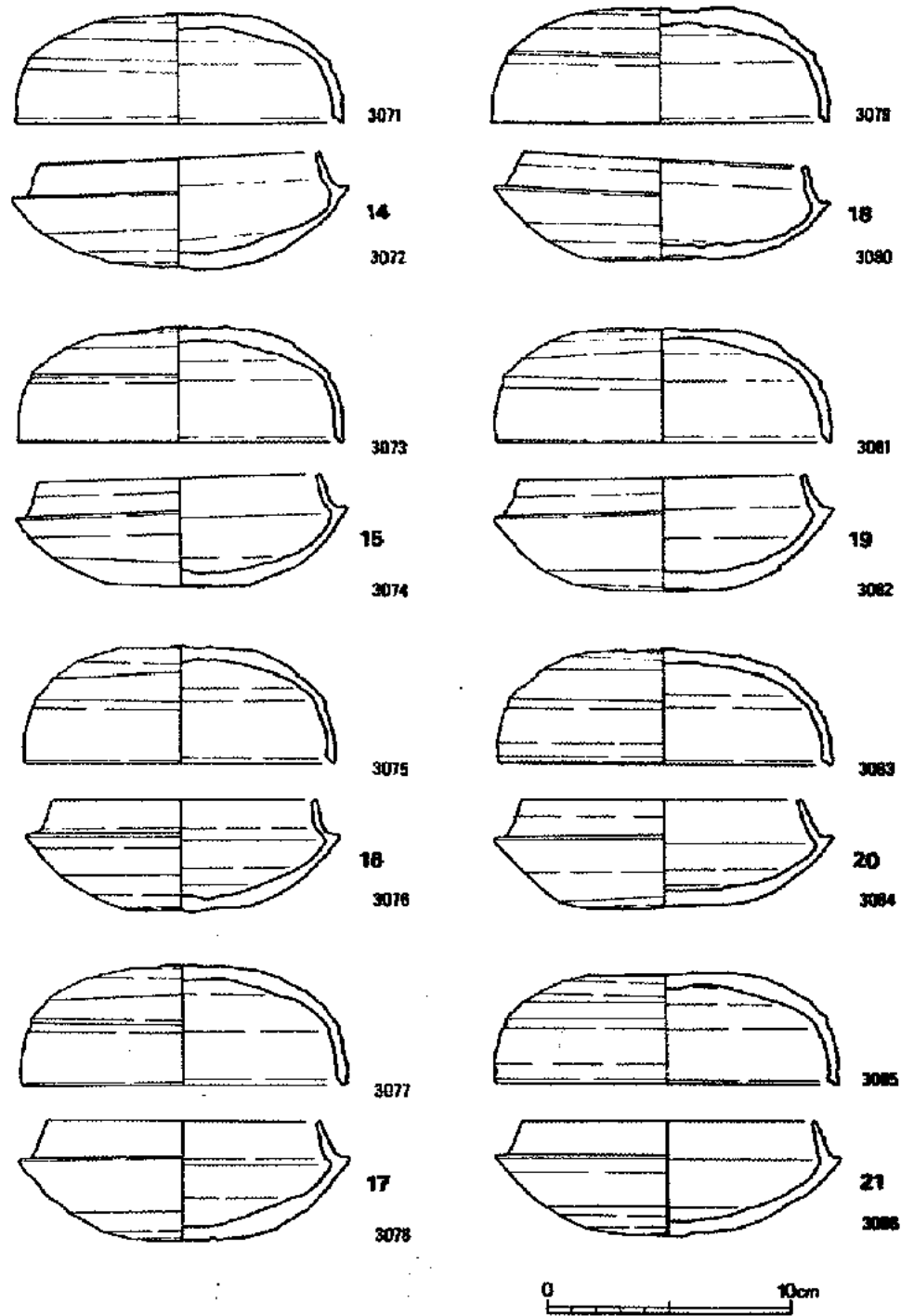
第26図 日焼原3号窯跡出土土器実測図③ (1/3)

B. 窯跡



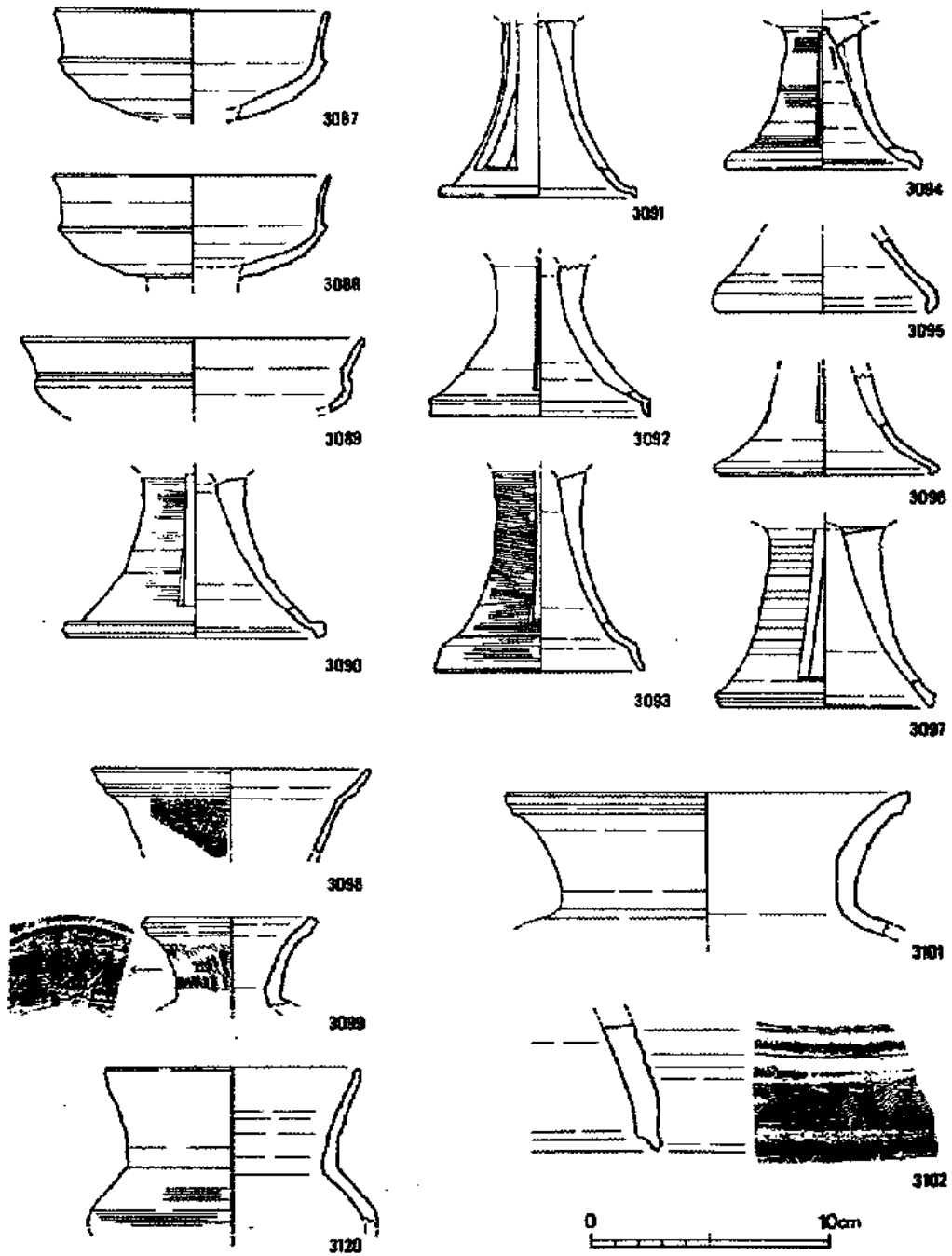
第27图 日烧原3号窯跡出土土器実測图④ (1/3)

II. 調査の記録



第28図 日焼原3号窯跡出土土器実測図⑤ (1/3)

B. 窯跡



第29圖 日燒原3号窯跡出土土器実測圖⑥ (1/3)

II. 調査の記録

蓋は3100のほか3099も小型品なのかもしれない。ただ3099は提瓶の可能性もある。

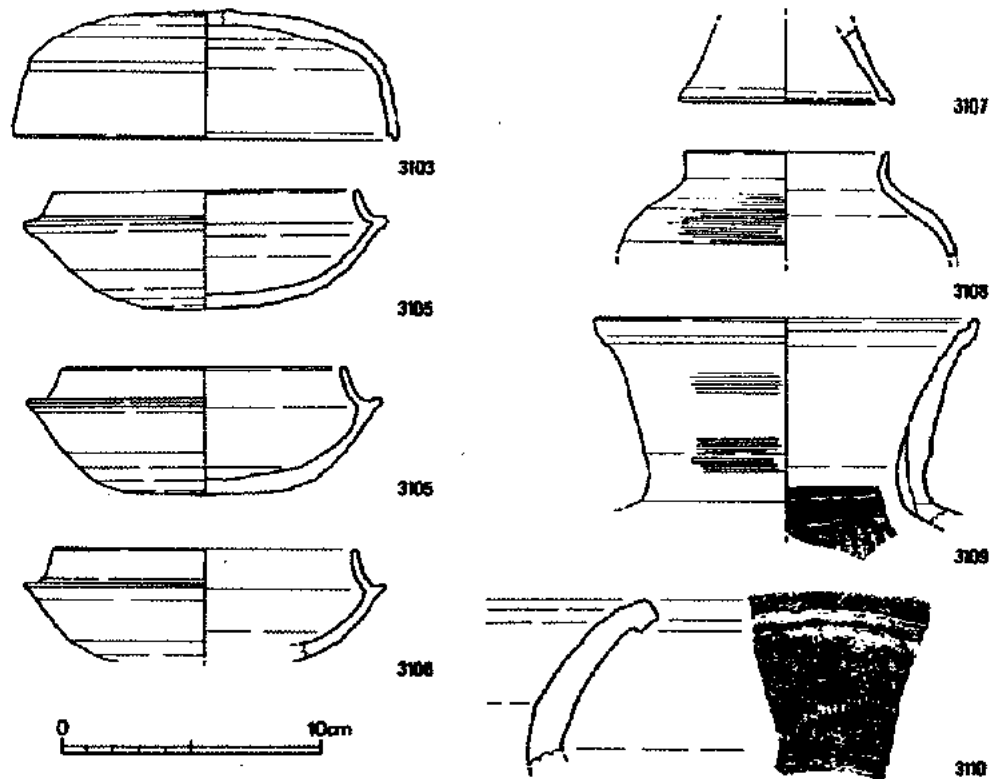
埴3101は整美な作りである。

器台3102はかなり大型となろう。波状文も乱れはない。

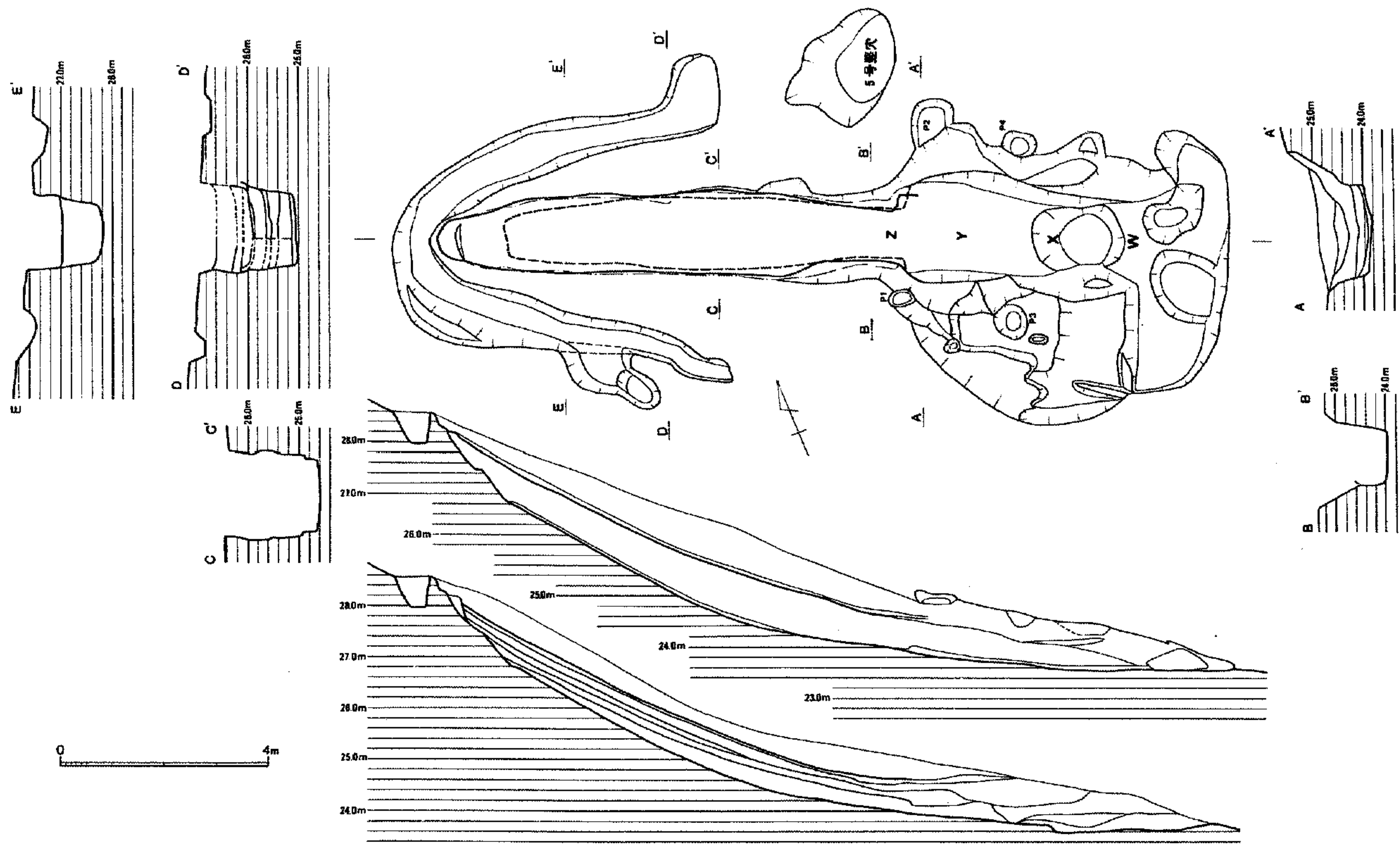
排水溝出土の土器(3103-3110)は全て左排水溝から出土した。時期的には3号窯本体の土器とほとんどかわらないが、やや新相を帯びたところがあるようだ。

ヘラケズリについては、84点中21点が時計回りに施されている。坏蓋では46点中13点、坏身では38点中8点の内訳となる。因みに1次床面の坏21セットは全て反時計回りである。

土製品(図版37、第42図3111)土製品としておくが、何かの脚になっていたものと思われる。粘土の紐もしくは棒をよじって円柱状の棒としており、全体に少し湾曲している。現存長8.8cm、最大径2.2cm。全くの須恵質の焼成である。1次焼成(最終床面)の埋土中から出土した。



第30図 日焼原3号窯跡出土土器実測図⑦(1/3)



第31图 日烧原4号窠跡実測图 (1/80)

4. 4号窯跡(図版12・13、第31・32図)

3号窯の北7~8mの所にあり、主軸をN-68°-Wに置いている。この窯は灰原・前庭部から窯尻まで全部が残っていた。図示した平面プランは新しい方からの1~3次(これらを都合上先1~3次と称しておく)の床面を省いて、4次(これを1次と変称する)を実線で、6次を太破線で示している。9次の床面が存したことはまちがいない。排水溝は両側に同じくらいの長さでとりつく。焚口付近の北側に5号竪穴があり、この窯と有機的関連がありそうな位置を占めている。排水溝まで含めた全長は16.25mとなる。なお、この窯より北東方向には何ら遺構は見られなかった。

灰原を含めた前庭部は、掘りきった状態では窯の主軸と同方向に長軸をもつ隅円長方形状を呈する。堆積した土は基本的に赤色土と黒色土が入り混じっており、これは各次の操業後の灰・焼土をかき出したものが層となったものである。1~6次(先1~3次を除く)の各次毎の前庭部形状となると細かく分解できないが、前庭部中のとくに南側にはW・X・Yの各箇所段が見られるので、これが前庭部と焚口とを画するものであったことも考えられる。Xの所はあるいは6次が、Yの所は3~4次が可能性として挙げられる。1・2・5次はZの所であろう。この前庭部にはいくつかのピットが掘られており、P1~P4あたりは覆屋的な小屋の柱穴として使われていたのかもしれない。

焚口は6次の時は左右ともにL字形に屈折して凸形状の平面プランを呈するが、1次になると左側は緩やかなカーブを描いている。5次の時で幅95cm、1次では101cmを測る。

この窯も燃焼部から焼成部への移行は明確な区別をしにくい。床面の若干の変化でもってそれらしい箇所はおさえられる。1~6次を通じて85~135cm程の長さを占有しているようだ。傾斜はごく僅かにのぼっていくもののまだ水平に近い。

焼成部は1~6次の間あまり急激な変化はなく、22°~25°の傾斜で窯尻へ至る。床面最大幅は第32図D-D'でわかるように新しくなるにつれて広がってきている。6次の時で1.42m、先1~3次では1.7m程を測る。現状検出面から最深の6次床面までは1.9mにも及ぶ所がある。3次と4次の床の間には黄褐色~赤褐色粘質土が入っていた。これは3次の床面を貼る際に置いたものだろう。

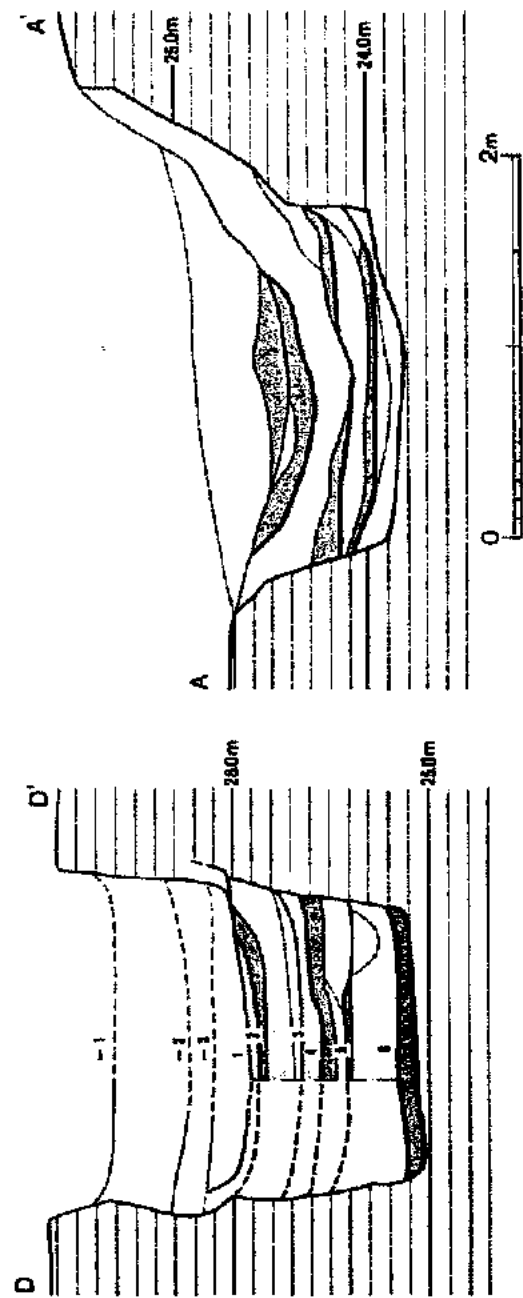
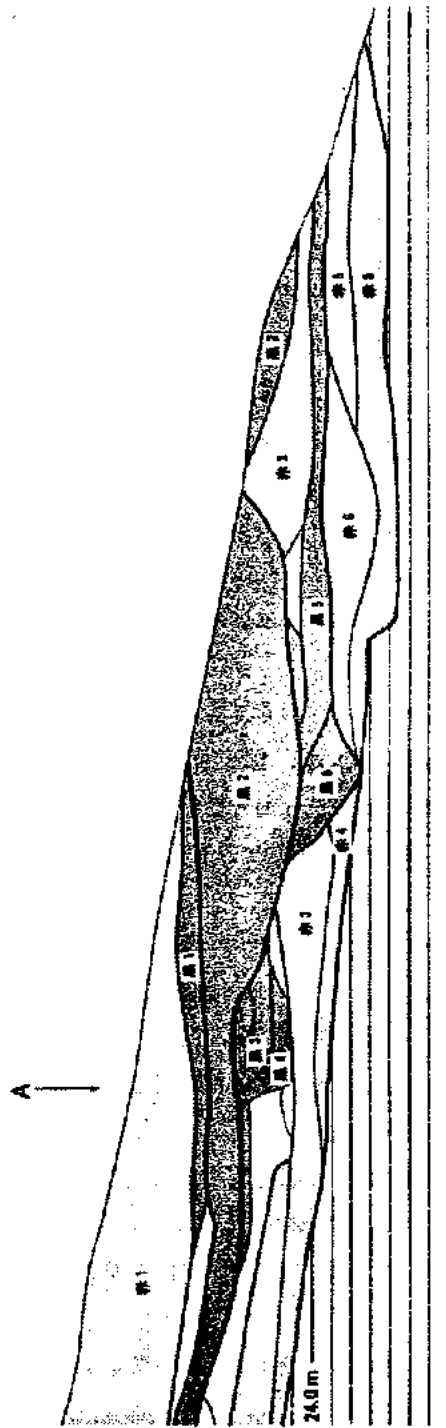
窯尻は先1~3次のうちの確実に2回分と、4次、6次において前面に平坦部をもつ。焚口から窯尻までは6次が7.47m、1次が8.50mで、他もこの中に納まる。

煙出しは新しくなるにつれて傾斜が急になる傾向にあるようだ。5・6次では52.5°、4次で59°、1~3次は76°、先1~3次は73°である。

排水溝は左右両側に付いており、右側は6.8mまで伸びて先端はやや広がる。左側は先端が二又になり、長い方が6.5mまで伸びている。

窯後方遺構はない。

II. 調査の記録



第32図 日姥原4号窯跡断面図 (1/40)

B. 窯 跡

出土遺物（図版31～35・37・38、第33～38・42図）

排水溝出土分を除いて器種ごとに呈示する。器台が目立つ点が特徴といえようか。坏蓋・坏身・高坏・甗・埴・壺・提瓶・甕・器台それに土師器類がある。

坏蓋は天井部に丸みのあるもの、平らなものの双方をみるが、どちらかというとならに近いものが多い。口唇部内面には沈線もしくは段を有する。4005と4023の外天井部には手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリの両方が見られる。4009の外天井部には原体不明の押圧痕がある。4014は天井部の断面で粘土板貼り合わせの線が見える。4025のヘラ記号は鋭利な刃先で切り込んだものである。

坏身は立上りの細く長めのものと太く短めのものがある。前者が古いことは言うまでもない。4026～4042よりも4043～4051の方が古く位置づけられる。立上り口唇部に沈線や段は見ない。4029の体部には成形時の粘土接合の痕跡がよく見える。3034の受部外面には4ヶ所ほど押えて平らにした所がある。また口唇部には補修痕がある。4039の底体部断面には成形時のものと思われる粘土の肌わかれ部分が見える。4050・4052・4054は成形に粘土板貼り合わせの手法を用いているようだ。4050・4051・4055の底体部にあるヘラ記号は、土器がある程度乾いて固くなってから施したもののように深みのない条線となっている。4052の底体部には捺過痕が多数印されている。

高坏の坏部形態は時期差があるようだ。4062の波状文はその上をなでていて不鮮明となる。透孔はわかるものについては三方に入れられている。4063は菱形の穿孔がある。4065は脚台になるのかもしれない。

甗（4066）は口縁が大きく開く形状になる。波状文は五段に施される。

埴の4067の底部は手持ちヘラケズリを施す。4056のような蓋がつくのだろう。4068は粘土帯積上げ成形の痕がわかる。

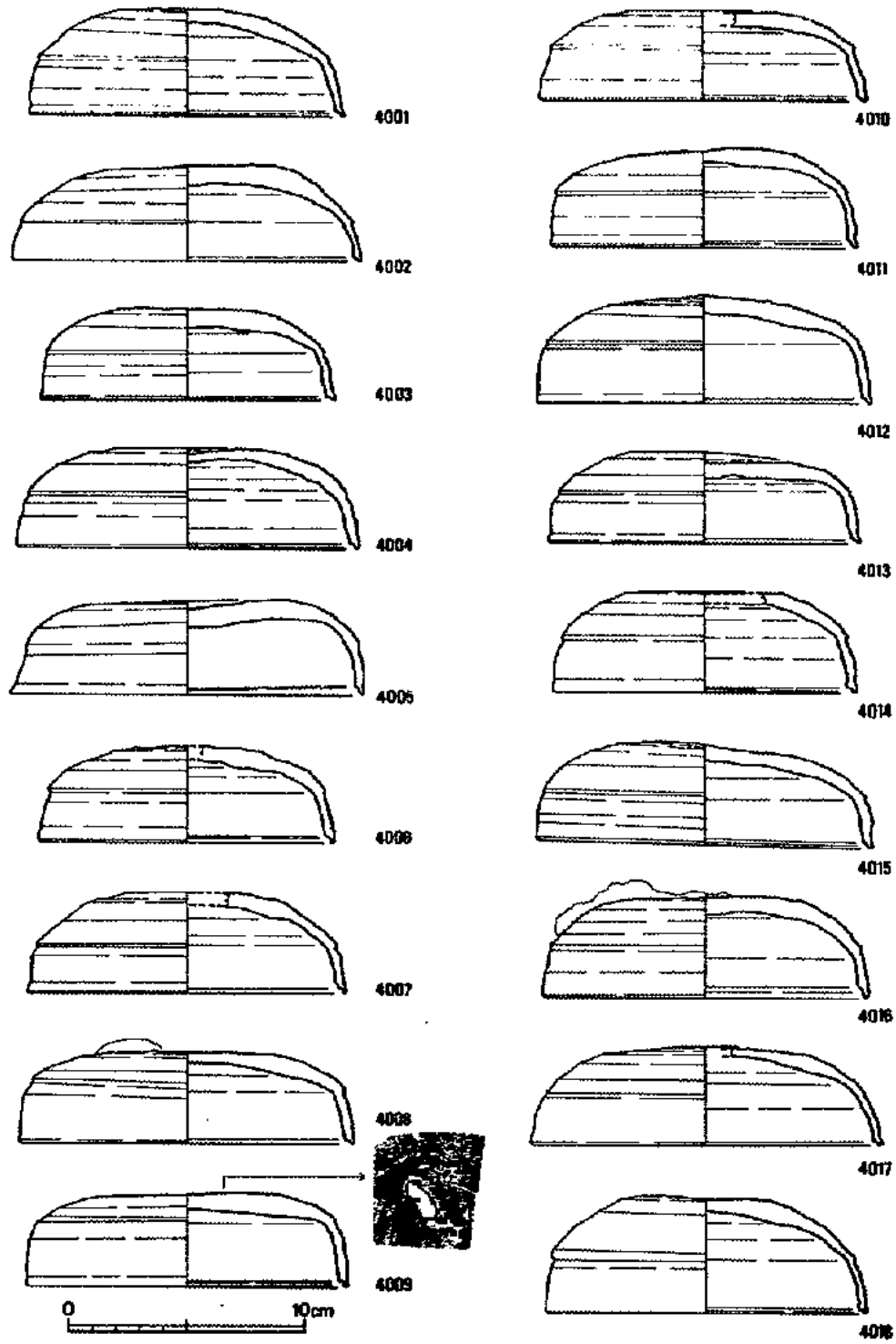
提瓶（4069・4077）は耳がまだ退化せず環状をなしている。4077の口縁部はつくりがシャープである。

甕は口縁部の形態は4075を除いて皆よく似ている。4075は焼きひずみが大きくてもとの形状を特定しにくい。断面には二様の形態を示しておく。それにしてもこの土器は内面に粘土紐の巻上げ痕をそのまま残していることといい、ヘラケズリを施すことといい、きわめて土師器的である。ただ外面の調整と焼成は須恵器のそれである。つまり、内面調整と器形の一部に土師器のそれを取り入れた須恵器なのである。擬土師須恵器とされようか。

器台はいくつかの器形がありそうだ。4079は坏部直下の破片で、台形透しが四方に入るらしい。内面には刺突痕らしいものがある。4078は波状文があまり振幅をもたない。4080はとくに上部が垂んでいるとすべきで、鼓形のようにはならない。透孔は四方に入るだろう。

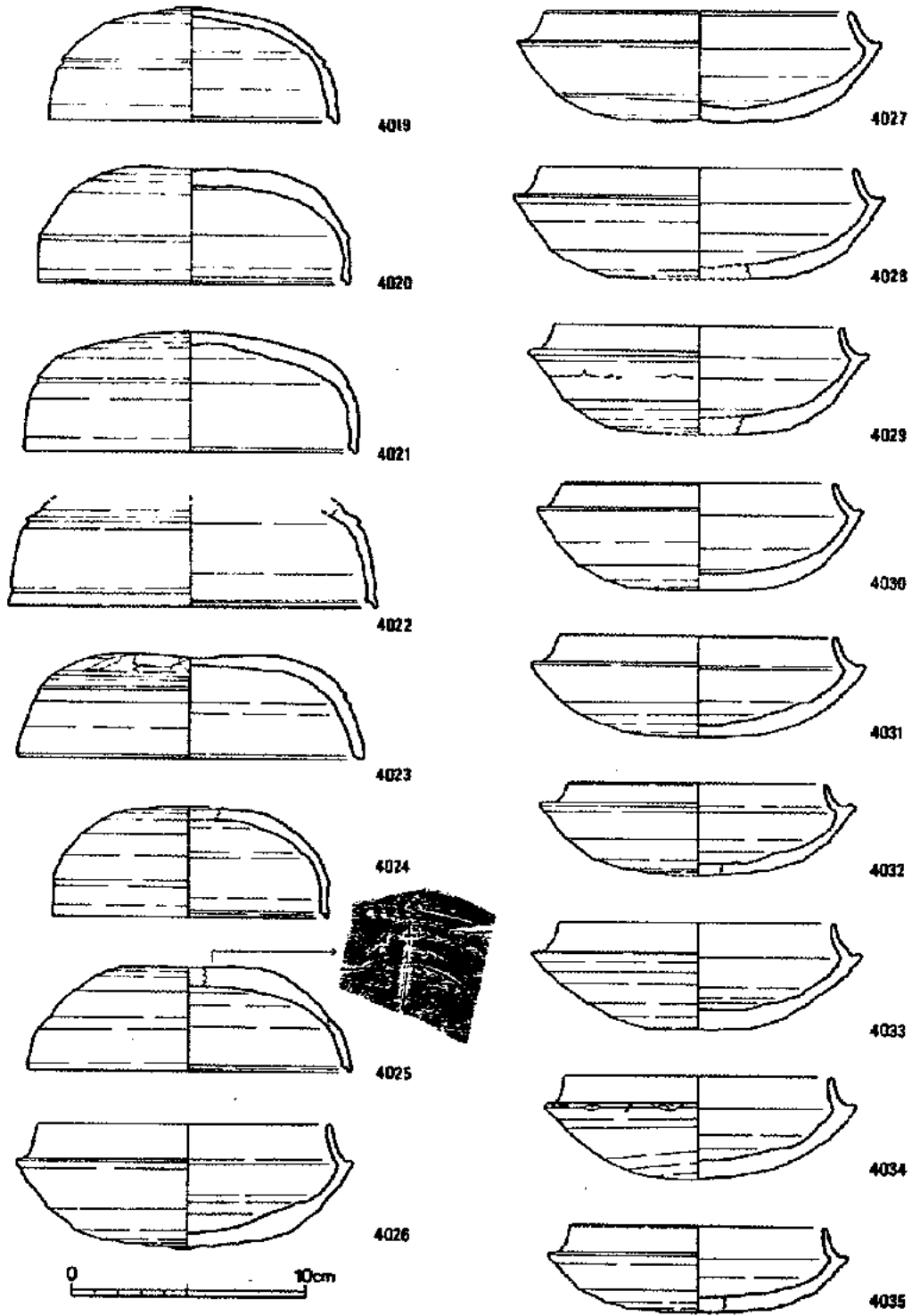
排水溝出土の土器（4082～4084）は左排水溝からで、窯本体の土器とかわらない時期を示し

II. 調査の記録



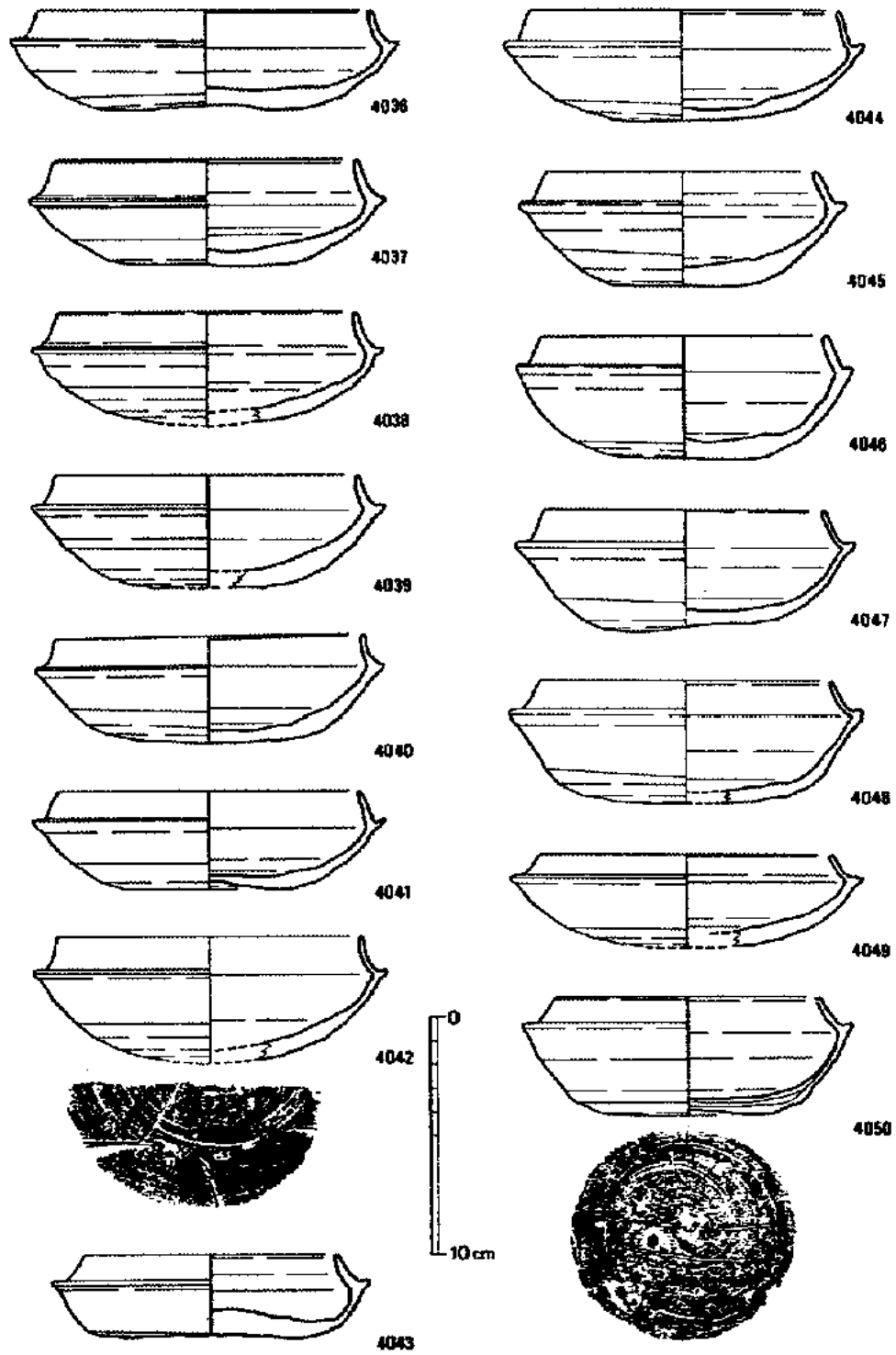
第33図 日焼原4号窯跡出土土器実測図①(1/3)

B. 窯跡



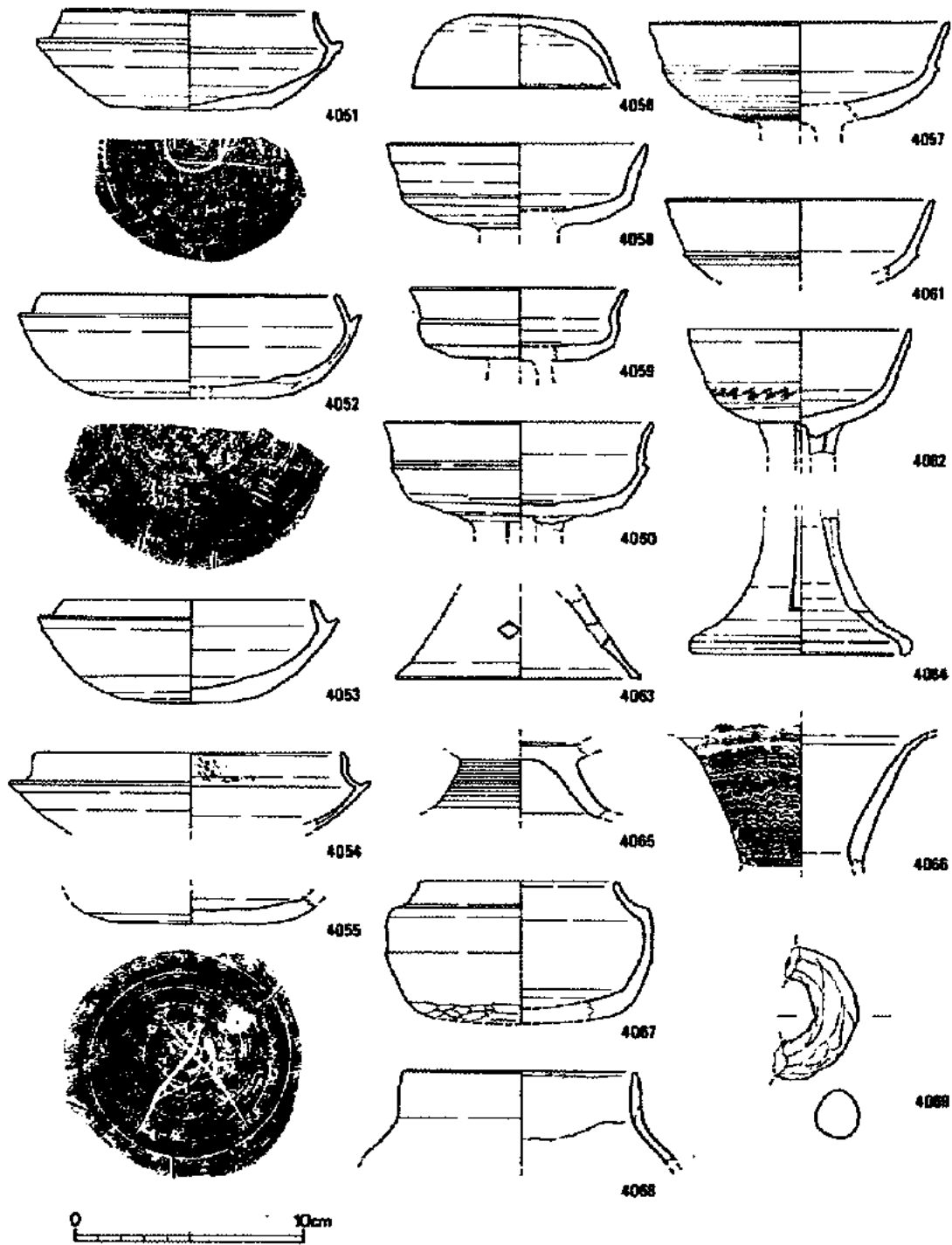
第34図 日焼原4号窯跡出土土器実測図② (1/3)

II. 調査の記録



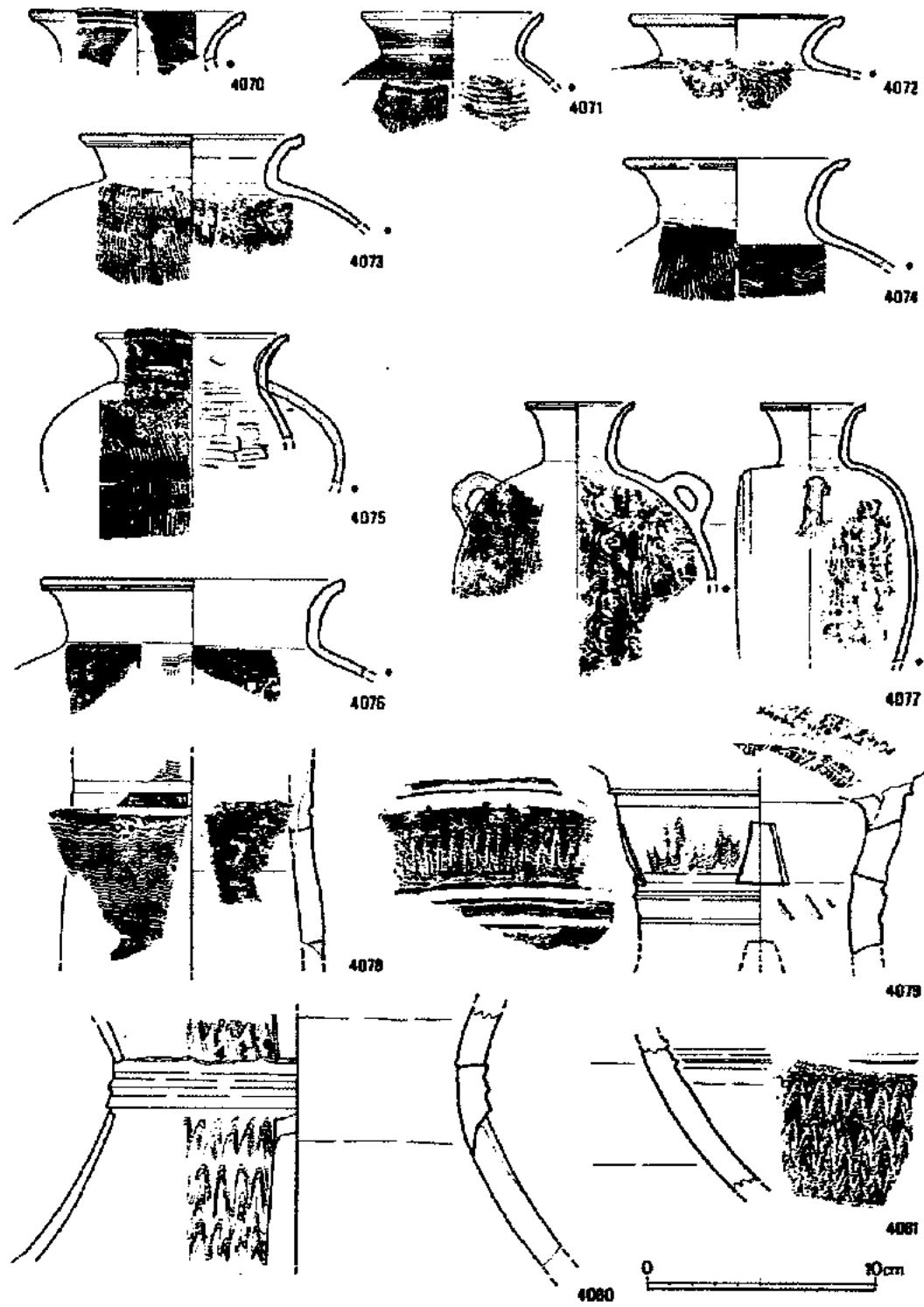
第35図 日焼原4号窯跡出土土器実測図③ (1/3)

B. 窯跡



第36图 日烧原4号窯跡出土土器実測图④ (1/3)

II. 調査の記録



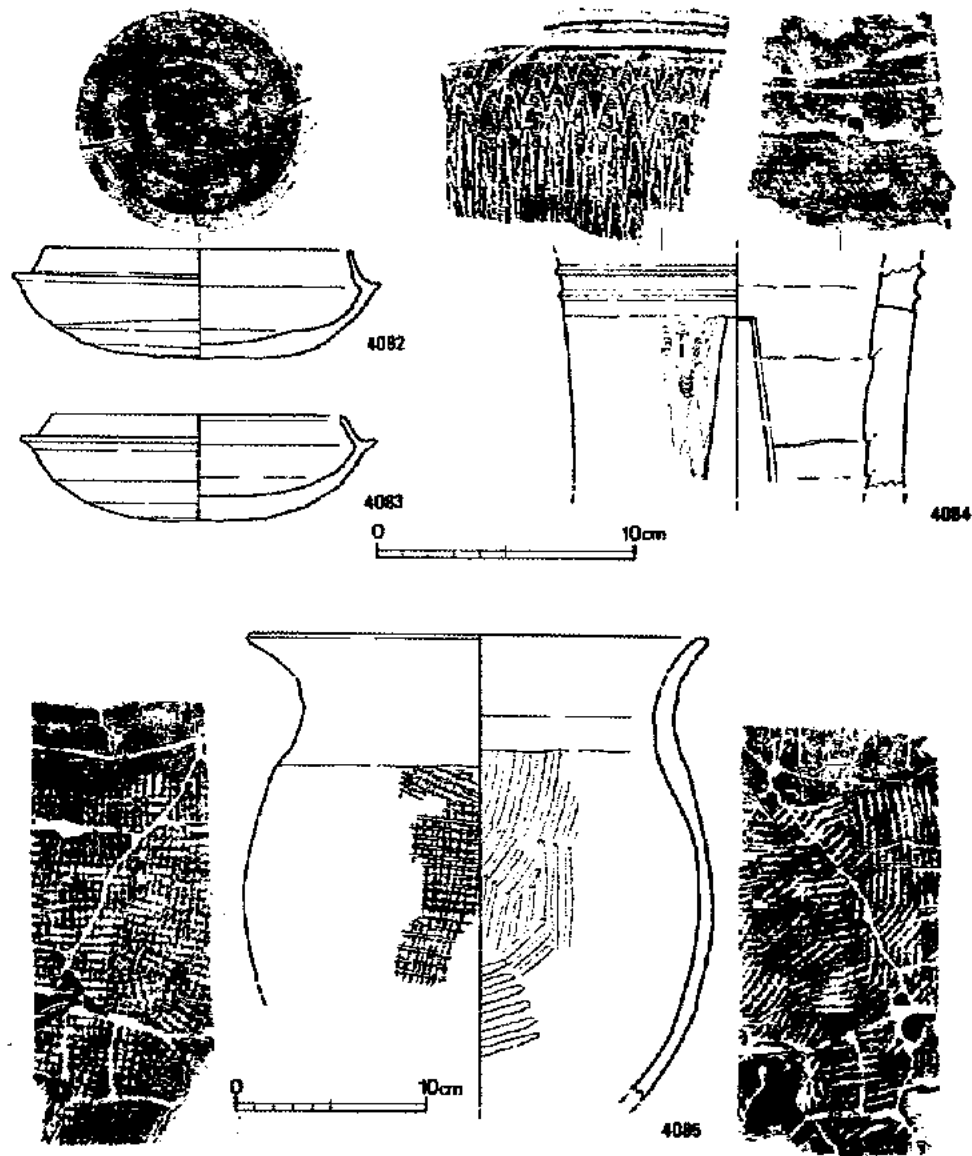
第37図 日焼原4号窯跡出土土器実測図⑤ (1/3, 1/6)

B. 窯跡

ている。とくに4084の器台は4080などとよく似ている。

ヘラケズリの方向については61個体中11個体が時計回りに施されている。内訳は坏蓋が23個体中2個体、坏身38個体中9個体である。

土師器(4085)は灰原の黄褐色土中の出土なので、窯本体の床面に対応させれば5次床面と同じになろう。1号窯跡前庭部のK-1とよく似た器形・調整をなすもので、多分同じ時期の所産と考えられる。外面は平行タタキで擬格子状となり、内面は弧状の平行当具痕をみる。口



第38図 日焼原4号窯跡出土土器実測図⑥(1/3, 1/4)

II. 調査の記録

縁部の外反は肩部からの連続でカーブしており、内面に屈折点がない。肩部は張らず、胴中位に最大径がくる。口径23.8cm、胴最大径24.3cm。胴部に2ヶ所、10×14cmと8×13cm程の黒斑があるも対称の位置ではない。また胴下半には煤が付着している。

土製品(図版37、第42図) 4086と4087はミニチュアの須恵器である。成形は普通の須恵器と何ら変わらず、手づくねではない。ともに2次焚口付近から出土した完形品である。4086を蓋として4087に被せるとぴったりと合うので、この2個で身と蓋のセットのつもりなのかもしれない。しかし、使用目的は不明である。

4086は一見環身のミニチュアの如くであるが、上述のように蓋のつもりかもしれない。口径4.4cm、器高3.2cm、最大径5.8cmを測る。底部外面は手持ちヘラケズリとなでを施し、体部には一ヶ所擦過痕がある。受部端面には2ヶ所に押圧痕をみる。また内底面は径1.2cmの円底となっている。かわいい感じの土器である。

4087は罎のように見てとれる。口径3.6cm、胴最大径5.8cm、器高4.2cmを測る。底体部外面は回転のヘラケズリを施すが粗い。つくりとしては雑な印象が強いけれども、器形としては整美である。

4088は棒状土錘である。灰原の黒5層から出土し、やはり須恵質であって一部に自然釉がかかっている。現存長9.1cmで、長大なものとはならず、本来10~11cm程度の長さであったろう。最大径2.7cm。重さ73g。最小孔径0.3cm。

C. 竪穴遺構

竪穴とするほどしっかりした遺構ではなかったが、この呼称でもって遺物を取り上げた遺構が5基ある。1号は1号窯を、4号は3号窯をそれぞれ切って営まれていた。5基ともに土器の破片ばかりが入っており、基本的に2~4号窯とほぼ同じ時期のものなので、それらの操業時に掘削されたものと思われる。但し、4号竪穴には新しい時期の土器も入っていた。

1号竪穴(図版3、第4図)

1号窯をその西側で切っていたが、1号窯上面部分においてはプランが把握できなかった。当初はこれも窯の可能性をもたせていたが、結局は土壌状の遺構となった。上面で南北の幅1.6m前後、東西幅2.3m以上の長方形を呈する。東西長は最大でも4mをこえない。底面は1号窯を切ったあたりが最も狭くなっていて、深さ25cmを測る。この竪穴の掘削された時期の遺物が1号窯に混入している。おそらく2号窯に伴うものだろう。

C. 竪穴遺構

出土遺物 (図版38、第39図)

坏蓋・坏身・高坏・壺・提瓶・甕が出土しているが、とくに甕が多かった。坏は蓋も身もやや深みがある。T106は大型の甕で、部分的に欠失するもほぼ完形としてよい。外面は擬格子になる平行タタキを施す。外面上半部は灰被りとなっている。

2号竪穴 (第3図)

2号窯の窯後方遺構の北側にあり、2.2×3 m程の隅円長方形プランをなす。坏・甕等の出土をみたが量的には多くない。

出土遺物 (第39図)

図示しうるものが少ない。T201・T202ともにぼってりとしたつくりをなす。T202は歪みが著しい。

3号竪穴 (第3図)

2号窯前庭部のすぐ東隣りにあり、3号窯の左排水溝と2個のピットを切っている。調査時には2号窯に付属する灰原的な土壌であろうとしていた。2.5×1.5 m程の長楕円形プランを呈し、主軸が南北方向をとる。基本的に黒色土3層、赤色土2層、黄色土2層の計7層が堆積していた。土器は大量ではないがそこそこの量が出土した。ほとんどが甕の破片である。

出土遺物 (第39・40図)

坏蓋・坏身・高坏・壺・摺鉢?・甕・器台等がある。T301は坩蓋になろう。坏の蓋・身ともかなり深みがあり、T305などは典型的である。T310は摺鉢になろうか。T309の波状文はまだ流麗としてよい。

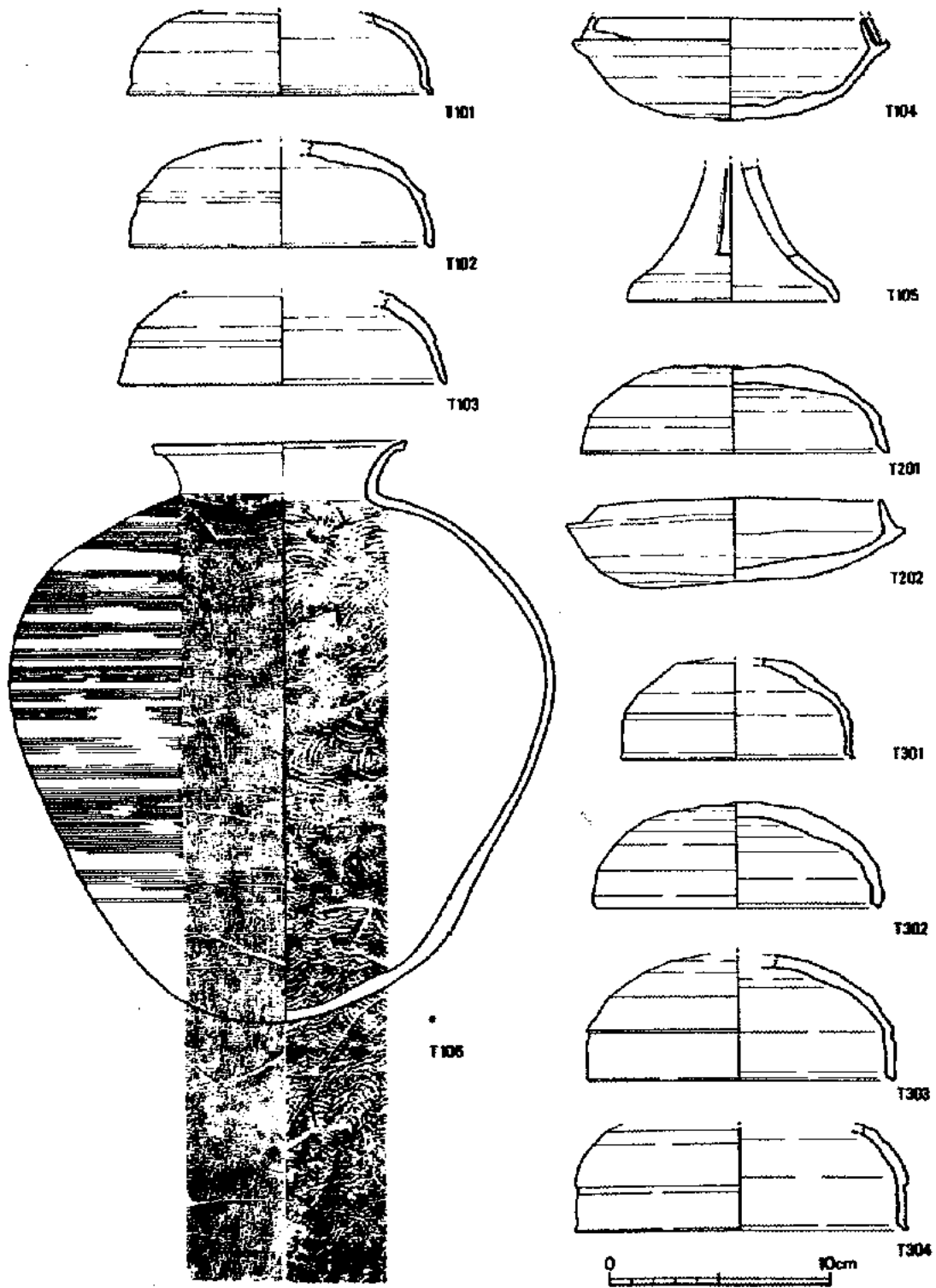
4号竪穴 (図版10、第31図)

3号窯の右壁と右排水溝を切っているが、左壁を越えてまでは遺構が広がっていない。3号窯の主軸に沿うようにテラスを造り出したような形状の竪穴となる。東西長は4 mを測り、西側の最も深い所で1.2 m程となる。埋土は3層に分けられた。そのうちの1・2層中には7世紀末を前後する頃の土器も僅かながら入っている。1・2層出土の器台片は4号窯出土品によく似ており、また最下層出土の坏類も4号窯のものと同様なので、おそらく4号窯作業時に掘削され、のち7世紀末頃に再度利用されたものだろう。須恵器は坏・壺・甕があり、とくに甕の破片が多い。また土師器の高坏・甕もあり製塩土器と思しい破片がある。さらに特筆すべきものに土馬と埴製盒としうる破片がある。

出土遺物 (図版36・37、第40～43図)

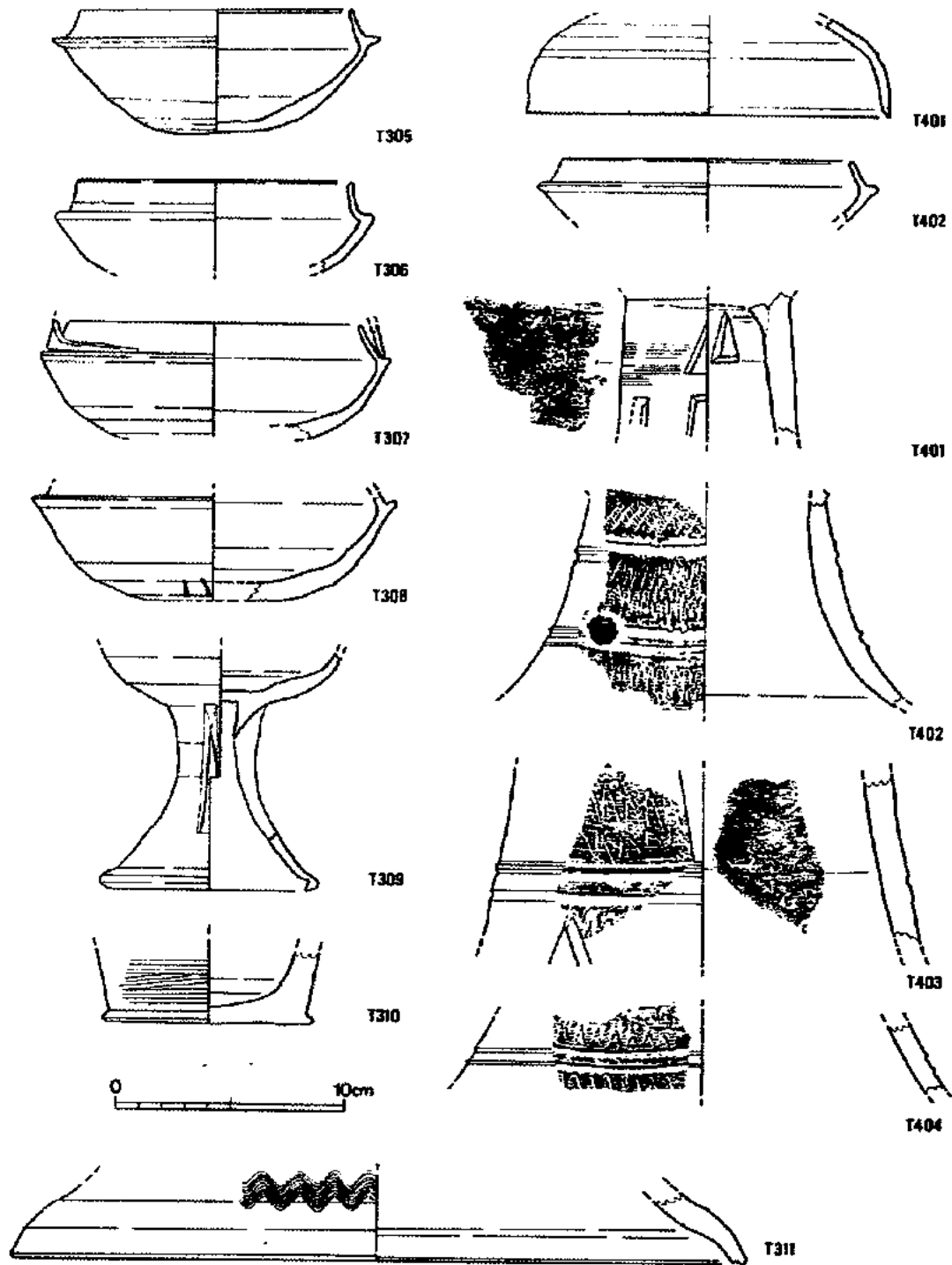
須恵器 (T401～T410) T402の立上りはあまり高くない。T403の透孔は三角形と長方台

II. 調査の記録



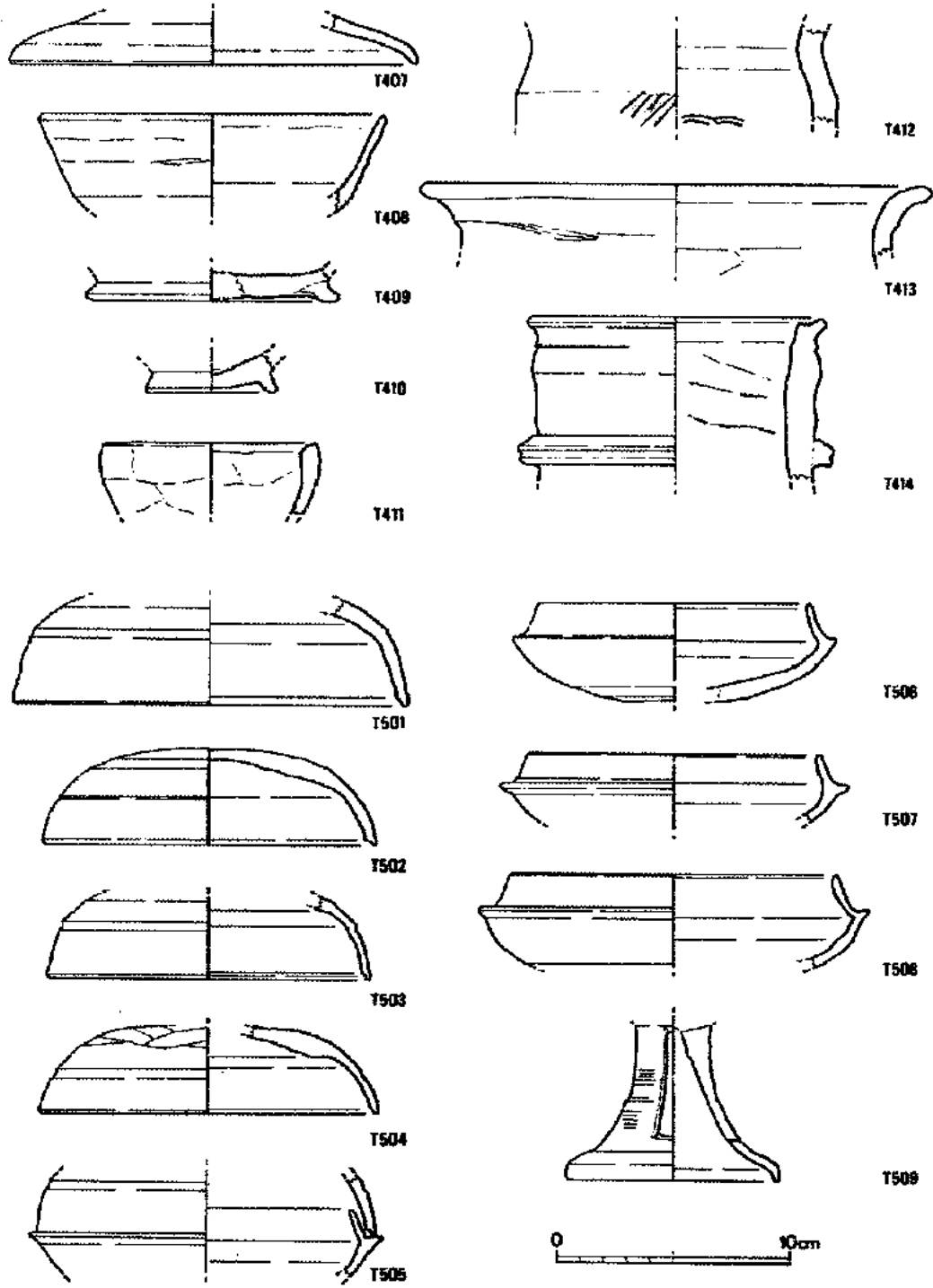
第39図 日筑原1~3号竖穴出土土器実測図① (1/3, 1/6)

C. 竖穴遺構



第40图 日烧原3・4号竖穴出土土器实测图②(1/3)

II. 調査の記録



第41図 日焼原4・5号竪穴出土土器実測図③ (1/3)

C. 竪穴遺構

形の両方がある。T404は裾部に近い破片であろうが、下方の二条突帯上には釘状の浮文が付いている。T405は三角形透孔が正立・倒立ともに入るらしい。T407～T409は須恵器としてつくったものの焼成されないままの破片としてよい。T409の外底部には直径1.1～1.4cmのくぼみに粘土を押しつめたような痕跡が3ヶ所見られる。T410は生焼けである。

土師器 (T411～T414) T411は二次火熱の有無はよくわからないが、焼塩土器によく似ている。T412は玄界灘式製塩土器によく似る。T413は胎土の粗い甕である。T413は一見して円筒埴輪のようであるが、どのような用途に供されたものかわからない。つくりは粗い。あるいは後述の盒？(T417)と関連のあるものかもしれない。

土馬 (T416) 短足鬮長のきわめて親近感を覚える土師質の土馬である。左耳の先端とたてがみの頂部、尾の一部、それに右前脚を欠き、鞍の部分が剥落している以外はしっかりして残りがよい。飾り馬としての造形である。全長15.4cm、全器高7.4cm、重さ222gを測る。以下に各部を説明する。

顔面はまさしく馬づらである。2個の目、鼻の穴を8～9mmの間隔で刺突して入れこみ、口は左から右へ沈線で切りこむ。口からは引手と手綱が鞍の方へ沈線にて表現される。耳はたてがみの横、目の後方にとり付き、耳の穴も刺突されている。顔面長約4cm、幅1.4cm。たてがみは長さ5cm程、高さ0.5～1cmくらいにそそりたつようにうまく表現されている。

鞍は前輪・後輪が約3cmの間隔に別づくりで貼り付けてあったのが、剥落している。前輪と後輪の両端の間は4.6cm。障泥・鐙の表現がなされていたのかどうかかわからない。頭部から伸びてきた手綱は前輪の直前まで表現されている。また、後輪からは尻繫がやはり沈線にて表現され、尾の先端近くまで伸びている。

尾は下向きに鳥嘴状に少しだけ伸びている。脚の長さに規制されて短くしたものだろう。

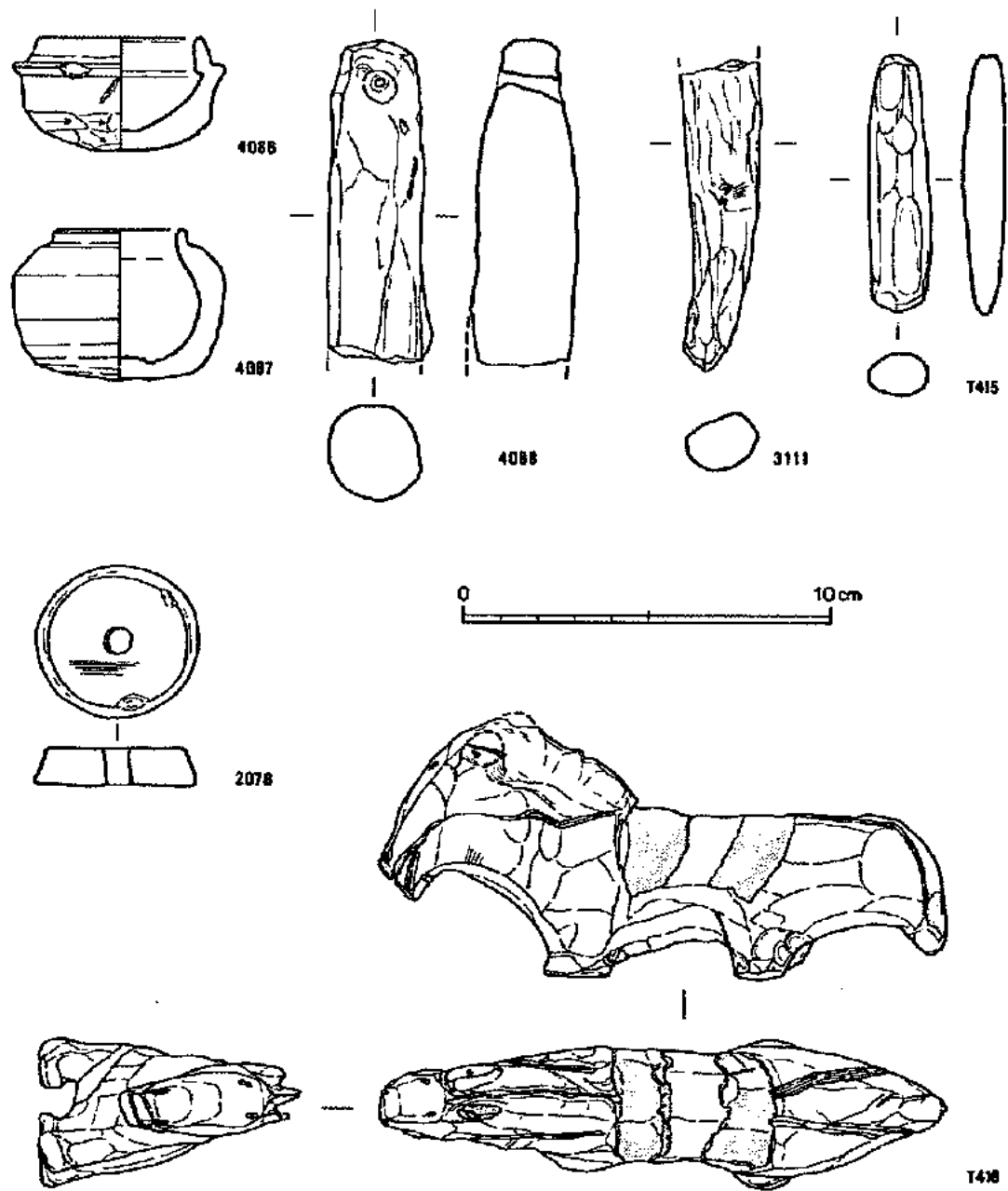
脚(足)は右前脚を欠失する。それにしても何と短足であろう。付け根からすれば2cmくらいになるが、純粹の表現は1cmに満たない。足の裏は平坦な所に押しつけて平らにしてあり、三本足でもしっかりと正立している。前後の脚間は6.8cm。

全体は指頭かまたは布のようなものを用以てのなでにて調整し、所々に指紋が見える。手綱や尻繫の表現は植物繊維質の条線が表出する原体によっている。焼成は良好で、胎土も良質である。黒褐色もしくは黄茶褐色の色調をなす。鼻や脚の一部に“手ずれ”の如き光沢をみる。親しみのもてる好品である。

土製品 (T415) 須恵質生焼けの棒状品である。粘土の丸い棒を押えつけて扁平気味にしたもので、全長7.2cm、幅1.7cm、厚さ1.2cm、重さ12.3gを測る。何に使用された(使用しようとした)ものか見当がつかない。

埴輪盒 (T417) 須恵器の焼成不良品のようなでもあるが、化粧土をかけた痕跡が伺えるので、この軟質の黄灰褐色を呈する状態で製品としておく。やや胴張りをもった隅円長方形プラ

II. 調査の記録



第42図 日焼原窯跡群出土土馬その他実測図 (1/2)

C. 竪穴遺構

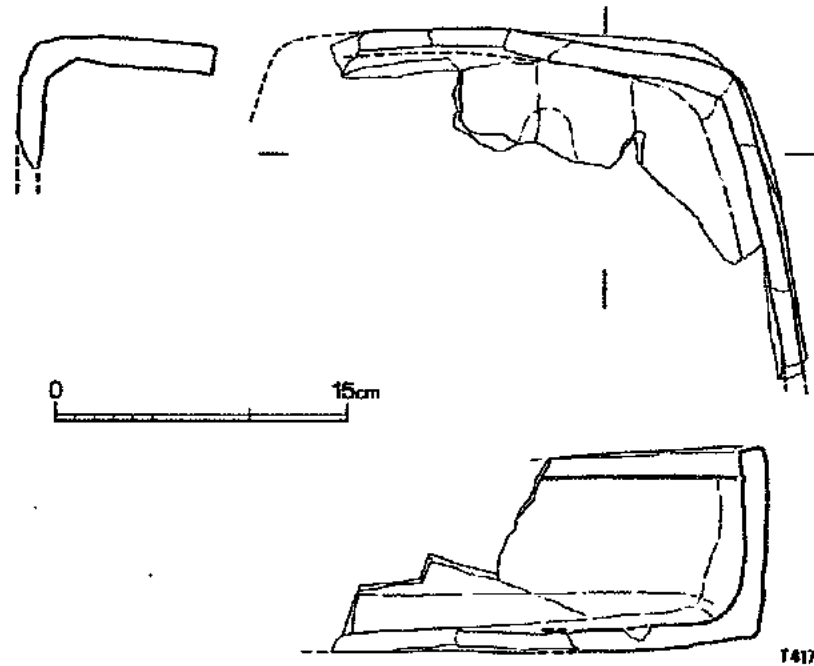
ンの容器と考えられるので、いちおう埴製盒として報告する。四隅のうちの一角をはさんで20.6cmと15.8cmの二辺が残存するが、長く残っている方を短辺とする直方体になるようだ。この短辺は復原で23cm前後となろう。長辺は32cm前後を想定したい。器壁の立上りは最大で10.5cmを測り、深さは9cm程となる。内面の口縁下1cm強の所に浅い沈線がめぐっている。胎土は粗く、焼成もあまい。内外ともなでを主体とした調整を施し、外底部にはケズリも行っているようだ。

5号竪穴 (図版13、第31図)

4号竪穴口付近の北側にあり、右排水溝の延長上に位置する。1.7×2.2m程の楕円形に近い形状を呈する。出土遺物はあまり多くはないが全体としては壊が多い。

出土遺物 (第41図)

坏蓋・坏身・高坏・提瓶・甕があった。T501の蓋は壺に使うものかもしれない。T505のように融着した破片もある。



第43図 日焼原4号竪穴出土土製品(盒)実測図 (1/4)

III. おわりに

稲元日焼原窯跡群は、4基の窯跡とそれに付随すると思われる竪穴5基からなる窯跡群である。これらの周囲には別の窯跡が築かれていたような痕跡はなく、この4基でもって完結する一群であったとしてよい。大きくみれば、須恵から稲元にかけて分布する宗像須恵窯跡群中の一支群である。

4基の中でも1号窯跡は最も古く、これは須恵窯跡群の中でも最古段階に位置づけられる。現時点では、宗像須恵・稲元の地に須恵器製作工人たちがまず窯を築き須恵器生産の煙を上げはじめたのは、この日焼原においてであったと首つてよい。5世紀末～6世紀初頭頃のことであろう。

そのあと、6世紀中頃になって2～4号窯が築かれ、同後半～末の頃まで操業され、そして7世紀末～8世紀前半になって、4号竪穴や1号窯前庭部の所が再び利用された、というのが今回報告の遺構群の推移としてよいだろう。

ところで、今回の報告にあたっては、検出した遺構の窯跡・竪穴、そして出土遺物の須恵器その他について詳細な分析・検討を加えて考察すべきであったが、諸般の事情もあって、問題点の提起にとどめざるをえないこととなった。各窯跡出土の須恵器についても未だ全器種を網羅しきれていないうらみがある。この点の検討も含めて、須恵器の編年時位置や供給の問題等等については後日機会を得て再考したいと考えている。以下には、現時点での留意点・課題を箇条書き風に列挙して当面の責を塞ぎたい。

A. 遺構について

4基の窯跡全てが煙出しの所から両側へ排水溝を有している。1980年に調査された岡垣町野間窯跡群^(註1)では向かって右側だけに排水溝が付属しており、大野城市牛頸中通窯跡群・柏屋郡宇美町岩長浦窯跡群^(註3)・飯塚市井手ヶ浦窯跡群^(註4)等でも片方だけに付設されている。これは地域的なものとするより時期的な所産のように思える。但し、立地上の地形的背景があるのか否かは今後の検討課題である。

次に、1・2号窯跡に付属する窯後方遺構がある。これは今のところ何のために付設されているのかわからない。遺物が出土しているところをみると、単なる集水のための遺構とは捉えにくいように思う。

竪穴遺構については、その出土土器を見る限りにおいても2～4号窯と同時期に営まれたものと考えられる。その機能としてはやはり焼成不良品の投棄場所ということがまず想起される。実際のところ完形品の出土はなく、生焼けの破片も多かった。また、意識的に破砕しての投棄

B. 遺物について

という様相も伺い知れなかった。しかし、これら竪穴の掘削に祭祀的な意味合いが全くないのかと云えば、それを完全に否定してしまうのも躊躇される。位置関係と出土土器からみて、1・3号竪穴は2号窯に、4・5号竪穴は4号窯に付随していた可能性が高い。2号竪穴については不明である。4号竪穴は7世紀末頃になって再び掘削されたか、またはくぼみとなっていた所が再利用されている。このときの土馬・製塩土器・埴製盒は注意される遺物である。

B. 遺物について

a. 各窯の操業期と時期

1号窯跡の灰原1層・埋土中・窯尻上層・排水溝・窯後方遺構から出土した須恵器には2～4号窯跡出土品と同じ時期のものがあり、とくに4号窯跡との親近性が強く感じられるところである。以下に各窯跡を縦断して類似する土器をとりあげてみよう。

- ・1077（埋土中）と4018（赤5）・2006（1～17次床）は形状・つくりが似ている。
- ・1083（窯尻上層）と4015（2～3次床）、1089（窯尻上層）と40（赤5）も形状がよく似ている。
- ・1084（窯尻上層）と3104（左排水溝）は焼上りもよく似ている。
- ・1085・1086（窯尻上層）の脚部は3107（左排水溝）のそれに類似する。
- ・2060（12次床）の頸部に見る押圧痕は3010（2～5次床）・3067（1次床の坏12）に見えるものと原体が同一である可能性をもつ。

気づいたもののみでも以上があり、これを勘案するに、2・4号はほぼ同じ頃に操業していて、すでに廃窯となっていた1号の上層と3号の排水溝に焼き損じの土器を一部投棄した、という可能性が指摘できる。ただ、2号と3号の土器の手法に類似点があることから、2・4号と3号との間にはさほど大きな時期差はないと考えられる。また、4号竪穴の器台は4号窯出土品に類似するので、4号竪穴は4号窯に付随すると思われる。つまり、1号窯から若干の時期の隔たりがあつて3号窯が操業を始め、そのあとに2・4号の操業が始まったと解釈するものである。

各窯跡の時期については、1号窯が小田富士雄氏編年でのⅡ期、2～4号窯がⅢA～ⅢB期に相当しよう。その詳細は後日に委ねる。

b. 須恵器の成形技法の一例

4号窯跡出土の坏の一部に成形技法の一端を伺い知れる資料があるので以下に示しておく。まず、粘土紐の巻上げではなくて、明らかに薄い粘土板貼り合わせの手法が体部に見られる例がある。4050・4052・4054・4014などであり、4050はとくにそれがよくわかる（図版35）。

また、坏身受部端より底部へ1.5cm程の所に、明らかにここで接合したことを示す資料がある。4029・4051などであり（図版35）、とくに4051ではその接合部がきわめて薄くなっている。

Ⅲ. おわりに

加えて、底部中心から4～5cmの所に、斜めまたは水平に近い接合痕と思える線を断面に見るものがある。4039・4052などであって、これは直径8～10cm程の円盤を成形の基礎とした可能性を示唆する資料である。同様のものは2・3号窯出土品にもある。

上記のような資料を見るならば、須恵器杯の成形が粘土紐巻上げ、水ビキという手法だけではなく、粘土板貼り付けや粘土円盤などを使っての、部分分割製作から接台成形といった手法も一部にあったことが伺えるようである。

c. 土馬について

4号竪穴から出土した土馬は独特の愛らしさを備えた駒馬である。

1935（昭和10）年、この稲元日焼原のすぐ近く、大字河東宇大浦から須恵質の土馬が発見されている。報文によれば、「四脚、尾端、及頭尖部を欠損」したもので、「稚拙限りなき原始的な手法で、到る所に捏圧の指紋を見るが、無雑作に添附した、円形に近き径3、4分の耳と、円く圧凹めた径1分余の眼」、「左右に陰刻した各二条の手綱と尻懸と、そして背腹部に痕跡を止むる鞍」をもった馬である。そして「重量56匁、黒褐色の極めて堅緻な焼成」の「祝瓮である」とされている。^(注5)

叙上の大浦出土の土馬と今回報告のもの比べると、土師質と須恵質との違いはあるものの非常によく似ていることがわかる。あるいは製作者は同一人ではないかとの想定もしうるほどである。この大浦の出土地点は特定しえないけれども、両者がさほど距たりのない位置関係にあるのはまちがいない。このような至近の地でよく似た土馬が出土したことは、お互いの出土立地を含めて大いに検討されるべき課題であろう。^(注6) 時期的には先述のように7世紀末頃としておきたい。なお、中間市垣生・砂山からも表現法がよく似た土馬が出土している。

註1. 福岡県教育委員会「野間窯跡群」（岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集）1982

註2. 大野城市教育委員会「牛頭中通遺跡群」（大野城市文化財調査報告書 第4集）1980

大野城市教育委員会「牛頭中通遺跡群II」（大野城市文化財調査報告書 第9集）1982

註3. 宇美町教育委員会「宇美観音浦」1981

註4. 飯塚市教育委員会「井手ヶ浦窯跡群」〈立岩周辺遺跡発掘調査報告書 第6集〉（飯塚市文化財調査報告書 第9集）1985

註5. 田中幸夫「筑前発見祝瓮馬の二例」考古学雑誌25-7 1935

なお、引用文のうち旧字体は現行のものに改めた。

註6. 中間市史 1978

福元日焼塚遺跡群出土土器観察表①

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存、実測番号etc.)
1001	坏蓋	1号窯 2~3次床	口径 14.0 器高 5.5	胎土は良。焼成は堅緻だが、焼上りは中途。 外面茶黄色、内面黄褐色。 縞みがついていたと思われる。ヘラケズリは左回り。	9/10残、1-9
1002	"	1号窯 "	口径 14.0 器高 4.3	胎土は良。焼成中途だがきわめて堅緻。 赤茶色を呈する。ヘラケズリは左回り。 天井部が平らになる。	9/10残、1-7
1003	"	1号窯 "	口径 12.6	胎土精良。焼成中途ながら堅緻。 黄褐色を呈する。	1/8残、1-51 1006とつくりが似る
1004	"	1号窯 "	口径 14.0	胎土は細砂を若干含む。 焼成は良。 内外面共明るい褐色を呈する。	1/4残、1-50
1005	"	1号窯 "	口径 14.1	胎土は良。 焼成良。茶色を呈する。 口唇部に粘土が付着し、重お焼きがわかる。	1/8残、1-48
1006	"	1号窯 1次床	口径 13.1	胎土精良。 焼成堅緻。赤茶褐色を呈する。(赤っぽい)	1/8残、1-53
1007	"	1号窯 "	口径 14.4 器高 4.8 受部径 14.0	大砂粒をも含む胎土はやや粗い。赤褐色粒を含む。 焼成は中途。黄茶色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/6残、1-10
1008	"	1号窯 "	口径 15.0	胎土は砂粒をほとんど含まず精良。 焼成は良。(くすべた感じ)。内外面共明るい茶色。 立上り端部はシャープである。	1/6残、1-46
1009	"	1号窯 "		胎土は良。 焼成は堅緻。黄灰色を呈する。 口唇内面は凹線ふうとなる。	1/10残、1-98
1010	"	1号窯 焚口~ 燃焼部		胎土は良。 焼成は良好。黒灰色~黄茶色を呈する。	1-52
1011	"	1号窯 "	口径 13.3	胎土は良。焼成良。 灰色を呈し一部黒ずむ。 ヘラケズリは右回り。	1/8残、1-47
1012	"	1号窯 焚口~燃 焼部床面	口径 14.0 器高 4.7	砂粒を含むが胎土は良。長石粒が目立つ。 焼成は中途。 外面灰黒色~灰褐色。内面黄褐色。 天井部外面はカキ目(右回り)。縞を欠失。	1/4残、1-3
1013	"	1号窯 "	口径 13.3 器高 5.3	砂粒は多いが胎土良。長石粒が目立つ。 焼成は中途で完全に焼き上がっていない。 外面灰黒色~灰褐色。内面黄褐色。 天井部外面は右回りカキ目。体部に補修痕あり。縞を欠失。	約1/10欠くも略完形。 1-1
1014	"	1号窯 "	口径 12.7 器高 5.2	微砂粒多いが胎土良。焼成は中途。 黄褐色で内天井部は化粧土をかけた如くに茶褐色。 天井部外面は右回りカキ目。縞を欠失。口縁に歪みあり。	1/8を欠くも略完形。 1-2
1015	坏身	1号窯 2~3次床	口径 11.7 受部径 14.0	胎土は良。焼成は中途ながら堅緻。 黄褐色を呈する。 ヘラケズリは右回り。	1/5残、1-71
1016	"	1号窯 1次焼成 室床面	口径 12.5 受部径 14.8	砂粒は多いが、胎土良。焼成は中途。 やや黄色っぽい粗黄褐色を呈する。 ヘラケズリは右回り。受部に押えの痕あり。	1/3残、1-16
1017	"	1号窯 焚口~焼 成部床面	口径 11.8 器高 5.3 受部径 13.8	砂粒多いが胎土良。焼成中途だが硬い。 茶黄色を呈する。 ヘラケズリは左回り。受部に押え痕3ヶ所あり。	3/5残、1-12

稲元日焼原窯跡群出土土器観察表②

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存, 実測番号etc.)
1018	坏身	1号窯 裏口~底 底面	口径 11.8 器高 5.3 受部径 14.0	砂粒多いが胎土良。焼成は中途。 黄褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。受部に押え痕あり。	3/5残, 1-15
1019	"	1号窯 "	口径 11.7 受部径 13.9	胎土良, 焼成は中途 (遺元状態になっていない) 黄褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	2/5残, 1-35
1020	"	1号窯 "	口径 11.6 器高 5.4 受部径 14.3	砂粒が多く、胎土はやや粗い。 焼成中途だがすでに硬質。黄褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。体部に浅いヘラケズリ。	4/5残, 1-11
1021	"	1号窯 "	口径 11.0 器高 5.5 受部径 13.5	砂粒は多いが胎土良。焼成は中途。 外面の一部が灰黒色、他は橙茶色。硬質のヘラケズリは左回り。 口縁内外に補修痕あり。	2/3残, 1-13
1022	"	1号窯 "		胎土良。焼成は中途。 黄褐色を呈する。	1/10残, 1-32
1023	高坏	1号窯 "	底径 8.0	胎土良。焼成はややあまい。 灰黒色を呈する。	1/4残, 1-23
1024	甗	1号窯 2~3次床		胎土は良く茶褐色を呈す。焼成は良。 灰紫色を呈する。 内面一部が灰塗り。	1/6残, 1-78
1025	"	1号窯 1次床	口径 10.7	砂粒が多い。焼成は良。 黄灰色~灰褐色を呈する。	1/8残, 1-80
1026	"	1号窯		胎土は良。焼成は良。 内面は黄灰色。外面灰色を呈する。 波状文は繊細な方である。	1/10残, 1-79
1027	甗?	1号窯 1次床	口径 17.8	胎土は良。焼成は中途でもろい。 黄褐色を呈する。 波状文はやや粗い。	1/10残, 1-20
1028	甗	1号窯 2~3次床		胎土は精良。(紫色を呈する) 焼成は良。 外面は黒色、内面は黒灰色を呈する。 甗の口頸部であろう。波状文は上が11条、下が10条。	1-77
1029	"	1号窯 2~3次床	口径 47.0	胎土は良。焼成は堅硬。 赤茶色を呈する。 波状文は上が17条、下が20条。	1/12残, 1-76
1030	"	1号窯 1次床	口径 38.2	胎土は良。焼成はあまり不十分である。 赤茶黄色を呈する。内外とも化粧土(赤茶色)をかけているよう だ。 波状文は11条か。	1/10残, 1-75
1031	坏蓋	1号窯 灰厚 黒色土	口径 14.3 器高 5.1	微砂粒多し、黒色粒子含む。焼成中途。 外面赤茶褐色、内面黄褐色。 ヘラケズリは右回り。	1/3残, 1-4
1032	"	1号窯 "	口径 13.4	胎土は細砂をやや多く含む。焼成はやや軟質である。 内外面ともうすい茶色。 ヘラケズリは右回り。受部端に押え痕あり。	1/6残, 1-41
1033	"	1号窯 "	口径 13.9	胎土は良。やや砂粒多し。焼成は良。 灰黒色を呈する。	1/8残, 1-54
1034	"	1号窯 "	口径 13.6 器高 5.4	胎土は良。発色するまでに焼成されているが、まだあまい。 外面灰色、内面灰黒色。 ヘラケズリは右回り。受部端はシャープ。	1/4残, 1-6

船元日焼原原跡群出土土器観察表③

遺物 番号	器種	出土 地点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(保存・実測番号etc.)
1035	坏蓋	1号窟 灰厚 黒色土	口径 13.2 器高 4.9	胎土良。焼成は中途だが硬質である。 紫茶褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。壊欠失か。	1/4残、1-5
1036	"	1号窟 "	口径 12.6	胎土良。赤褐色粒子を少し含む。焼成はあまい。 黄白色を呈する。 磨減が著しい。	1/6残、1-43
1037	"	1号窟 "	口径 12.4 器高 4.6	胎土は精良。(微砂粒は多い) 焼成良好。 灰黄褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。細身のつくりである。	2/5残、1-8
1038	"	1号窟 "	口径 12.4	胎土は良。赤褐色粒子を含む。焼成はあまい。 黄褐色を呈する。磨減が著しい。	1/6残、1-44
1039	"	1号窟 "	口径 13.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成良。 内外面ともうすい茶色。外面は赤茶色の化粧土がかかっているよ うだ。	1/6残、1-45
1040	"	1号窟 "	口径 14.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成は良。 内外面とも明るい茶色。	1/8残、1-40
1041	"	1号窟 "		胎土は良。細かい赤褐色粒子が入っている。 焼成は中途。茶褐色を呈する。	1/10残、1-99
1042	"	1号窟 灰厚1層		胎土は砂粒多い。焼成は堅緻。 黄棕色(灰被り) 内外とも灰被り、ヘラケズリは左回り。	1/10残、1-100
1043	"	1号窟 "	口径 15.5	胎土良。焼成堅緻。 灰黄色(外面灰被り)	1/6残、1-55
1044	"	1号窟 "	口径 13.8	胎土はやや粗い。焼成良。 灰黄色。	1/6残、1-63
1045	"	1号窟 "		胎土は細砂を若干含む。焼成は中途。 内外面とも明るい茶色~黒(一部分) 一部に黒斑あり。	1-49
1046	坏身	1号窟 灰厚 黒色土	口径 10.8	胎土は良。焼成やや軟。 茶色	1/8残、1-38
1047	"	1号窟 "	口径 11.0 器高 5.4	砂粒少なく胎土良。焼成あまい。 外面灰茶色、内面茶色。 ヘラケズリは左回り(断続回転となる) 受部に押え痕あり。	1/3残、1-17
1048	"	1号窟 "	口径 10.8	胎土精良。焼成は中途だが良。 黄茶色を呈する。 深みのある器形となる。	1/8残、1-37
1049	"	1号窟 "	口径 11.8	胎土は細砂を多く含む。焼成は中途。 内外面とも白黄色を呈する。赤褐色粒子を含む。	1/4残、1-39
1050	"	1号窟 灰厚1層	口径 12.0	胎土は砂粒多し。焼成は堅緻である。 わずみ色を呈する。 ヘラケズリは右回り。口縁立上りが湾曲する。	1/6残、1-36
1051	"	1号窟 "	口径 11.8	胎土良。焼成中途だが堅緻。 外面体部は灰褐色。他は黄棕色。 ヘラケズリは左回り。	1/5残、1-18

稲元日焼原遺跡群出土土器観察表④

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存,実測番号etc)
1052	坏身	1号窯 伏象1層	口径 11.3 器高 5.4 受部径 13.3	胎土中砂粒多し。 焼成中途だが硬質。灰褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。受部に押え痕2つ。	5/7残、1-14
1053	"	1号窯 "	口径 11.8 受部径 13.8	胎土中細砂若干含む。焼成中途。 内外面とも明るい褐色を呈する。	1/6残、1-31
1054	"	1号窯 "	口径 10.4 受部径 13.2	胎土は良。焼成中途。 黄褐色を呈する。	1/6残、1-72
1055	"	1号窯 "	受部径 14.0	胎土中細砂をやや多く含む。焼成中途。 内外面とも明るい茶色。 ヘラケズリは左回り。	1/4残、1-33
1056	"	1号窯 "	口径 11.2	胎土中細砂をやや多く含む。焼成良。 内外面とも明るい茶色。	1/6残、1-34
1057	"	1号窯 "	口径 14.0 受部径 16.0	胎土中砂粒多し。焼成良好。 淡灰色を呈する。 ヘラケズリは右回り。	1/4残、1-56
1058	"	1号窯 "	口径 11.0 受部径 13.0	胎土中砂粒多し。焼成良。 灰褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/8残、1-96
1059	"	1号窯 "	口径 15.5	胎土は細砂をやや多く含む。焼成良好。 内外面とも暗灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/4残、1-57
1060	"	1号窯 "	口径 11.8	胎土は細砂をやや多く含む。焼成良好。 内外面ともうすい茶灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/4残、1-58
1061	"	1号窯 "	口径 11.4 受部径 13.4	胎土やや粗い。焼成良好。 黄灰色を呈する。 一部に補修痕あり。	1/6残、1-62
1062	蓋	1号窯 "	口径 15.6 器高 3.5	胎土は細砂を多く含む。焼成は中途。 内面茶赤色。外面茶灰色～茶色。つくりが雑である。 外天井部は標高に近いケズリ。	1/1 1-64
1063	甕	1号窯 "	口径 13.6	砂粒含むが胎土良。黒色粒子を含む。焼成は厚紙。黄灰色 (口頸部内面は一部が灰被り)	1/4残、1-21
1064	埴	1号窯 "	口径大29.4 小14.2 器高 6.2 底径 12.0	砂粒多く胎土はやや粗。焼成良好。 黒灰色を呈する。ヘラケズリは左回り。 本来は口径17cm、器高5.5cmくらいか。	1/1 1-19
1065	器台	1号窯 "		胎土中砂粒多し。赤褐色粒子を含む。 焼成中途(生焼け)。赤褐色を呈する。 土師器と築上りは同じ。口縁の可能性もある。	1/5残、1-87
1066	壺	1号窯 黒色土	口径 15.8	胎土良。焼成はふつう。 淡灰色を呈する。 外面はタタキか。	1/4残、1-73
1067	壺	1号窯 灰原 黒色土	口径 18.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成は中途でもろい。 内外面とも白褐色を呈する。生焼け。	1/4残、1-74
1068	甕	1号窯 "		胎土良。焼成やや弱。 茶褐色を呈する。	カノ破片か、1-101

福元日焼原窯跡群出土土器観察表⑤

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存,実測番号etc.)
1069	甕	1号窯 灰層1層		胎土良、焼成良。 茶褐色を呈する。 緑灰色の釉がかかる。	1-83
1070	壺	1号窯 "	口径 13.4 頸部径 11.2	砂粒多いが胎土良。焼成はあまい。 淡灰色を呈する。	1/5残、1-22
1071	壺	1号窯 "		砂粒が多いが胎土良。焼成はあまい。 灰褐色を呈する。	1/4~1/5程が残存。 1-25
1072	"	1号窯 灰原 黒色土	口径 20.0	胎土精良、焼成良好。 紫灰色で灰被り部分は黄灰白色。	1/2残、1-66
1073	"	1号窯 灰層1層		胎土中砂粒多し。焼成不十分。 赤褐色を呈する。 土師器に似るが、生焼け。	1/3残、1-69
1074	"	1号窯 "		胎土良。焼成はあまい(中途) 黄茶灰色を呈する。	1075とよく似る 1-65
1075	"	1号窯 "	口径 36.0	胎土中砂粒やや多し。焼成良好。 灰黒褐色を呈する。	1/5残、1-67,68,81
1076	?	1号窯 "	口径 42.6	胎土はやや粗い。焼成良好。 淡黒色を呈する。 器台か。	1/13残、1-82
1077	坏蓋	1号窯 埋土中	口径 13.75 器高 4.75	胎土は2.5mm以下の砂粒を含む。 焼成は硬。内面淡灰色。外面黄灰色~淡灰色 ヘラケズリは左回り。	完形、1-27
1078	坏身	1号窯 上面	口径 11.4 受部径 14.0	胎土良、焼成良。 灰黄色を呈する。	1/8残、1-97
1079	"	1号窯 排水溝	口径 11.6 器高 3.0 受部径 14.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成良好。 内外面とも灰色。 ヘラケズリは右回り。	完形、1-60
1080	"	1号窯 "	口径 11.8 受部径 14.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成良好。 内外面ともうすい茶灰色。	1/8残、1-61
1081	"	1号窯 "	口径 12.0 器高 3.8 受部径 14.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面うすい灰色、外面うすい灰色・赤茶色を呈するが、一部高温 にて紫色にかわる。 ヘラケズリは右回り。	1/4残、1-59
1082	壺	1号窯 "	口径 25.2	胎土良、焼成良。 灰茶褐色を呈する。	1/10残、1-82
1083	坏蓋	1号窯 裏面上層	口径 14.5 器高 5.15	胎土は1mm前後の砂粒多く含む粗い。 焼成は硬。内面黄灰色~淡黄灰色、外面黄灰色~黒黄灰色 ヘラケズリは左回り。	2/3残、1-26 所々に焼土彫れがある。 全体灰被り。
1084	坏身	1号窯 "	口径 12.45 器高 5.1 受部径 15.0	胎土は1~4mm大の石英、白色粒を若干含む。砂粒を多く含むや や粗い。焼成は堅い。 内面は茶灰色、外面は暗灰色~茶灰色で内外面とも灰被り。 ヘラケズリは右回り。	2/5残、1-28
1085	高坏	1号窯 "	口径 12.45 器高 8.62 受部径 14.5 脚部径 8.8	胎土は細砂を多量含む。焼成は硬。 内面は淡黄灰色~灰色、外面は暗緑灰色を呈する。 脚部は3.6cm。ヘラケズリは左回り。	坏蓋は完形。 脚部は1/8残。 1-29

稲元日焼原野跡群出土土器観察表⑥

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存, 発掘番号etc.)
1086	高杯	1号窯 高台上層	口径 12.5 器高 7.5 底径 8.95 受部径 14.9	胎土は1.5mm以下の砂粒を少し含む。細砂多量含むが良好。焼成は硬。内面は淡黄灰色、外面は淡黄灰色～暗緑灰色。脚高は3.7cm。脚内面にヘラ記号。	坏部の一部を1/3程欠くが略完形。1-30
1087	甕	1号窯 "	口径 17.8 器高 26.9 最大胴径 25.3	胎土は砂粒をやや含む。焼成はあまい。灰色。	ほぼ完形。1-88
1088	"	1号窯 "	口径 15.8 器高 26.6 最大胴径 29.3	胎土中砂粒を少し含む。焼成は良。灰色～黒灰色を呈する。	完形。1-93
1089	"	1号窯 "	口径 18.8 器高 32.5 最大胴径 33.0	胎土中砂粒を若干含む。焼成良(底部のみ焼成があまい)。灰色。	完形。1-90 1090と同一工人の作
1090	"	1号窯 "	口径 18.1 器高 33.5 最大胴径 32.5	胎土中砂粒を若干含む。焼成良(底部のみ焼成があまい)。灰色を呈する。1-90と同一人の作。	6/7残。1-89
1091	"	1号窯 "	口径 20.1 器高 33.1 最大胴径 33.7	胎土中細砂粒をやや多く含む。焼成良か? 灰色～黒色(外面のかんりの部分が灰被り)	完形。1-92
1092	"	1号窯 "	口径 23.5 器高 44.3 最大胴径 43.9	胎土中砂粒を少し含む。焼成良(内外面、口縁部灰被る。外面胴部とところどころ灰かぶる)。黄灰色～暗灰色	完形。1-91
1093	"	1号窯 脚部部 K-1上	口径 21.4 器高 34.0 最大胴径 26.5~27.8	胎土中細砂と小砂を多く含む。焼成良好。内面は明るい茶色。外面は明るい茶色～黒(外面黒斑)。	1/2残。1-94 土師器
1094	"	1号窯 脚部部 K-1下	口径 21.9 器高 35.8 最大胴径 26.9	胎土中砂粒をやや含む。焼成はふつう。内面は暗褐色。外面は暗褐色～黒色。胴中位～下半に黒斑2つあり。	1/2残。1-95 土師器
2001	坏蓋	2号窯 18次床	口径 13.2 器高 4.3	胎土は2mm以下の砂粒少し含む。細砂多量含む。焼成は硬。内面は緑灰色～淡黒灰色、外面は黒灰色～淡黒灰色～黄灰色。外面灰被り。ヘラケズリは右回り。	2/3残。2-4
2002	"	2号窯 "	口径 14.2 器高 4.2	胎土中2.5mm以下の砂粒含む。焼成は硬。内面は黒灰色～淡黒灰色、外面は黒灰色～暗茶灰色～淡灰色。外面に赤黄褐色の土をかぶる。ヘラケズリは右回り。	4/5残。2-6
2003	"	2号窯 "	口径 13.6 器高 3.8	胎土は砂粒を少し含む。焼成は良。内面は灰色～暗灰色。外面は灰色～黒色(外面灰被る)。ヘラケズリは右回り。外天井部にキズあり。	ほぼ完形。 (口縁部1/5くらい欠く) 2-14
2004	"	2号窯 2-17 次床	口径 13.6 器高 5.1	胎土は砂粒をやや含む。焼成ふつう。茶灰色を呈する。ヘラケズリは右回り。外天井部にキズあり。	完形。2-9
2005	"	2号窯 "	口径 14.5 器高 4.7	胎土は砂粒をやや多く含む。小指の先大の眼を1つ含む。焼成ふつう。濃力灰色でくすんでいる。ヘラケズリは右回り。	1/2残。2-29
2006	"	2号窯 1-17 次床	口径 13.85 器高 5.0	胎土は3mm以下の砂粒含む。焼成硬。内面は黒灰色、外面は黒灰色～暗茶灰色。黒くいぶされている。ヘラケズリは右回り。	1/10を欠くのみで略完形。2-2
2007	"	2号窯 2-12 次床	口径 14.2 器高 3.8	胎土中砂粒を少し含む。焼成はふつう。外面は黒褐色に白斑がついたようで、内面はいぶされて黒灰色となる。天井部はかなり分厚い。ヘラケズリは右回り。	ほぼ完形。2-10
2008	"	2号窯 "	口径 13.45 器高 4.95	胎土中細砂を多く含む。焼成は硬。内面は暗緑灰色～淡黒灰色、外面は黒灰色～淡黒灰色で灰被り。ヘラケズリは右回り。	1/2残。2-3

稲元日焼原器群出土土器観察表⑦

遺物 番号	器種	出土 地点	法量 (cm)	粘土・焼成・色調 その他	備考(残存、実測番号etc.)
2009	坏蓋	2号窯 12次床	口径 14.2 器高 4.5	胎土は3.5mm以下の砂粒を含み、細砂多く含む。 焼成は硬。内面は淡黒灰色～暗灰色、外面は淡黒灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/2残、2-5 ややひずみあり。
2010	"	2号窯 "	口径 15.4 器高 4.7	胎土中砂粒を少し含む。焼成は良好。 内面は灰色、外面は黄灰色、外面灰被る。だ円形に変形する。 ヘラケズリは左回り。	1/2残、2-6
2011	"	2号窯 "	口径 14.3 器高 4.9	胎土中砂粒を少し含む。焼成はふつう。 内面は灰色、外面は茶灰色～黒色(黒光りする) ヘラケズリは左回り。	4/5残、2-13
2012	"	2号窯 8次床	口径 14.7 器高 4.6	胎土中砂粒を若干含む。焼成は良。 外面は黒茶褐色(備前焼風)、内面は黄褐色(泥土付着で取もよう) 口唇外端に面をとる。	2/3残、2-17
2013	"	2号窯 3次灰床	口径 13.5 器高 3.1	胎土中砂粒、砂礫を少し含む。焼成はふつう。 内面は灰色、外面は灰色～黒色。 ヘラケズリは左回り。	4/5残、 (口縁は1/6残) 2-11
2014	"	2号窯 1次床	口径 15.2 器高 4.6	胎土は砂粒含むが良好。焼成(軟)中途でもろい。 内面黄褐色、外面は黄灰色～暗灰色。 ヘラケズリは左回り。	略完形、2-1
2015	"	2号窯 "	口径 16.0 器高 3.6	胎土中細砂を多く含む。焼成は良。 内外面ともうすい茶灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/4残、2-30
2016	"	2号窯 "	口径 13.7 器高 4.2	胎土中砂粒を少し含む。焼成は良。 内面は橙灰色、外面は黄灰色。 外天井部に腐蝕付着。	ほぼ完形、2-12
2017	"	2号窯 "	口径 13.4 器高 3.8	胎土は砂粒をやや含む。焼成はふつう。 えび茶っぽい灰色(備前焼風の色と焼き上がり) ヘラケズリは左回り。	1/2残、2-27
2018	坏	2号窯 18次床		胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は灰色(白灰色)、外面は暗灰色(灰被り)、 釉だまりあり。	1/10残、2-53
2019	"	2号窯 12次床	蓋口径 12.5 身口径 10.4 受部径 13.0	胎土は細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は灰色、外面は灰色～暗灰色(灰被り)。	1/4残、2-54
2020	"	2号窯 "	蓋口径 11.4 身口径 10.4 受部径 12.0	胎土は良。焼成堅緻。 内面は灰紫色、外面は灰褐色～黄褐色で釉がかかる。 釉だまりあり。	1/4残、2-52
2021	坏身	2号窯 18次床	口径 11.8 受部径 14.0	胎土は良。焼成良。 いぶされて磨滅している。外底部にヘラ記号あり。 ヘラケズリは左回り。	3/5残、2-50
2022	"	2号窯 2-17次床	口径 13.0 器高 4.55 受部径 15.2	胎土中3mm以下の砂粒を少し含む。焼成は硬。 内面は黒灰色、外面は黒灰色で灰被り(いぶされている)。 ヘラケズリは右回り。	1/2残、2-28
2023	"	2号窯 "	口径 12.0 器高 4.75 受部径 14.4	胎土中1mm大の石英・白色粒を若干含む。砂粒をわずかに含む。 焼成はやや軟質。 淡灰色～淡緑灰色。ヘラケズリは左回り。	3/5残、2-21
2024	"	2号窯 "	口径 12.4 器高 5.35 受部径 15.0	胎土は1mm大の石英を含む。砂粒を多く含む。 焼成は堅緻。内面は緑茶灰色(くすんでいる)、外面は暗黒灰色 (灰被りでテカテカしている)。ヘラケズリは右回り。 器高のわりには立上りが短い。	1/2残、2-24
2025	"	2号窯 "	口径 12.6 器高 4.5 受部径 15.4	胎土は良。焼成良。 黒色を呈する。外底部にヘラ記号あり。底部はかなり分厚い。 ヘラケズリは左回り。	2/3残、2-38

福元日焼原窯跡群出土土器観察表⑧

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	粘土・焼成・色調 その他	備考(残存、実測番号等)
2026	坏身	2号窯 2-17 次床	口径 12.3 器高 5.3 受部径 14.7	粘土中細砂を多く含む。焼成は良。 内外面とも黒灰色。外面灰被り(いぶされている) 外底部にヘラ記号。ヘラケズリは右回り。	口縁部1/3残。2-36
2027	"	2号窯 "	口径 12.65 器高 5.25 受部径 15.2	粘土は1mm大の石英、白色粒をわずかに含む。砂粒を多く含む。 焼成は堅緻。内面は暗灰色。外面は暗緑灰色。 ヘラケズリは左回り。	3/5残。2-23
2028	"	2号窯 "	口径 11.6 器高 5.3 受部径 13.4	粘土は良。焼成堅緻。 黒灰色。内面はいぶされている。外面灰被り。 ヘラケズリは左回り。	1/4残。2-49
2029	"	2号窯 "	口径 12.1 器高 5.2 受部径 14.5	粘土は1-2mmの石英、白色粒をわずかに含む。 砂粒を若干含む。焼成はやや堅い。 内面は黒色でくすんでいる。外面は黒色~灰黒色(灰被りで黒光りしている)ヘラケズリは右回り。	9/10残。2-25
2030	"	2号窯 "	口径 12.2 器高 5.15 受部径 14.8	粘土中砂粒を多量に含む。焼成は堅緻。 内面は黒色。外面は灰黒色に黄灰色の灰被り。 外底部は手持ちのヘラケズリ。内底部に擦過した痕あり。	完形。2-26
2031	"	2号窯 1-17 次床	口径 12.1 器高 5.0 受部径 14.5	粘土は良。焼成堅緻。 黒灰色を呈する。自然釉により黒光りする所あり。 底部はきわめて分厚い。ヘラケズリは左回り。 外底部にヘラ記号あり。	2/3残。2-37
2032	"	2号窯 12次床	口径 12.85 器高 6.1 受部径 15.2	粘土は黒色粒、細砂粒、赤褐色粒。焼成は良好。 内面は淡灰色。外面は暗緑灰色で灰被り。 ヘラケズリは右回り。かなり深みのある器形となる。	1/2残。2-20
2033	"	2号窯 "	口径 11.75 器高 5.15 受部径 14.2	粘土は細砂粒を含む。焼成は良好。 内面は暗茶灰色。灰被りでまだら状になっている。外面は淡黄灰色。黒緑灰色。いぶされたように黒くなり。その上に釉がかかる ヘラケズリは左回り。	2/5残。2-19
2034	"	2号窯 1次床	口径 10.4 器高 4.1 受部径 12.1	粘土中細砂を多く含む。焼成は良いがやや軟。 内外面とも茶灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/2残。2-32
2035	"	2号窯 2次床	口径 12.55 器高 4.1 受部径 14.7	粘土中細砂粒を少量含む。焼成は硬質。 内面は暗茶褐色。外面は茶褐色。緑灰色。全体に茶褐色で、一部灰被り。 ヘラケズリは左回り。外底部にヘラ記号。	3/5残。2-15
2036	"	2号窯 1次床	口径 14.2 受部径 15.8	粘土は良。焼成は中途。 黄灰褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/3残。2-48
2037	"	2号窯 "	口径 12.0 器高 3.7 受部径 14.2	粘土中細砂を多く含む。焼成は良。 内外面とも灰色。口縁部分灰被り。 ヘラケズリは左回り。	口縁2/3残。2-33
2038	"	2号窯 "	口径 12.0 器高 3.8 受部径 14.3	粘土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/4残。2-51
2039	"	2号窯 "	口径 11.0 器高 3.8 受部径 13.1	粘土は良。焼成堅緻。 黄茶灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	2/3残。2-34
2040	"	2号窯 "	口径 11.1 器高 4.1 受部径 13.2	粘土は良。焼成も良。 灰黒色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	3/5残。2-35 2034によく似る。
2041	"	2号窯 "	口径 11.4 器高 4.2 受部径 13.3	粘土は良。焼成も良。灰褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	2/5残。2-39
2042	"	2号窯 "	口径 11.0 器高 4.1 受部径 13.0	粘土中白色粒、砂粒を多く含む。粗い石英をわずかに含む。 焼成は堅い。緑茶灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/2残。2-22

稲元日焼原窯跡群出土土器観察表⑨

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存、実測番号etc.)
2043	坏身	2号窯 前庭部 9層	口径 12.4 器高 4.0 受部径 14.9	胎土中細砂を若干含む。焼成は良好。 内外面とも灰色～暗灰色～茶灰色、外面一部灰被り。 ヘラケズリは左回り。外底部にヘラ記号。	1/3残、2-40
2044	"	2号窯 "	口径 12.05 器高 4.73 受部径 14.3	胎土中細砂を少し含む。大砂粒も含む。焼成は良好。 内面は黒灰色、外面は暗茶灰色で一部灰被り。 内底部に黄褐色の上付着。ヘラケズリは左回り。	完形、2-18
2045	蓋	2号窯 "	口径 13.6 器高 3.9	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも茶灰色。	1/4残、2-56 梨の蓋か。
2046	"	2号窯 18次床	つまみ径 3.6 つまみ高 1.1	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも黒色を呈する。外面灰被り。	2-60
2047	"	2号窯 前庭部 14層	つまみ径 3.7 つまみ高 0.9	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は暗灰色、外面は暗灰色～黒色で灰被り。 ヘラケズリは左回り。	2-59
2048	高坏	2号窯 2-12 次床		胎土は砂粒がやや多し。焼成は良好。 黒灰色を呈する。罫目文の模様が日本。 内底部は当具痕らしい。	2-61 蓋の可能性もないでは ない。
2049	"	2号窯 12次床	口径 13.2 受部径 15.0	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は灰色～明るい茶(鉄粉か)、外面は灰色～黒。 外面灰被りで自然軸、内面は泥土付着。 ヘラケズリは左回り。罫目は8本。	2/3残、2-31
2050	"	2号窯 12次床	口径 11.0	胎土は良。焼成も良。 灰黒褐色(内面は窯体の一部、泥土が付着)	1/4残、2-57
2051	"	2号窯 1次床	口径 10.0	胎土は良。焼成は堅緻。 外面は黒灰色、内面は黄茶褐色～自然軸付着。 ヘラケズリは左回り。	1/4残、2-55
2052	"	2号窯 黒 2	口径 13.5	胎土は良。焼成も良。 茶黒色を呈する。 脚部接着用の細いミゾがある。	1/5残、2-58
2053	"	2号窯 黒 4-6	底径 11.4	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも茶灰色～黒色で、外面灰かぶり自然軸付着。 透孔は3個。	1/5残、2-67
2054	"	2号窯 赤 4	底径 9.6	胎土中細砂を多く含む。焼成良好。 内面は明るい茶色、外面は茶灰色で松葉色の自然軸。 透孔は3個。	3/4残、2-42
2055	"	2号窯 赤 4	底径 10.0	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色を呈する。外面灰被り。 透孔は3方。	1/5残、2-65
2056	"	2号窯 12次床	底径 13.6	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は灰色～明るい茶色、外面は灰色～黒色(自然軸)。 透孔は4方。外面の軸が香しい。長脚か?	1/4残、2-64
2057	"	2号窯 "	底径 9.2	胎土は細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色。 透孔は3方。	2/3残、2-41
2058	"	2号窯 "	底径 9.4	胎土は細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色。鉄分を含んだような色で外面灰被り。 透孔は3方。歪んでいる。	2-43
2059	"	2号窯 9次所蔵	底径 9.2	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも茶灰色で、鉄分を含んだような色調を呈す。 透孔は3方。	1/4残、2-68

稲元日焼原窯跡群出土土器観察表⑩

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存、実測番号etc.)
2060	罎	2号窯 1次床	口径 10.0 器高 12.9 胴径 7.8	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は黄灰色、外面は黄灰色～暗灰色で灰被り。 口縁下と頸部下端に刺突文。胴下半は手持ちのケズリ。	完形。2-46
2061	罎	2号窯 照 1	口径 8.0 胴径 13.2	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は暗灰色、外面は灰色～暗灰色で灰被り。 ヘラケズリは右回り。蓋をして焼成している。	1/4残。2-62
2062	"	2号窯 埋土中	口径 7.4 器高 8.7 最大胴径 13.8	胎土中細砂を多く含む。焼成はやや軟。 内外面とも暗灰色。ヘラケズリは右回り。 口径10cmの蓋をして焼成している。	ほぼ完形。2-44
2063	鉢	2号窯 埋土中	口径 17.0	細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色。良鉢か。	1/4残。2-76
2064	埴輪	2号窯 2-17 次床		胎土は細砂を若干含む。焼成は良好。 暗灰色。	耳のみ。2-75
2065	"	2号窯		胎土は細砂を多く含む。焼成良好。 黄褐色～黒色を呈し、灰かぶりて若干粒が付着。	耳のみ。2-74
2066	甕	2号窯 埋土中	口径 25.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面ともうすい灰色。口縁内側と外肩部が灰被り。 頸部はかなり分厚い。	1/6残。2-72
2067	"	2号窯 胴部 1次上層	口径 20.0	細砂をやや多く小砂若干含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色で灰被り。	1/4残。2-73
2068	"	2号窯 埋土中	口径 23.4 最大口径 24.7	胎土は砂粒を少し含む。焼成は良。 灰色を呈し、緑灰色～黒色の粒がかかる。 蓋みがある。	1/2残。2-47
2069	"	2号窯 右側水溝	口径 24.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成良好。 内外面ともうすい灰色～茶褐色(自然釉)	1/4残。2-7
2070	坏壺	2号窯 窯後方 遺構	口径 13.4 器高 5.1	胎土は2mm以下の砂粒を含む。細砂を多量含む。 焼成は硬。内面は黄茶灰色～淡黄灰色、外面は黄茶灰色～淡黄黒 灰色(内外とも灰被り)で特に外天井部は著しい。 ヘラケズリは左回り。	1/2残。2-7
2071	"	2号窯 "	口径 14.7 器高 5.0	胎土は細砂をやや多く粗砂若干含む。焼成中途であまい。 内面は明るい茶灰色、外面は明るい茶色～灰色。 ヘラケズリは右回り。つくりがあかぬけない。	1/2残。2-70
2072	"	2号窯 "	口径 15.2 器高 4.6	胎土中砂粒をやや含む。焼成は良。 内面黄褐色、外面黒色、黒黄色。 ヘラケズリは左回り。	2/3残。2-16
2073	壺	2号窯 "	口径 9.0	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良。 内面は黄灰色～暗灰色、外面は黄灰色～黒色。 外面～内面口縁部にかけて灰かぶりて自然釉付着。	1/4残。2-63
2074	高坏	2号窯 "	口径 9.8	胎土は良。焼成ややあまい。 灰黒色を呈し、外面少し灰被り。 透しは3方。	1/3残。2-69
2075	"	2号窯 "	口径 9.6	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色で灰被り、黒い斑点あり。 透孔は2個らしい。	1/3残。2-66
2076	"	2号窯 "	口径 14.6	胎土中細砂を多く含む。焼成良好。 内面は灰白色、外面は灰色～暗灰色で灰被り。 長脚の二段透しとなる。透孔は3方。	ほぼ完形。2-45

稲元日焼原窟跡群出土土器観察表①

遺物番号	器種	出地上点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存, 実測番号etc)
2077	壺	2号窯 竈後方遺構	口径 10.6 器高 22.4 最大口径 22.5	胎土中砂粒を若干含む。焼成は良。 内面は黄灰色、外面は黄灰色～茶褐色～黒灰色。 外面半分くらいは茶褐色～黒灰色の釉がかかる。	4/5残、2-77 かなり重い
3001	坏蓋	3号窯 7次床	口径 13.4 器高 4.8	胎土は良。焼成は硬。 内面は淡黒灰色、上が付着し、それがウロコ状にひびわれている 外面は淡黒灰色～黒灰色、器壁の崩れが付着で灰被り。	2/3残、3-11
3002	"	3号窯 "	口径 13.45 器高 5.2	胎土は1～2mm大の石英をわずかに含む。焼成は堅緻。 内面は灰色～灰黒色～茶灰色。外面は黒色(黒光り)。内外とも縁 種風の所がある。やや重みあり。 ヘラケズリは右回り。	1/2残、3-4
3003	"	3号窯 "	口径 14.0 器高 4.6	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも黒色。内外面壁体の一部付着し、自然釉も付く。 変形している。ヘラケズリは左回り。	2/3残、3-83 3008とよく似る。
3004	"	3号窯 6次床	口径 13.6 器高 4.33	胎土は細砂粒を含む。茶褐色粒。焼成は良好。 内面は暗茶色としむい緑色、外面は一部茶黒色。 ヘラケズリは右回り。	3/5残、3-7
3005	"	3号窯 "	口径 13.45 器高 4.5	胎土は細砂粒が多い。焼成は良。 内面暗緑灰色、外面は黒灰色。 ヘラケズリは右回り。	完形、3-18
3006	"	3号窯 "	口径 13.35 器高 3.7	胎土中細砂粒、4.5mm大の小石を少し含む。焼成は硬く良。 内面は暗灰色、外面は淡黒色、一部灰黒色で灰被り。 ヘラケズリは右回りで二度行う。	口縁の1/4を欠き、全体 で6/7残、3-9
3007	"	3号窯 "	口径 12.55 器高 4.4	胎土中1～2mm大の石英を多く含む。大砂粒も含む。 焼成堅い。内面は暗灰色～茶灰色、外面は灰黒色～暗灰色(一部 茶色)。口縁部は黒光り。 ヘラケズリは左回り。	5/7残、3-10
3008	"	3号窯 "	口径 13.6 器高 4.7	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は暗灰色、外面は茶褐色～黒で自然釉付着	7/10残、3-111 3003とよく似る。
3009	"	3号窯 "	口径 13.3 器高 3.7	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は暗灰色(くすんだ灰色)外面は黒光りし灰被りで自然釉 (泥土も付着) ヘラケズリは左回り。	5/6残、3-113
3010	"	3号窯 2-5次 床	口径 14.15 器高 5.38	胎土中黒色粒、橙茶色粒、黄褐色粒あり。焼成は硬い。 内面は黒色で一部淡乳色、外面緑黒色。内外面とも灰被り。 ヘラケズリは左回り。体部外面に刺突痕あり。	9/10残、3-6
3011	"	3号窯 "	口径 14.85 器高 5.65	胎土中1～2mm大の長石、石英を多く含む。白色粒、砂粒を多く 含む。焼成はやや堅い(少しあまい)。内面は緑灰色～茶灰色でや やくすんでいる。外面は緑灰色～茶灰色。ヘラケズリは左回り。 外天井部にワラ状原体での擦過痕あり。	口縁部1/2欠損、3-16
3012	"	3号窯 "	口径 13.4 器高 4.6	胎土中、細砂粒多し。焼成は良好。 内面は暗灰色、外面は淡黒色(灰被り) ヘラケズリは右回りで、所々に不連続のところあり。	3-14
3013	"	3号窯 2-5次 床	口径 14.0 器高 4.5	胎土中細砂を含む。焼成は硬。 内面は淡黒灰色、外面は暗緑灰色で灰被り、壁体の崩れが付着す る。口縁はかなり細身となる。	2/3残、3-13
3014	"	3号窯 "	口径 14.0 器高 4.7	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色で鉄分と思える色あり。 ヘラケズリは右回り、体部に擦合痕あり。	1/4残、3-114
3015	"	3号窯 "	口径 14.25 器高 4.1	胎土中、赤色粒、緑砂粒あり。焼成は良。 内面は灰色、黄茶褐色の泥付が付着する。外面は黄灰色。 ヘラケズリは左回り、口唇外縁に面をとる。	3-19
3016	"	3号窯 "	口径 11.0	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は白灰色、外面は灰色～茶灰色。	1/8残、3-84

稲元日焼原窯跡群出土土器観察表②

遺物番号	器種	出地上点	法 量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(保存・実測番号etc.)
3017	坏蓋	3号窯 2~5床	口 径 13.0	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は黄灰色、外面は暗灰色~白灰色で伏張り。 割れ口に灰を被る(一部)。	1/8残、3-65
3018	"	3号窯 "	口 径 14.15 器 高 3.65	胎土は精良。焼成は硬い。 内面は淡緑灰色~黒灰色、外面は淡黒灰色。 内面は黄褐色の土が付着する。外面は灰張り、ぼつりした感じが強い。ヘラケズリは右回り。	3-15
3019	"	3号窯 "	口 径 13.6 器 高 4.55	胎土中3.5mmの砂粒1つ含む、1mm前後の砂粒を多く含む。 焼成は硬い。内面は暗茶灰色~淡黒灰色でくすんでいる。 外面は黒茶灰色~淡黒灰色(わずかに灰張り) ヘラケズリは右回り。	3/4残、3-3
3020	"	3号窯 "	口 径 14.4 器 高 4.0	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は暗灰色、外面は灰色~黒色、灰かぶりて一部自然釉。 ヘラケズリは左回り。	3-82
3021	"	3号窯 "	口 径 14.6 器 高 4.3	胎土は精良。焼成は堅固。 暗灰緑色を呈する。かなり精良な土器である。 ヘラケズリは右回り。体部に接合痕あり。	1/4残、3-81
3022	"	3号窯 "	口 径 13.0 器 高 4.3	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は暗灰色、外面は暗灰色~黒色で灰張り。 ヘラケズリは右回り。	1/4残、3-94
3023	"	3号窯 "	口 径 13.2 器 高 4.35	胎土中細砂を含む。焼成は硬い。 内面は暗緑灰色、外面は暗緑灰色~黄灰色。 内面に付着物あり。ヘラケズリは左回り。 外天井部にラワの蓋のような圧痕あり。	ほぼ完形、3-5
3024	"	3号窯 "	口 径 13.4 器 高 3.93	胎土中1~1.5mmの砂粒を僅かに含む。黒色粒、橙茶色粒などあり。 焼成は硬い。内面は白灰色、灰色で黄褐色の土、茶黒色のシミが付着、まだら模様になる。外面は黒色~暗灰色。 ヘラケズリは左回り、3023と同様の圧痕あり。	6/7残、3-2
3025	"	3号窯 2~3床	口 径 4.0 器 高 13.7	胎土中白色粒、砂粒を多く含む。焼成は堅固。 内面は黒灰色(くすんでいる)いぶされた感じ、外面は灰色~灰黒色。 外面天井部灰張り。ヘラケズリは右回り。焼が付いていたようだ。受部端に押え痕あり。	完形、3-1
3026	"	3号窯 6・2次 副庭部	口 径 14.2 器 高 4.55	胎土中3mm以下の砂粒や細砂多く含む。焼成は硬い。 内面は淡黄灰色、外面は淡灰色~黄褐色。 外面に黄褐色の土がかかっている。別個体の破片付着。 ヘラケズリは右回り。	2/3残、3-8
3027	"	3号窯 1次埋土	口 径 14.0 器 高 5.1	胎土中1~3mmの砂粒含む。焼成は硬い。 内面は淡青灰色、外面は黒灰色。ぼつりした感じが強い。 口唇外端にこするようにして面をとっている。 ヘラケズリは右回り。	3-17
3028	"	3号窯 1次床	口 径 13.6 器 高 4.7	胎土中1mm大の石英、白色粒をわずかに含む。砂粒を若干含む。 黒色粒子を含む。焼成はやや硬い。 内面は黄灰色、外面は茶灰色~茶色、灰黄色。 ヘラケズリは左回り。	9/10残、3-12
3029	"	3号窯 1次埋土	口 径 16.0 器 高 4.0	胎土は良。焼成は良好。 内面は灰白黄色、外面は灰白~灰黒色を呈する。ひずみあり。 ヘラケズリは左回り。体部に粘土接合痕が見られる。	1/5残、3-96
3030	"	3号窯 灰取床6	口 径 13.9 器 高 5.2	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色。 外天井部は磨止ヘラケズリ。	1/4残、3-80
3031	坏身	3号窯 6・7床	口 径 10.1 器 高 4.9 受部径 12.8	胎土中1~2mm大の石英をわずかに含む。砂粒を若干含む。 焼成は堅い。内面は緑灰色~暗茶灰色、外面は暗灰色~緑灰色。 一部黄茶色。外面底部一部灰張り。 ヘラケズリは左回り。	1/2残、3-22
3032	"	3号窯 6次床	口 径 11.35 器 高 5.32 受部径 13.4	胎土中細砂粒、砂粒多し。焼成硬い。 内面は暗灰色、外面は黒緑色、淡緑灰色で外面に黄褐色の泥土付着。大きくヒビ割れた所あり。 ヘラケズリは左回り。受部に押え痕あり。	口縁をごく一部欠くのみで完形、3-23
3033	"	3号窯 2~5床	口 径 12.5 器 高 5.0 受部径 14.7	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色で灰張り。 ヘラケズリは右回り。	2/3残、3-71

福元日焼原窯跡群出土土器観察表①

遺物番号	器種	出土点	法 量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存、実測番号etc.)
3034	坏身	3号窯 2~5床	口 径 11.8 受部径 14.0	胎土は細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色。外面灰被り。内面には泥土付着。 ヘラケズリは左回り。	1/2残、3-75
3035	"	3号窯 "	口 径 12.1 器 高 5.0 受部径 14.8	胎土中1mm大の石英をわずかに含む。砂粒を若干含む。 焼成は堅縮。内面は灰黒色。部分的に茶色。外面は暗灰色~緑灰色。 立上りは淡黒色を呈する。底体部は黄灰色で灰被り。 ヘラケズリは右回り。	3-21
3036	"	3号窯 "	口 径 12.0 器 高 4.2 受部径 14.0	胎土は細砂をやや多く。粗砂若干含む。焼成は良好。 内面は緑灰色。外面は茶灰色で灰被り。 ヘラケズリは左回り。	1/4残、3-79
3037	"	3号窯 "	口 径 11.8 器 高 4.5 受部径 14.6	胎土中1~3mm大の石英。白色粒をわずかに含む。砂粒を多く含む。 焼成は堅縮。内面は灰黒色。外面は淡灰色~緑灰色。一部之 び茶色。内外とも灰被りでつやがある。 ヘラケズリは右回り。	1/2弱残、3-28
3038	"	3号窯 "	口 径 11.0 器 高 4.4 受部径 13.5	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は暗灰色。外面は暗緑色~黒。外面灰被りで自然物付着。 ヘラケズリは右回り。一部に手持ちのケズリあり。	6/7残、3-76、3-77
3039	"	3号窯 "	口 径 11.95 器 高 4.6 受部径 14.2	胎土は黒色粒を含む。砂粒多し。焼成は硬い。 内面は灰色。外面は暗緑色。黄褐色の泥土がかかる。 ヘラケズリは右回り。蓋をしての焼成。	9/10残、3-26
3040	"	3号窯 "	口 径 11.2 受部径 13.8	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色で外面一部灰被り。 体部に粘土板貼り合せの痕跡あり。 ヘラケズリは右回り。回転では左回り。	1/4残、3-78
3041	"	3号窯 "	口 径 11.1 器 高 3.88 受部径 13.8	胎土良。内面に橙黄褐色。表面に暗灰色の不純物付着。 焼成は硬い。内面は橙黄褐色~淡灰色。外面は黒色。茶色。内外 ともに自然物のかかった状態。 底体部は切り離したままか。口縁に打欠きあり。	1/2残、3-27
3042	"	3号窯 "	口 径 12.2 器 高 4.7 受部径 14.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は灰色~黄茶色。外面は灰色~黒色。外面灰被りで自然物付 着。ヘラケズリは左回り。 別個の蓋が接着す。	1/4残、3-72
3043	"	3号窯 1次埋土	口 径 11.8 器 高 4.6 受部径 14.0	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良。 内外面ともうすい緑黄灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/3残、3-73
3044	"	3号窯 1次床	口 径 12.3 器 高 4.85 受部径 15.0	胎土中細砂を含む。焼成は硬い。 内面は青灰色~灰色。外面は黒灰色~灰色。 ヘラケズリは左回り。つくりは雑な方である。	3/5残、3-24
3045	坏蓋	3号窯 坏 1	口 径 13.8 器 高 4.0	胎土中細砂を多く含む。小砂若干含む。焼成は良好。 内外面ともうすい灰色。外天井部に擦過のキズあり。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3046とセット 3-63
3046	坏身	3号窯 坏 1	口 径 11.8 器 高 4.5 受部径 13.7	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色。外面若干灰被りか？ ヘラケズリは左回り。	完形、3-64
3047	坏蓋	3号窯 坏 2	口 径 13.8 器 高 4.3	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好だがやや軟質。 内外面ともうすい黄灰色。外天井部に擦過痕多し。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3048とセット 3-40
3048	坏身	3号窯 坏 2	口 径 11.05 器 高 4.8 受部径 13.9	胎土は良。焼成は良いがややあまい。 内外面とも淡灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	完形、3-37
3049	坏蓋	3号窯 坏 3	口 径 14.2 器 高 5.0	胎土中細砂を多く含む。粗砂若干含む。 内外面とも灰色を呈する。焼成良。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3050とセット 3-41
3050	坏身	3号窯 坏 3	口 径 12.4 器 高 5.3 受部径 14.4	胎土中3mm以下の砂粒を少し含むが良好。焼成は硬。 内面は緑灰色。外面は緑灰色~暗灰色。 ヘラケズリは左回り。	完形、3-38

植元日焼原照跡群出土土器観察表③

遺物番号	器種	出地上点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調その他	備考(残存・実測番号etc.)
3051	坏蓋	3号窯 坏 4	口径 14.2 器高 5.0	胎土中細砂を多く含む。焼成はややあまいが良好。内外面ともうすい緑灰色で少し黒ずむ。ヘラケズリは左回り。	完形。3052とセット 3-44
3052	坏身	3号窯 坏 4	口径 12.0 器高 5.6 受部径 14.6	胎土は細砂粒を少量含む。焼成はややあまいが良好。内面は淡灰色で、外面は深緑灰色を呈する。ヘラケズリは左回り。	完形。3-33
3053	坏蓋	3号窯 坏 5	口径 13.8 器高 4.6	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良。内面は暗灰色、外面は灰色～暗灰色で灰被り。ヘラケズリは左回り。	2/3残。3054とセット 3-69
3054	坏身	3号窯 坏 5	口径 12.3 器高 5.1 受部径 14.4	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。内外面とも灰色を呈する。ヘラケズリは左回り。	完形。3-70
3055	坏蓋	3号窯 坏 6	口径 14.0 器高 5.2	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。内外面とも灰色で、外面は灰被り。ヘラケズリは左回り。	完形。3056とセット 3-39
3056	坏身	3号窯 坏 6	口径 11.65 器高 5.2 受部径 14.1	胎土は砂粒を少し含むが精良。焼成はややあまい。内面中心部は黄茶褐色・暗灰色で土が付着している。外面は暗灰色。口縁に補修痕あり。ヘラケズリは左回り。	完形。3-31
3057	坏蓋	3号窯 坏 7	口径 14.9 器高 4.9	胎土は細砂を多く、小砂を若干含む。焼成は良好。内外面とも灰色を呈し、外面灰被り。瓦質に近い。ヘラケズリは左回り。	完形。3058とセット 3-42
3058	坏身	3号窯 坏 7	口径 12.35 器高 5.15 受部径 14.7	胎土中3～4mm大の石を含む。焼成は硬い。内面は青灰色、外面は淡灰色。外底部は粘土がケバだっている。ヘラケズリは左回り。	完形。3-36
3059	坏蓋	3号窯 坏 8	口径 14.6 器高 5.2	胎土は細砂を多く、小砂若干含む。焼成は良好。内面は灰色、外面は灰色～茶灰色。ヘラケズリは左回り。	9/10残。3060とセット 3-45
3060	坏身	3号窯 坏 8	口径 12.35 器高 4.95 受部径 14.6	胎土中砂粒を少し含む。焼成は良。内面は青灰色、外面は淡緑灰色。ヘラケズリは左回り。	完形。3-24
3061	坏蓋	3号窯 坏 9	口径 13.6 器高 5.0	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。内外面とも灰色で、外面灰被り。口縁外面にヘラ記号?ヘラケズリは左回り。	9/10残。3062とセット 3-59
3062	坏身	3号窯 坏 9	口径 11.5 器高 4.8 受部径 13.8	胎土は細砂をやや多く含む。焼成は良好。内面は灰色、外面は灰色～暗灰色を呈し、外面灰被り。ヘラケズリは左回り。	完形。3-60
3063	坏蓋	3号窯 坏 10	口径 13.4 器高 4.8	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。内面は灰色、外面は暗灰色で外面灰被り。外天井部にヘラ記号?(うすい)。ヘラケズリは左回り。	完形。3064とセット 3-61
3064	坏身	3号窯 坏 10	口径 11.2 器高 4.8 受部径 13.4	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。内面は灰色、外面は灰色～暗灰色。口縁外面に引っかきキズらしきものあり。ヘラケズリは左回り。	完形。3-62
3065	坏蓋	3号窯 坏 11	口径 13.6 器高 4.6	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。内面は灰色、外面は灰色～暗灰色。口縁内外に指つまみの痕あり。ヘラケズリは左回り。	完形。3066とセット 3-57
3066	坏身	3号窯 坏 11	口径 11.8 器高 4.6 受部径 13.9	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。内外面とも灰色を呈する。ヘラケズリは左回り。	完形。3-58
3067	坏蓋	3号窯 坏 12	口径 13.3 器高 4.2	胎土は良。焼成はやや軟。黄緑灰色を呈する。内面に刺突した痕あり。ヘラケズリは左回り。	完形。ややひずみあり。3068とセット 3-67

桶元日焼原跡群出土土器観察表⑤

通号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存,実測番号etc.)
3068	坏身	3号窯 坏 12	口径 11.9 器高 4.7 受部径 13.8	胎土は良。焼成はやや軟。 黄緑灰色を呈する。口縁部に補修痕2つあり。 ヘラケズリは左回り。	完形。3-68
3069	坏蓋	3号窯 坏 13	口径 13.8 器高 4.9	胎土中細砂を多く含む。焼成はややあまいが良。 内外面ともうすい灰色。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3070とセット 3-46
3070	坏身	3号窯 坏 13	口径 11.3 器高 5.0 受部径 13.8	胎土中2~3mm大の石灰を含む。焼成はややあまい。 内面は淡黄上灰色、外面は淡灰茶色。 外底部に擦過痕。ヘラケズリは左回り。	ほぼ完形。3-29
3071	坏蓋	3号窯 坏 14	口径 13.9 器高 4.7	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色を呈する。内天井部には同心円当具痕らしきものあり。ヘラケズリは左回り。	完形。 3072とセット 3-49
3072	坏身	3号窯 坏 14	口径 12.0 器高 4.7 受部径 14.2	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも白灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	完形。3-50
3073	坏蓋	3号窯 坏 15	口径 13.8 器高 4.8	胎土中細砂をやや多く、小砂を若干含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色を呈し、外面天井部灰被り。 ヘラケズリは左回り。内面指つまみ痕あり。	完形。 3074とセット 3-55
3074	坏身	3号窯 坏 15	口径 12.0 器高 4.6 受部径 14.0	胎土中細砂を多く、小砂を若干含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色を呈する。ヘラケズリは左回り。	完形。3-56
3075	坏蓋	3号窯 坏 16	口径 13.2 器高 4.9	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色で、外面灰被り。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3076とセット 3-47
3076	坏身	3号窯 坏 16	口径 11.05 器高 4.7 受部径 13.3	胎土中細砂粒を少量含む。大砂粒もあり。 焼成は良好。内面は淡灰色、外面は緑灰色。 受部端に押え痕あり。ヘラケズリは左回り。	完形。3-30
3077	坏蓋	3号窯 坏 17	口径 13.8 器高 5.0	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色。ヘラケズリは左回り。	完形。 3078とセット 3-65
3078	坏身	3号窯 坏 17	口径 11.6 器高 4.9 受部径 13.9	胎土は細砂を多く、小砂若干含む。焼成は良好。 内外面とも緑灰色。ヘラケズリは左回り。 体部中途で粘土検目ありか。	完形。3-66
3079	坏蓋	3号窯 坏 18	口径 14.0 器高 4.9	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は灰色、外面は灰色~暗灰色で灰被り。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3080とセット 3-51
3080	坏身	3号窯 坏 18	口径 11.7 器高 4.3 受部径 13.8	胎土中細砂を多く、小砂若干含む。焼成は良好。 内外面とも灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	完形。3-52
3081	坏蓋	3号窯 坏 19	口径 13.7 器高 4.8	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色を呈し、外面若干灰被り。 ヘラケズリは左回り。瓦質に近い。	完形。 3082とセット 3-53
3082	坏身	3号窯 坏 19	口径 11.8 器高 4.8 受部径 14.0	胎土中細砂を多く、小砂を若干含む。焼成は良。 内外面とも暗灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	完形。3-54
3083	坏蓋	3号窯 坏 20	口径 13.7 器高 4.8	胎土は細砂をやや多く含む。焼成はやや軟質だが良。 内面は灰色、外面は灰色~暗灰色で一部灰被り。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3047, 3067, 3069, 3085と似る。 3084とセット 3-43
3084	坏身	3号窯 坏 20	口径 11.5 器高 4.55 受部径 13.9	胎土中黒色粒を含む。砂粒多し。焼成は良好。 内面は青灰色、外面は黒灰色~青灰色。 ヘラケズリは左回り。	完形。3-32

福元日焼原跡群出土土器観察表⑩

遺物番号	器種	出土点	法量(cm)	胎土・焼成・色調その他	備考(残存・実測番号etc.)
3085	坏蓋	3号窟	口径 14.0 器高 4.7	胎土中細砂を多く含む。焼成はやや軟質だが良。 内外面とも灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3086とセット 3-48
3086	坏身	3号窟	口径 11.95 器高 4.76 受部径 14.1	胎土中白色粒を少し含む。焼成はややあまいが良。 内面は淡灰黄色。外面は白灰色。 ヘラケズリは左回り。	完形。 3-35
3087	高坏	3号窟 6-7床	口径 11.4 受部径 11.2	胎土は良。焼成は堅緻。 内面は淡黒色でくすんでいる。外面は黒褐色～黄黒色を呈し、灰 被りで斑になっている。 ヘラケズリは右回り。	1/4残。3-95
3088	"	3号窟 2-5床	口径 11.6 受部径 11.2	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面黒色。外面は暗灰色。内外面とも灰被り。	1/3残。3-93
3089	"	3号窟 2-5床	口径 14.4	胎土は良。焼成は堅緻。 内面は黒灰褐色。外面は黒灰色で灰被り。	1/5残。3-86
3090	"	3号窟 2-5床	底径 11.0	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色～黒色。灰被りで自然釉付着。 透孔は3方。	1/3残。3-88
3091	"	3号窟 2-5床	底径 8.4	胎土中細砂を若干含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色～暗茶褐色。灰被りで自然釉付着。 透孔は4方。	1/2残。3-109
3092	"	3号窟 2-5床	底径 9.3	胎土は良。焼成は堅緻。 内面は黒色でいぶされた様子。外面は泥土をかぶって黄黒色の斑 風となる。透孔は3方。	1/4残。3-90
3093	"	3号窟 2-5床	底径 9.0	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色。透孔は3方。 坏部との接合面に浅い溝を入れている。	1/6残。3-89
3094	"	3号窟 2-5床	底径 8.2	胎土は精良。焼成は堅緻。 濃緑灰色を呈する。内面に泥土付着。 透孔は3方。	2/5残。3-91
3095	"	3号窟 2-5床	底径 9.3	胎土中に砂粒多し。焼成良好。 灰青色を呈する。残存部分に透孔は見えない。	1/3残。3-87
3096	"	3号窟 4次灰原	底径 9.3	胎土良。焼成堅緻。 淡灰色を呈する。透孔は4方。	1/5残。3-92
3097	"	3号窟 2-5次床 赤 6	底径 9.0	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色を呈し灰被り。 透孔は3方。	2/3残。3-110
3098	甕	3号窟 灰原 赤 2	口径 11.6	胎土は良。焼成良。 灰色を呈する。あかぬけたつくりの土器である。	1/6残。3-101
3099	壺?	3号窟 灰原 赤 3	口径 7.4-7.8	胎土は良。焼成は堅緻。 灰茶褐色。内外面灰被りで自然釉付着。他の壺体が一部付着。 カキ目のあとに波状文を入れる。	1/1。3-100
3100	壺	3号窟 1次灰原	口径 10.6 胴径 12.0	胎土は良好。焼成は堅緻。 灰褐色を呈する。口縁内外は灰被り。	1/3残。3-97
3101	甕	3号窟 6次床	口径 17.0	胎土は細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色～黒色(自然釉)。内面灰被り。	1/4残。3-102

福元日焼原野群出土土器観察表①

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	番号(残存,実測番号etc.)
3102	鉢台	3号窯 2次床		胎土はやや粗い、焼成は良。 黒灰色を呈する。 透しあり。	1/10残、3-99
3103	坏蓋	3号窯 5号水溝	口径 15.0 器高 5.0	胎土はやや粗い、焼成はややあまい。 黄茶色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/4残、3-98
3104	坏身	3号窯 5号水溝	口径 12.85 器高 4.6 受部径 14.2	胎土は2mm以下の砂粒を含みやや粗い。 焼成は不十分、内面淡黄灰色、外面は黄茶褐色。 蓋をして焼成している。ヘラケズリは左回り。	1/2残、3-25
3105	"	3号窯 5号水溝	口径 10.7 器高 4.95 受部径 13.8	胎土は白色粒、砂粒をわずかに含む。1cm大の石を含む。(1ヶ) 内面は淡灰色、外面は淡い緑灰色-緑灰色。 焼成はややあまい。ヘラケズリは右回り。	1/2残、3-20
3106	"	3号窯 "	口径 11.8 受部径 14.0	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも白灰色を呈し、外面一部灰被り。 ヘラケズリは右回り。	1/4残、3-107
3107	高坏	3号窯 "	底径 8.4	胎土は良。焼成堅緻。 内面は黄茶褐色で釉かぶり、外面は灰白色。	1/4残、3-108
3108	埴	3号窯 "	口径 8.0 最大副径 13.2	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は堅緻。 内面は白灰色、外面は白灰色-茶灰色を呈する。	1/2残、3-112
3109	壺	3号窯 "	口径 15.0	胎土はやや粗い、焼成は良。 茶灰褐色を呈する。	1/2残、 (2片あり) 3-105、106
3110	壺	3号窯 "		胎土は細砂を多く、小砂は若干含む。 内面は茶灰色、外面暗灰色を呈する。灰被りで内面は自然釉。	3-104
4001	坏蓋	4号窯 2-5次床	口径 13.3 器高 4.65	胎土は白色粒、細砂をやや多く含む。短い石英を若干含む。焼成は堅緻。内面は暗灰色-茶灰色、外面は黒灰色-淡灰色。ヒビ割れあり。 ヘラケズリは左回り。	4-4
4002	"	4号窯 "	口径 14.8 器高 4.2	胎土に1mm大の石英粒をわずかに含む。砂粒をやや多く含む。 焼成は堅緻。内面は暗灰色、外面は淡灰色。外天井部は黄褐色泥土がリング状のまだら模様となっている。 ヘラケズリは左回り。	1/2残、4-11
4003	"	4号窯 "	口径 12.45 器高 4.0	胎土に白色粒、石英粒をわずかに含む。焼成は堅緻。 内面は青灰色-淡灰色、外面は青灰色-緑灰色。焼けた時にヒビ割れしている所あり。内外ともに黄茶色の泥土付着。 ヘラケズリは左回り。	4-7
4004	"	4号窯 "	口径 14.6 器高 4.3	胎土中細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色-暗灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	歪むが完形 4-35 4-38 4-45
4005	"	4号窯 "	口径 14.75 器高 4.0	胎土中1~3mm大の長石、石英、白色粒を若干含む。砂粒を多く含む。焼成は堅い。内面は暗灰色-茶灰色、外面は暗緑灰色で外天井部に黄茶色の泥土付着。 ヘラケズリは右回り。	4-1
4006	"	4号窯 "	口径 12.6 器高 4.2	胎土は良。焼成は堅緻。灰黒色を呈する。 外面灰被り、内面は茶紅色の土かぶる。 ヘラケズリは左回り。	2/5残、4-10
4007	"	4号窯 "	口径 13.6 器高 4.3	胎土中細砂を多く含む。焼成はややあまいが良。 内外面とも白灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/3残、4-36
4008	"	4号窯 "	口径 14.0 器高 3.9	胎土中粗い石英を若干含む。砂粒を若干含む。焼成は堅緻。 内面は灰黒色-茶灰色(一部黒色)、外面は灰黒色-黒色。 天井部外面灰被り。黄緑色の自然釉がかかる。 ヘラケズリは左回り。	4-9

福元日鏡原遺跡群出土土器観察表⑬

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存,実測番号etc.)
4009	坏蓋	4号窯 2-5次床	口径 13.45 器高 3.9	胎土中石英粒, 白色粒をわずかに含む。砂粒をやや多く含む。焼成は堅い。内面は淡灰色~茶灰色, 外面は茶灰色~黒灰色。外天井部に黄褐色の泥土付着, ヒビ割れ有り。外天井部に押圧痕ヘラケズリは左回り。	1/2残, 4-5
4010	"	4号窯 "	口径 14.0 器高 3.9	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。内面は明るい灰色, 外面は茶褐色~灰色~黒色。ヘラケズリは左回り。	1/2残, 4-37
4011	"	4号窯 2-3次床	口径 13.1 器高 4.2	胎土に2.5mm以下の砂粒含む。焼成はややあまい。内面は暗青灰色, 外面は暗青灰色~淡黒灰色。ヘラケズリは左回り。	4-2
4012	"	4号窯 "	口径 14.15 器高 4.7	胎土中石英, 細砂をやや多く含む。焼成はややあまくもろさがある。内面は緑茶灰色, 外面は緑灰色~青灰色。つくりとしてはスマート。ヘラケズリは左回り。	口径部1/6残, 4-3
4013	"	4号窯 "	口径 13.2 器高 3.7	胎土中細砂をやや多く含む。焼成は良好。内外面とも灰色を呈する。外面灰被りで内外面に黒い斑点があるヘラケズリは左回り。	1/2残, 4-34
4014	"	4号窯 "	口径 13.0 器高 4.3	胎土は細砂をやや多く含む。焼成は良好。内面はうすい灰色, 外面はうすい灰色~灰色。体部に粘土板貼り付けの痕がみえる。ヘラケズリは左回り。	1/3残, 4-41
4015	"	4号窯 "	口径 14.35 器高 4.5	胎土に2mm以下の砂粒含む。焼成は硬。内面は青灰色~黄灰色, 外面は暗青灰色~黄灰色。ヘラケズリは左回り。	4-8
4016	"	4号窯 焼成部 床面	口径 13.9 器高 4.4	胎土に細砂を含む。焼成は硬い。内面は淡緑灰色, 外面は淡緑灰色~暗緑灰色。外面上部に灰被りあり。スサ入り泥土が付着。	4-13
4017	"	4号窯 "	口径 15.0 器高 4.2	胎土に細砂をやや多く含む。やや粗い。焼成は良好。内外面とも灰色。ヘラケズリは左回り。	1/4残, 4-42
4018	"	4号窯 赤 5	口径 13.6 器高 4.95	胎土に2.5mm以下の砂粒含む。焼成は硬。内面は淡青灰色, 外面は淡青灰色~暗灰色。ヘラケズリは左回り。	3/4残, 4-12
4019	"	4号窯 "	口径 12.6 器高 5.0	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。内面は灰色, 外面は灰色~部分的黒色で一部灰被り。ヘラケズリは左回り。	1/4残, 4-39
4020	"	4号窯 "	口径 13.5 器高 5.05	胎土に細砂を含む。焼成はあまい。内面は白灰色, 外面は暗黄灰色で、自然釉がかかり、それが剥離しつつある。ヘラケズリは左回り。	4-14
4021	"	4号窯 "	口径 14.5 器高 5.3	微砂粒が多いが胎土良。焼成はややあまい。内面は茶褐色, 外面は黄灰褐色で灰被り。ヘラケズリは左回り。	1/2残, 4-10
4022	"	4号窯 黒 5	口径 16.0	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。内外面とも暗灰色を呈し、外面灰被り。	1/5残。 蓋の蓋かもしれない。 4-70
4023	"	4号窯 赤 3	口径 15.0 器高 4.4	胎土に1-2mm以下の砂粒含む。赤褐色粒子を含む。焼成はあまい。内面は赤青灰色, 外面は暗灰色。外天井部は手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリ(左回り)。	1/2残, 4-6
4024	"	4号窯 黒2-3	口径 12.0 器高 4.8	胎土は細砂を多く含む。焼成は良好。内面はうすい茶色, 外面は灰色~暗灰色。内面灰被りで黄白色になる。軟乳状になる。ヘラケズリは右回り。	1/2残, 4-44
4025	"	4号窯 灰原 黄褐色土	口径 13.8 器高 4.5	胎土は良。焼成は堅硬。外面は灰黒色, 内面は黄灰褐色。ヘラケズリは左回り。外天井部にヘラ記号あり。	1/3残, 4-43

稲元日焼原窯跡群出土土器観察表⑨

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調その他	備考(残存、実測番号etc.)
4026	杯身	4号窯 2-5次床	口径 13.0 器高 5.4 受部径 14.5	胎土は細砂をやや多く含む。やや粗い。焼成は良好。 内外面とも灰色。 ヘラケズリは左回り。	定形。 4028、4039と胎土・器 形同じ。4029も似る。 4-48
4027	"	4号窯 "	口径 13.4 器高 4.8 受部径 16.0	胎土に1mm以下の砂粒含む。焼成は硬。 内面は暗灰色、外面は灰色～淡黒灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/2残。 4-17
4028	"	4号窯 "	口径 13.7 器高 4.9 受部径 16.2	胎土はやや粗い。焼成は良。 灰色を呈する(内面はやや紫がかかる) ヘラケズリは左回り。	1/5残。 4-63
4029	"	4号窯 "	口径 12.6 器高 4.8 受部径 14.9	胎土はやや粗い。焼成は良。 灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/4残。 4-52
4030	"	4号窯 "	口径 12.1 器高 4.7 受部径 14.2	胎土に1.5mm以下の砂粒を多めに含む。総砂多量。 焼成は硬。内外面とも暗灰色～灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	2/3残。 4-18
4031	"	4号窯 "	口径 12.0 器高 4.4 受部径 14.6	胎土に1～2mm大の石英を若干含む。白色粒、砂粒をやや多く含む。 焼成は堅くきわめて良い。 内面は淡緑灰色、外面は暗灰色～暗緑灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	4-19
4032	"	4号窯 "	口径 11.4 器高 4.1 受部径 13.7	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。受部端に押圧痕あり。	1/2残。 4-49
4033	"	4号窯 2-3次床	口径 12.0 器高 4.7 受部径 14.3	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は灰色。外面は暗灰色で灰被り。 ヘラケズリは左回り。	1/2残。 4-56
4034	"	4号窯 "	口径 11.55 器高 4.8 受部径 13.5	胎土に1～3mm大の砂粒、黒色の砂粒を含む。焼成は良好。 内面は淡青灰色、外面は暗灰色。 ヘラケズリは左回り。受部端に押圧痕あり(4ヶ所)。	口径1/8欠。 4-24
4035	"	4号窯 "	口径 11.2 器高 3.7 受部径 13.0	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は灰色。外面は灰色～暗灰色。 ヘラケズリは左回り。	定形。 4-58
4036	"	4号窯 1次焚口床	口径 14.2 器高 4.1 受部径 16.5	胎土に1mm以下の砂粒を含みやや粗い。焼成は良。 内面は灰色。外面は暗灰色。 ヘラケズリは左回り。	4-15
4037	"	4号窯 "	口径 12.95 器高 4.55 受部径 15.1	胎土に1～3mmの砂粒を多く含むやや粗め。焼成はややあまい。 内面は暗灰色。外面は暗灰色～白灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/2残。 4-16
4038	"	4号窯 "	口径 12.7 器高 4.9 受部径 14.9	胎土は細砂を多く含む粗い。焼成はややあまい。 内外面とも白灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/2残。 4-61
4039	"	4号窯 "	口径 12.8 器高 4.8 受部径 15.0	胎土はやや粗い。焼成は良。 灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。底面部断面に粘土肌わかれ痕あり。	2/5残。 4-53
4040	"	4号窯 "	口径 13.2 器高 4.6 受部径 14.8	胎土に1.5mm以下の砂粒多く含む。焼成は良好。 内面は青灰色、外面は淡青灰色。 ヘラケズリは左回り。	4-20
4041	"	4号窯 焼成部 床面	口径 12.8 器高 4.2 受部径 15.0	胎土は細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも白灰色を呈する。 ヘラケズリは右回り。受部端に押圧痕あり。	1/3残。 4-51
4042	"	4号窯 "	口径 13.0 器高 5.5 受部径 15.0	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は灰色。外面は灰色～暗灰色。 ヘラケズリは左回り。外底部にヘラ記号あり。	1/2割残。 4-50

稲元日焼原産群出土土器観察表②

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存, 実測番号etc.)
4043	杯身	4号窯 赤 5	口径 10.55 器高 3.5 受部径 13.4	胎土は良、焼成は良好。 内面は淡茶灰色、外面は暗緑茶色。 口縁に補修痕あり。	口縁の2/3欠、体部は全てあり。 4-25
4044	"	4号窯 "	口径 13.0 器高 4.8 受部径 15.3	胎土に4mm大の石英を含む。焼成は良好。 内面は茶灰色、外面は淡青灰色。 ヘラケズリは右回り。焼きひずみあり。	完形。 4-23
4045	"	4号窯 "	口径 11.45 器高 4.95 受部径 14.0	胎土に1~3mmの砂粒を含む。焼成は良好。 内面は淡青灰色、外面は黒灰色で灰被り。 ヘラケズリは右回り。	3/5残。 4-28
4046	"	4号窯 "	口径 12.1 器高 5.3 受部径 14.2	胎土は砂粒を含む。焼成は良好。 内面は淡茶灰色、外面は黒灰色。 ヘラケズリは右回り。つくりは雑である。	2/3残。 4-27
4047	"	4号窯 "	口径 11.8 器高 5.2 受部径 14.3	胎土に石英を少し含む。焼成は良好。 内外面とも淡青灰色を呈する。 ヘラケズリは右回り。	1/2残。 4-22
4048	"	4号窯 "	口径 12.4 器高 5.2 受部径 15.0	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色を呈し、気泡が付着している。 ヘラケズリは右回り。	1/2残。 4-59
4049	"	4号窯 "	口径 12.3 器高 4.0 受部径 15.0	胎土は細砂を多く含む。赤褐色粒子を含む。 焼成は良好。内面は白灰色、外面は白灰色~暗灰色で灰被り。 ヘラケズリは左回り。	1/2残。 4-60
4050	"	4号窯 "	口径 11.2 器高 5.0 受部径 14.0	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は灰色、外面は灰色~暗灰色。 ヘラケズリは左回り。外底部にヘラ記号あり。体部に粘土板貼付け痕あり。	口縁部1/8、全体で1/2残。4-47とつくりが似る同一工人か? 4-54
4051	"	4号窯 "	口径 11.2 器高 4.5 受部径 13.6	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面はうすい灰色、外面は灰色~暗灰色で一部灰被り。 ヘラケズリは左回り。外底部にヘラ記号。	1/3残。 4-54とつくりが似る 4-47
4052	"	4号窯 黒 2	口径 13.0 器高 4.7 受部径 15.1	胎土は細砂を若干含む。きわめて精良。焼成は良好。 内外面とも緑灰色を呈する。 ヘラケズリは右回り。外底部に擦過痕あり。	1/3残。 4-55
4053	"	4号窯 灰原土 黒色土	口径 10.0 器高 4.18 受部径 13.2	胎土に1mm以下の砂粒を多く含む。焼成は硬。 内面は暗黄緑灰色~黒緑灰色でガラス質に固まった粘ダレもある 外面は暗黄緑灰色。 ヘラケズリは右回り。	口縁を1/2欠、全体で5/6残。 4-21
4054	"	4号窯 灰原土 褐色土	口径 13.6 受部径 16.0	胎土はやや粗い。焼成は良。 淡灰紫色を呈する。 器壁に肌分かれの線をみる。	1/5残。 4-62
4055	"	4号窯 灰原土 黄褐色土		胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は茶灰色、外面は暗灰色を呈する。 外底部にヘラ記号。ヘラケズリは左回り。	4-46
4056	蓋	4号窯 2~5次床	口径 9.2 器高 3.3	胎土は細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は灰色~明るい茶、外面は灰色~暗灰色で灰被り自然粘着干 ヘラケズリは左回り	4/5残。 4-73
4057	高坏	4号窯 "	口径 13.3 坏部深さ 3.7	胎土は良、焼成は堅緻。 外面は灰被りで黒色~灰黒色、内面は灰色~灰黒色。 ヘラケズリは左回り。脚部透孔は3方。	3/4残。 (4-66 4-65)
4058	"	4号窯 "	口径 11.5 坏部深さ 3.0	胎土は良・砂粒多し。焼成はふつう。 灰褐色、胎土は茶褐色。 ヘラケズリは左回り。	1/3残。 4-67
4059	"	4号窯 1次床 焚口床	口径 9.6 坏部深さ 2.7	胎土は良、焼成は堅緻。 黒灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/4残。 4-68

稲元日焼原窯跡群出土土器観察表②

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存,実測番号etc.)
4060	高杯	4号窯 灰原	口径 12.0 杯部深さ 3.7	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも黄灰色-暗灰色。 ヘラケズリは左回り、透孔は3方。	2/3残。 4-64
4061	"	4号窯 灰原 黄褐色土	口径 12.0	胎土は良。焼成は堅緻。 外面は黒灰色、内面は黄褐色で、内外面とも灰被り。 ヘラケズリは左回り。	1/5残。 4-69
4062	"	4号窯 赤 5	口径 10.0 杯部深さ 3.9	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は白灰色、外面は灰色-暗灰色。 ヘラケズリは左回り、波状文は7-8条。	1/2残。 4-71
4063	"	4号窯 1次 笑口床	口径 11.0	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は灰色、外面は灰色-黒色。 透孔は菱形を呈す。	1/4残。 4-79
4064	"	4号窯 赤 6	口径 10.0	胎土に細砂を若干含む。焼成は良好。 内面は灰色、外面は灰色-暗灰色で灰被り。 透孔は3方。	1/4残。 4-74
4065	脚台	4号窯 2-5次床		胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色-暗灰色で灰被り。	4-78
4066	皿	4号窯 灰原 黒色土		胎土はやや粗い。焼成は良。 灰褐色。波状文は五段に施される。	1/4残。 4-76
4067	埴	4号窯 黒2-3	口径 9.0 器高 6.3 胴径 11.8	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外ともにくすんだ灰紫色。 底部は手持ちヘラケズリ。	1/3残。 4-72
4068	埴	4号窯 灰原	口径 10.2	胎土は良。焼成は堅緻。 灰色を呈する。 頸部に粘土積上げの横目がある。	4-75
4069	提瓶	4号窯 赤 2	最大径 2.1	胎土は良。焼成は堅緻。 灰黒色を呈する。 耳のみ。	4-80
4070	甕	4号窯 赤 5	口径 19.0	胎土は良。焼成は堅緻。 内面は灰黄色、外面は灰黒色、内外ともに灰被り。 波状文は5条。	1/8残。 4-33
4071	"	4号窯 赤 5	口径 16.0	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内面は白灰色、外面は灰色-暗灰色。	1/8残。 4-77
4072	"	4号窯 灰原 黄褐色土	口径 19.0	胎土に細砂を多く粗砂若干含む。焼成は良好。 内外面とも黄灰色を呈し、うすく灰を被る。 頸部外面はタダキか？	1/4残。 4-31
4073	"	4号窯 赤 5	口径 20.0	胎土はふつう。焼成は良。 内面はくすんだ灰色、外面は灰黒色。	9/10残。 4-29
4074	"	4号窯 赤 4	口径 19.8	胎土は細砂・微砂を多く含む。焼成はややあまい。 内外面とも明るい橙色-灰色。	4-87
4075	"	4号窯 2-5次床	口径 16.7	胎土はやや粗い。焼成は良。 黄灰褐色を呈する。歪みがある。 成形は土師器風の積上げで、内面は腰週に近いケズリを施す。	土師的成形 4-30
4076	"	4号窯 1次埋土	口径 27.0	胎土は細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも灰色-暗灰色-黒色を呈し灰被り。	1/6残。 4-32

稲元日焼原窯跡群出土土器観察表②

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調その他	備考(残存, 実測番号etc.)
4077	提杖	4号窯 西成部 埋 七	口 径 9.4 胴 径 16-23	胎土はやや粗いが良。焼成はややあまい。 灰白色を呈する。	1/3残、 4-86
4078	器台	4号窯 2-3次床		胎土は良。焼成堅緻。 淡灰色を呈する。 波状文の原形は本片ではないのかもしれない。	1/5残、 4-85
4079	"	4号窯 赤 5		胎土は砂粒やや多し。焼成は良好。 黄灰褐色を呈し内外ともに灰被り。 透しは4方か。	1/4残、 4-82
4080	"	4号窯 黒 2		胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内面灰色。外面は茶灰色で灰被り。釉が付着。 透孔は4個ずつか。	1/4残、 4-81
4081	"	4号窯 灰 原 黄褐土		胎土は良。焼成良。 内面は灰色。外面は灰被りで黄灰色。	4-84
4082	坏身	4号窯 左側水溝	口 径 11.9 器 高 4.3 受部径 14.3	胎土に細砂粒を含む。焼成良。 内面は白灰色。外面は淡黄灰色。 ヘラケズリは左回り。蓋をして焼成している。	7/8残、 4-26
4083	"	4号窯 "	口 径 11.4 器 高 4.1 受部径 14.0	砂粒をきわめて多く含む。焼成良。内外ともに暗灰色を呈する。 ヘラケズリは右回り。 歪みの著しい部分あり。	完形、 4-88
4084	器台	4号窯 "		胎土はやや粗い。焼成良好。灰黄色を呈する。 内外ともに灰被り。	1/4残、 4-83
4085	甕	4号窯 灰 原 黄褐土	口 径 23.8 胴 径 24.3	砂粒多し。焼成ふつう。橙黄色を呈する。 外面胴部に黒斑2つ。また胴下半に煤付着。	4/5残、 4-89 土師器
T101	坏蓋	1号窯穴 埋 土	口 径 10.0	胎土に細砂を若干含む。焼成は良好。 内外とも灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/8残、 T102
T102	"	1号窯穴 上 面	口 径 14.0	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内面は黄灰色。外面は黒色を呈する。 ヘラケズリは右回り。歪んでいる。	1/2残、 T103
T103	"	1号窯穴 埋 土	口 径 15.0	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面ともうすい灰色。 ヘラケズリは右回り。	1/6残、 T104
T104	坏身	1号窯穴 埋 土	口 径 12.0 器 高 4.5 受部径 14.4	胎土は良。焼成は堅緻。 内面は灰白色。外面は黒灰色。 ヘラケズリは左回り。蓋が懸着している。	3/5残、 T106
T105	高坏	1号窯穴 埋 土	裾 径 9.6	胎土は良。焼成は堅緻。 内面は黄白色。外面は緑釉で緑灰色。 透しは3方。	1/4残、 T105
T106	甕	1号窯穴 埋 土	口 径 23.2 器 高 52.6 最大胴径 49.1	胎土に砂粒を少し含む。焼成はふつう。 灰色～暗灰色。 外面上半は灰被り。	ほぼ完形、 T1-1
T201	坏蓋	2号窯穴	口 径 14.0 器 高 4.0	胎土は良。焼成はややあまい。 灰色を呈する。 ヘラケズリは右回り。	2/5残、 T203
T202	坏身	2号窯穴	口 径 12.8 器 高 4.2 受部径 15.3	胎土に砂粒多し。焼成は堅緻。 紫灰褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/10残、 歪みが著しい T204

稲元日焼原産群出土土器観察表②

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存・実測番号etc.)
T301	蓋	3号壺穴 黒色土	口径 10.6	胎土は細砂多く、小砂若干含む。焼成は良好。 内面は灰色、外面は灰色～黒。	1/4残、 T301
T302	坏蓋	3号壺穴 黒1層	口径 12.8 器高 4.8	胎土は良。焼成は堅緻。 淡灰色を呈する。 ヘラケズリは右回り。	4/5残、 T305
T303	"	3号壺穴 黒色土	口径 14.0 器高 5.7	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも茶灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。外天井部にヘラ記号。	1/4残、 T302
T304	"	3号壺穴 2層	口径 15.0	胎土に細砂を多く含む。焼成は良好。 内外面とも暗灰色～黒で灰被り。	1/4弱残、 T305
T305	坏身	3号壺穴 赤2 (7層)	口径 11.9 器高 5.6 受部径 14.2	胎土に砂粒多し。焼成は堅緻。 灰黄褐色を呈する。 ヘラケズリは右回り。	6/7残、 T306
T306	"	3号壺穴 黄1	口径 12.2 受部径 14.0	胎土は細砂を若干含む。焼成は良好。 内外面とも灰色。	1/4残、 T306
T307	"	3号壺穴 黒1層	口径 12.8 受部径 15.3	胎土は良。焼成は堅緻。 茶褐色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/5残、 T303
T308	"	3号壺穴 赤1	受部径 16.0	胎土に細砂を多く含む。焼成はややあまい。 内外面とも茶灰色。 ヘラケズリは右回り。外底部にヘラ記号。	1/6残、 T304
T309	高坏	3号壺穴 赤2 (7層)	脚高 8.2 器高 9.5	胎土は良。焼成は堅緻。 黄灰緑色で内外とも灰被り。 透しは3方。	3/5残、 T307
T310	鉢	3号壺穴 黒色土	口径 9.2	胎土は良。焼成は堅緻。 灰褐色で外面は黒色を呈す。	1/5残、 指鉢か、 T308
T311	器台	3号壺穴 2層	口径 32.0	胎土は良。焼成は良。 灰色を呈する。	1/6残、 T309
T401	坏蓋	4号壺穴 1層	口径 15.8	胎土は良。焼成は堅緻。 灰黒色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/6残、 T409
T402	坏身	4号壺穴 最下層	口径 12.9 受部径 15.0	胎土に砂粒をほとんど含まず。焼成は良。 赤茶色を呈する。	1/5残、 T408
T403	器台	4号壺穴 1-2層		胎土精良。焼成は良好。 灰青色を呈する。	T4-4
T404	"	4号壺穴 "		胎土は良。焼成は良。 灰白。内面は灰黄色を呈し、内外ともに灰被り。 浮文あり。	1/5残、 T4-1
T405	"	4号壺穴 "		胎土は良。焼成は堅緻。 黄灰褐色。外面灰被り。流状文は粗い。	1/8残、 T4-2
T406	"	4号壺穴 "		胎土は良。焼成は堅緻。 灰黄色を呈し、内外ともに灰被り。	1/8残、 T4-3

福元は焼原聚跡群出土土器観察表②

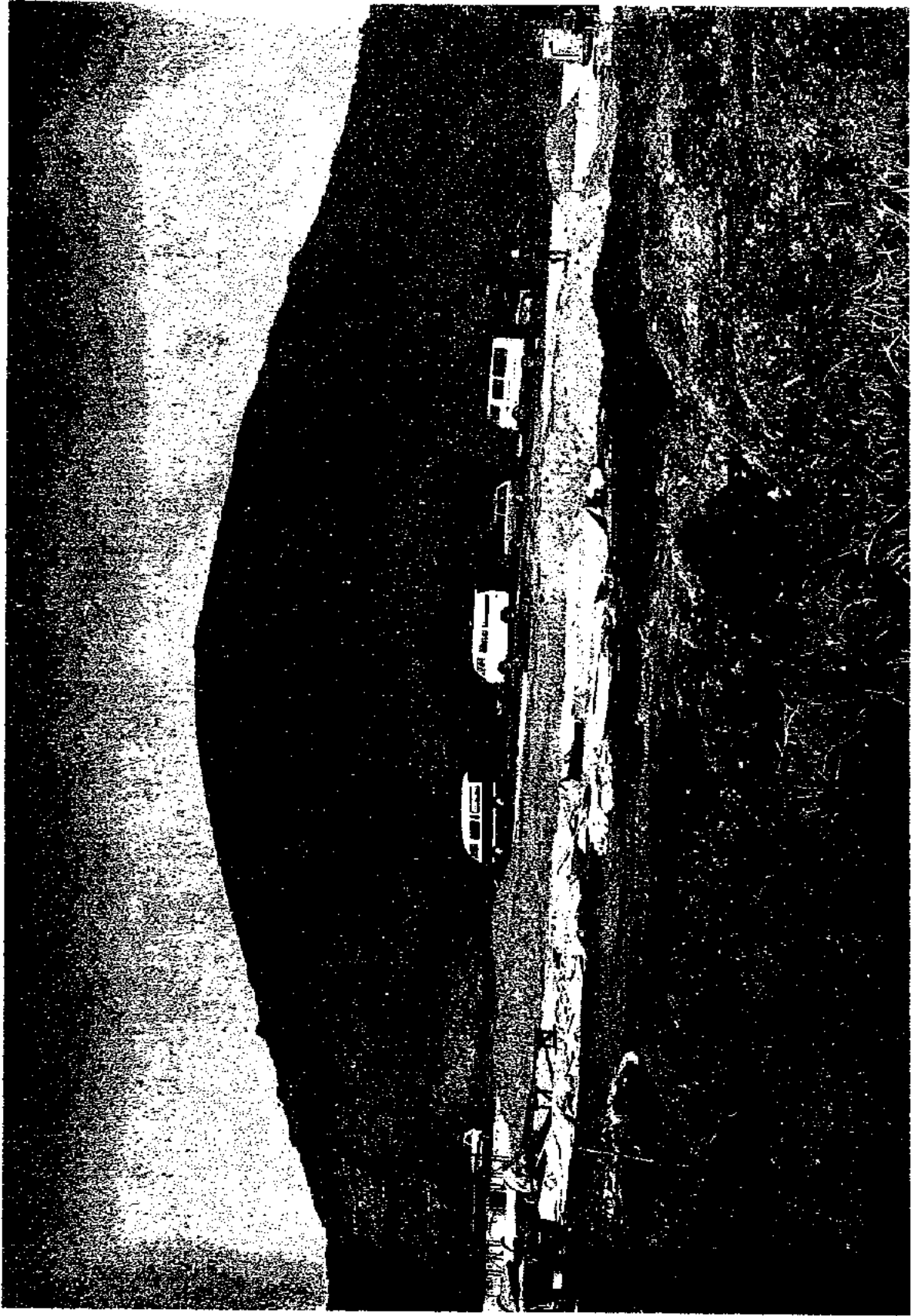
遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	胎土・焼成・色調 その他	備考(残存、実測番号etc.)
T407	蓋	4号壺穴 1-2層	口径 17.6	胎土に砂粒多し。焼成は中途。 黄灰色を呈する。 生焼けである。	1/6残。 T410
T408	壺	4号壺穴 埋土	口径 15.0	胎土は良。焼成は中途。 赤茶色を呈する。 生焼けである。内面にネズミ歯痕あり。	1/8残。 T411
T409	"	4号壺穴 1-2層	高台径 11.0	胎土に砂粒多し。焼成は中途。 赤茶色を呈する。 生焼けのようだ。	1/2残。 T412
T410	"	4号壺穴	高台径 5.6	胎土は良。焼成中途。 灰褐色を呈する。 生焼け。	1/4残。 T418
T411	壺	4号壺穴 1-2層	口径 9.2	胎土は良。焼成はあまい。 黄褐色を呈する。 二次火熱の有無はわからない。	1/5残。 土師器。焼成土器? T415
T412	甕	4号壺穴 1-2層	胴径 14.0	胎土に細砂をやや多く含む。焼成は良好。 内外面とも赤味茶色。	1/8残。土師器 T414
T413	"	4号壺穴 "	口径 22.1	胎土に砂粒多し。焼成はあまい。 赤褐色を呈する。	1/8残。土師器 T419
T414	"	4号壺穴	口径 13.0	胎土は砂粒多く粗い。焼成はふつう。 赤茶色。	1/5残。土師器 T413
T501	坏蓋	5号壺穴	口径 17.0	胎土は良。焼成は堅緻。 外面は黒灰色。内面は灰褐色で外面灰被り。	1/8残。 T506
T502	"	5号壺穴	口径 14.4 器高 4.2	胎土に砂粒を少し含む。焼成はふつう。 内面は黄灰色。外面は黄灰色-黒灰色で灰被り。 ヘラケズリは左回り。	1/2筋残。 T501
T503	"	5号壺穴	口径 14.0	胎土は良。焼成は堅緻。 黄灰褐色で。内外ともに灰被り。	1/7残。 T507
T504	"	5号壺穴	口径 14.5	胎土は良。焼成は堅緻。 外面は灰黒色。内面は灰白色。 外天井部は手持ちヘラケズリ。	1/5残。 T502
T505	坏	5号壺穴	口径 14.5 身 12.4 受部径 15.1	胎土は良。焼成は堅緻。 黄灰色を呈し。外面灰被り。	1/4残。 T508
T506	坏身	5号壺穴	口径 11.6 受部径 14.0	胎土に砂粒をやや含む。焼成は良。 黄灰色を呈する。 ヘラケズリは左回り。	1/8残。 T504
T507	"	5号壺穴	口径 12.7 受部径 15.0	胎土に砂粒を少し含む。焼成はふつう。 灰色を呈する。	1/5残。 T506
T508	"	5号壺穴	口径 14.2 受部径 16.7	胎土に細砂粒を少し含む。焼成は良。 内面灰色。外面は灰色-黒灰色。 ヘラケズリは左回り。	1/5残。 T503
T509	高坏	5号壺穴	口径 8.8	胎土は良。焼成は堅緻。 外面は黄灰色。内面は灰色で灰被り。 透しは3方だろう。	1/4残。 T509

圖 版



前元日林原露跡群組等方其

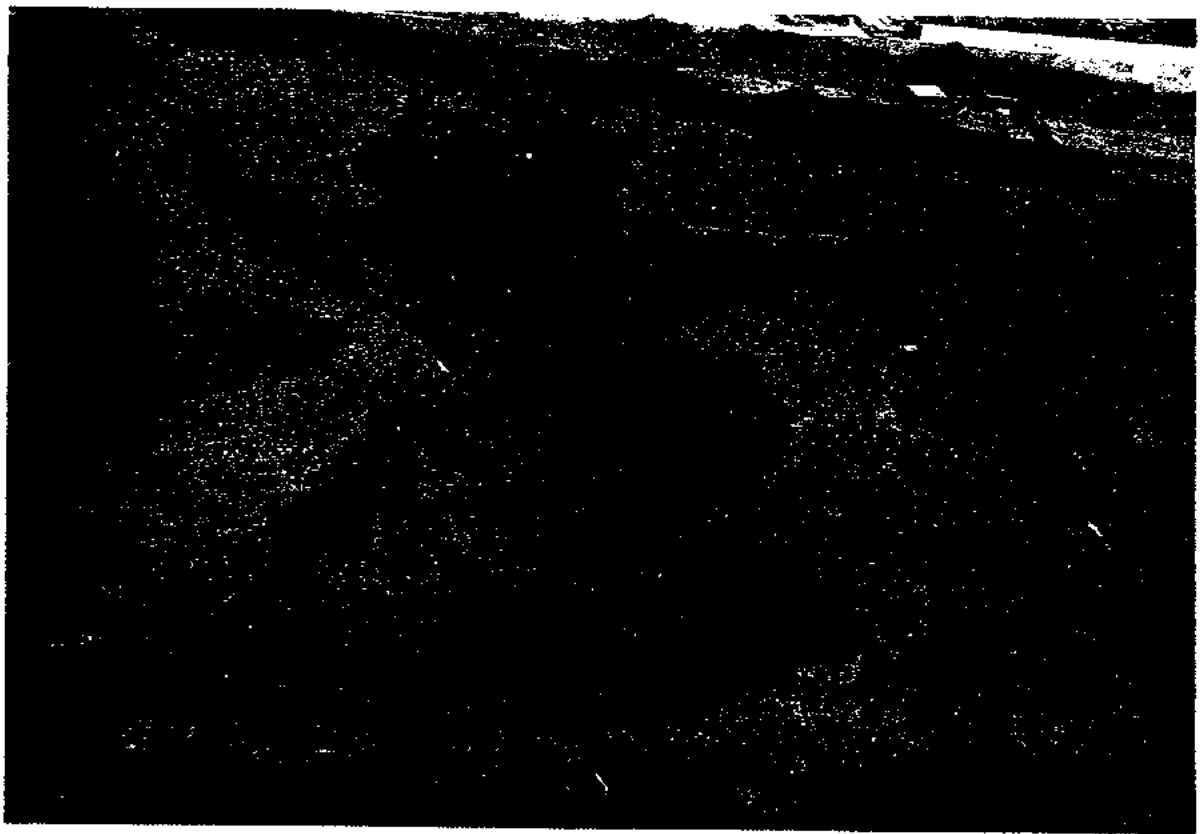
图版 2



権元日燧原岩層群全景（東から）



日焼原1号窯跡（南から）



日焼原1号窯跡（北から）

図版 4



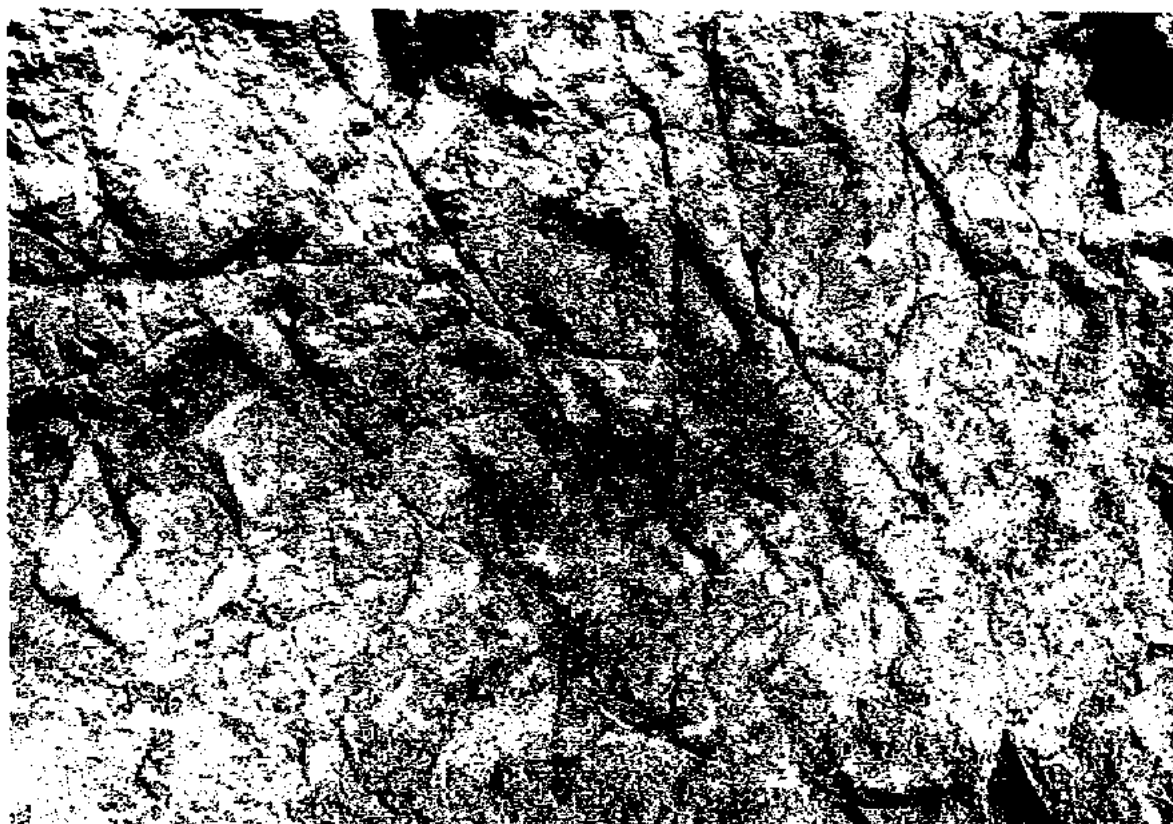
日鏡原1号室跡室坑土層土器出土状態（北から）



日鏡原1号室跡室坑土層土器出土状態（南から）



日鏡原1号窯跡窯尻土層土器出土状態（西から）



日鏡原1号窯跡焼成室壁面工具痕



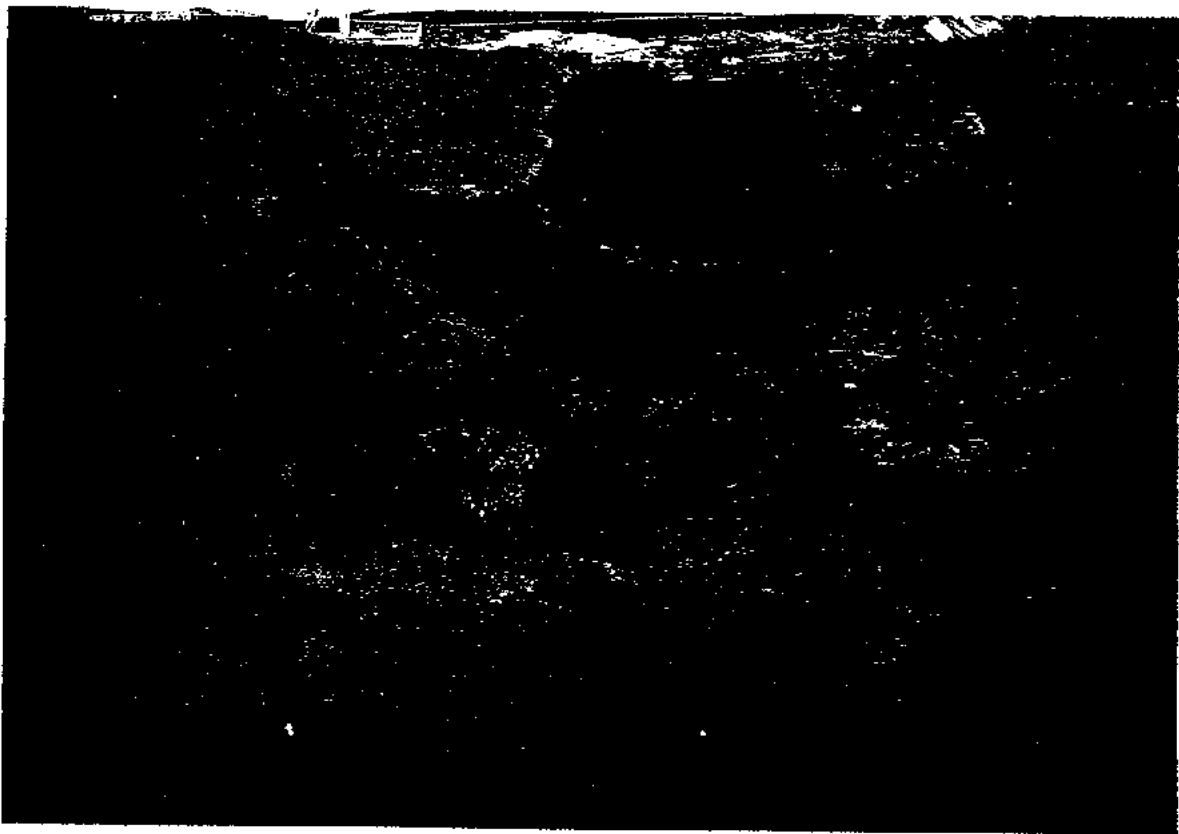
日焼原1号窯跡前庭部「東から」



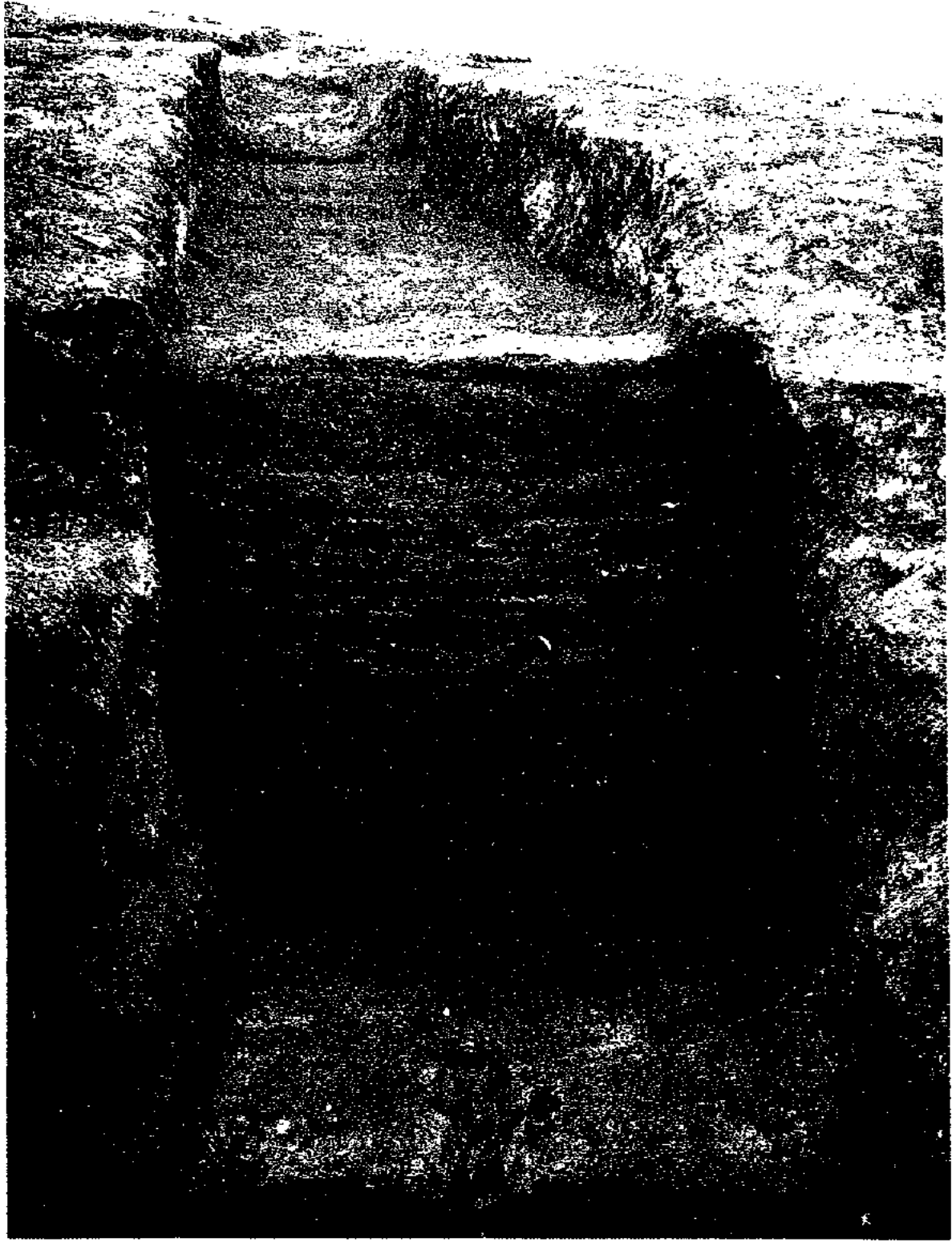
日焼原1号窯跡前庭部上層K-1



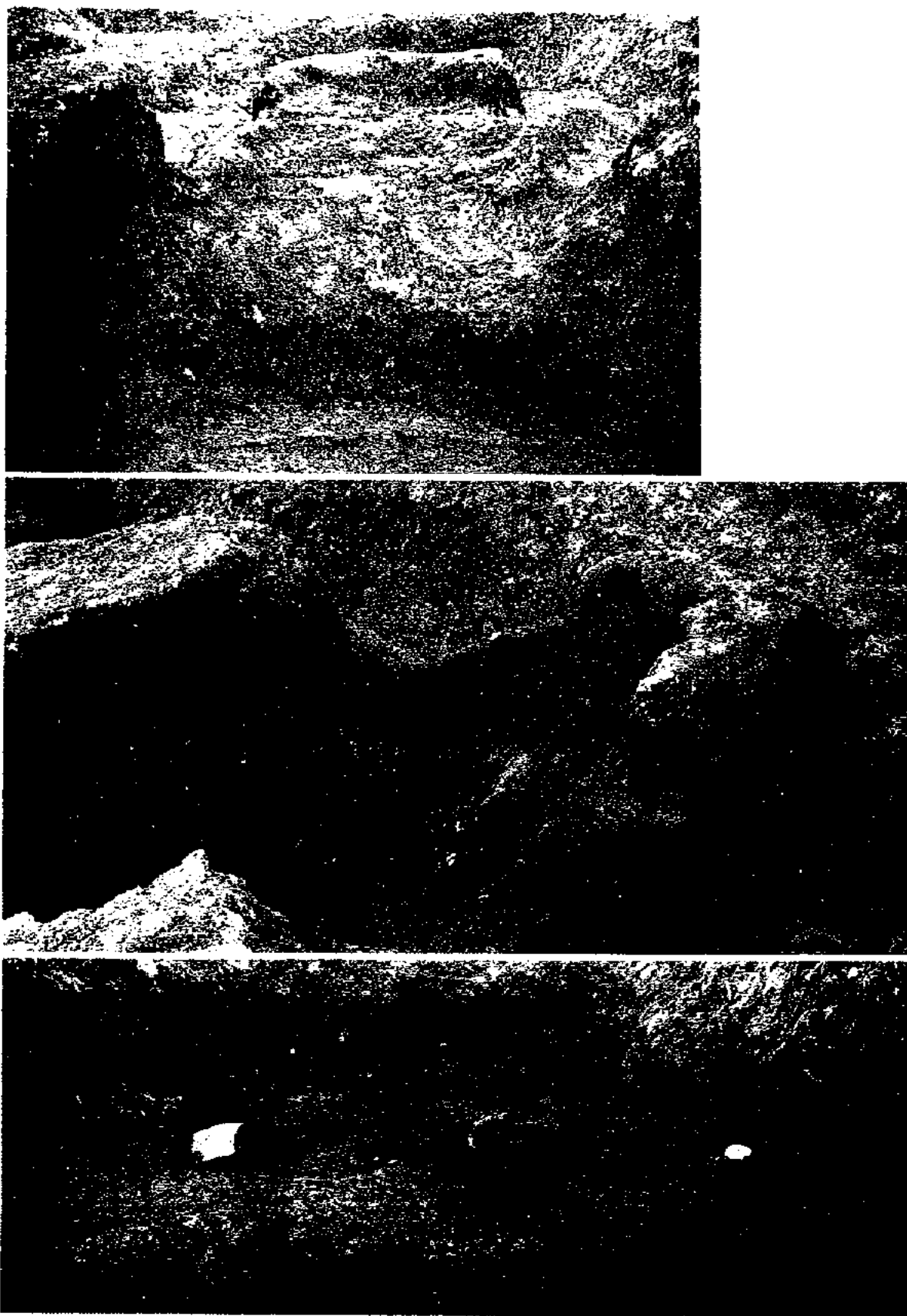
日鏡原 2 号窯跡（東南から）



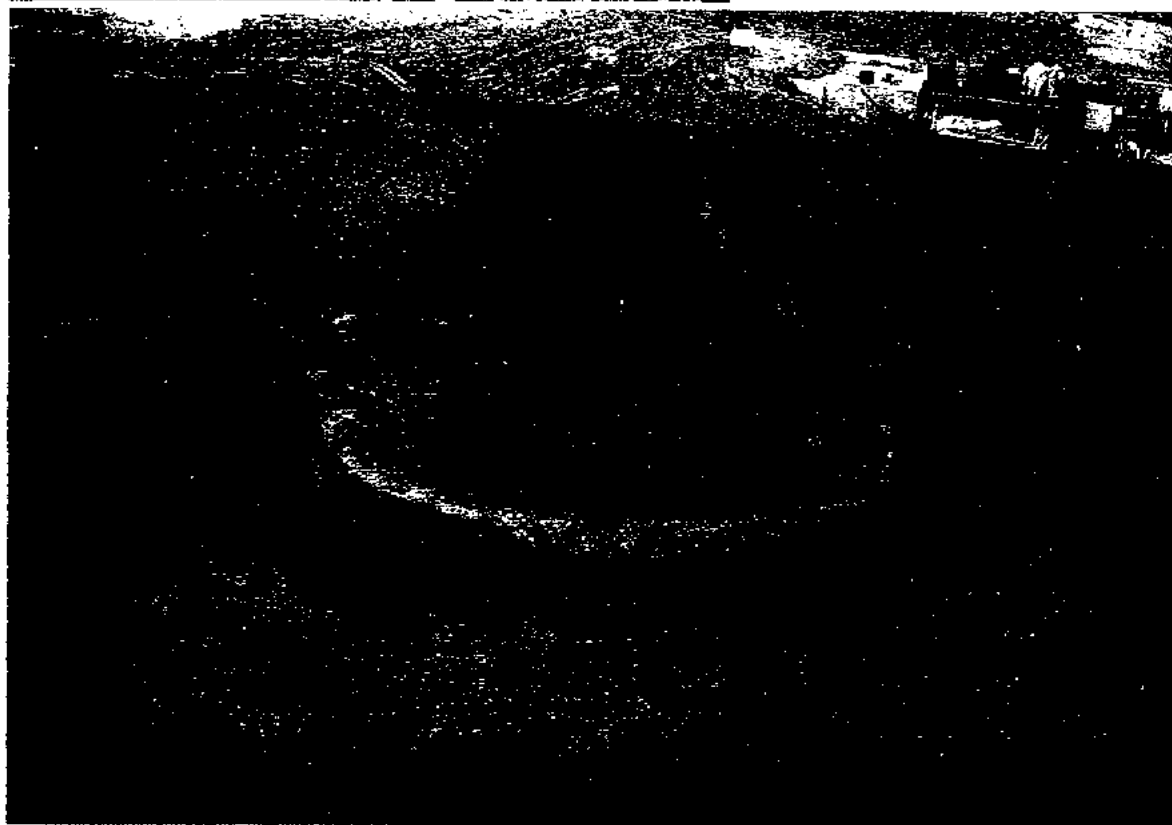
日鏡原 2 号窯跡（北西から）



日烧原 2 号室跡断面



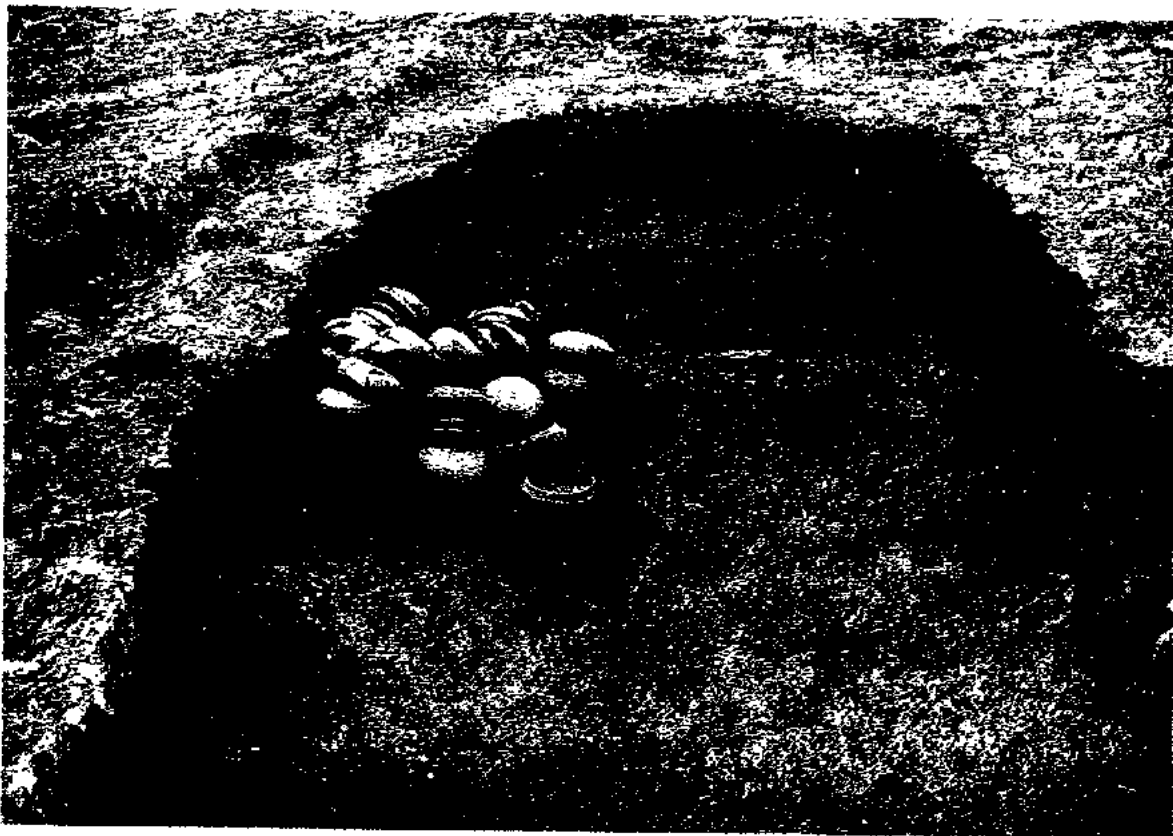
日鏡原 2 号窯跡煉出し・窯灰部分



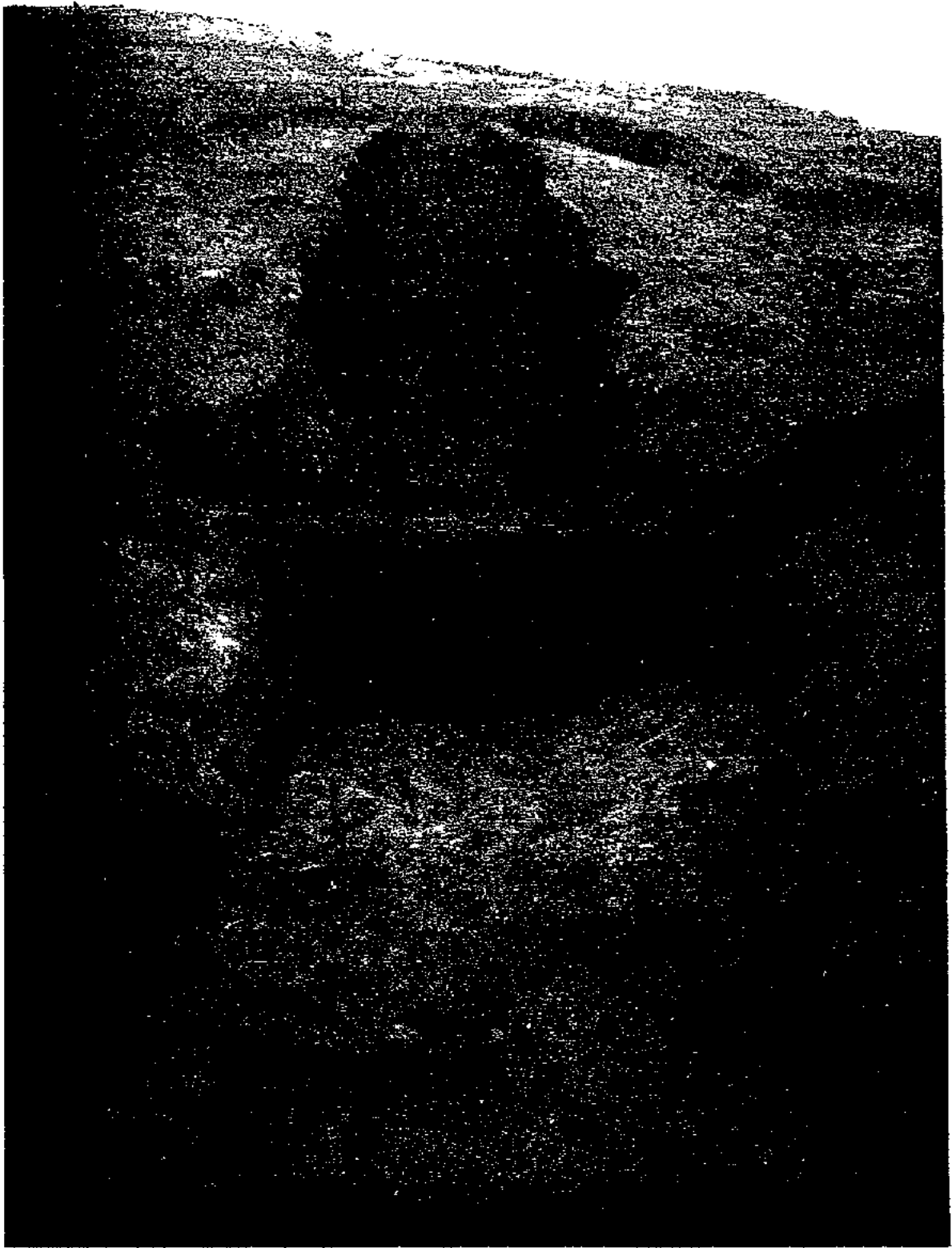
日焼原3号窯跡（上）東南から（下）北西から



日烧原3号窑前庭部断面



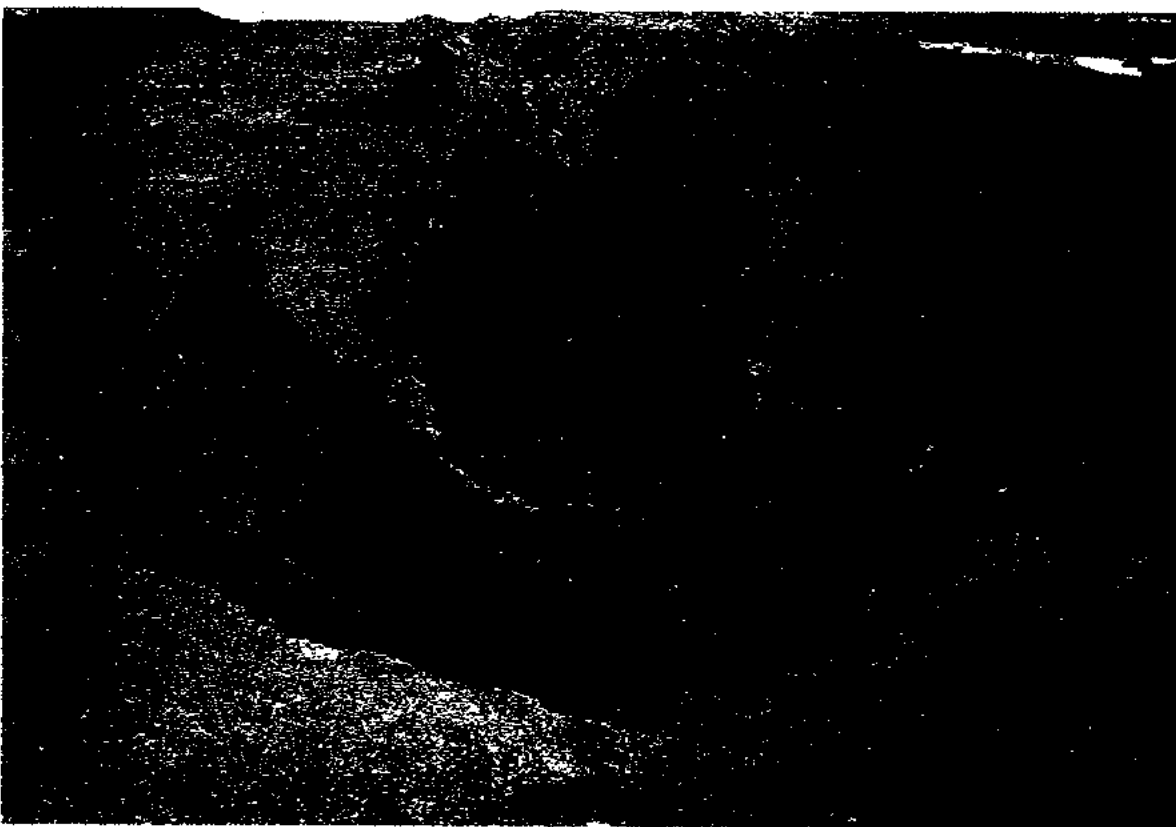
日烧原3号窑1次床面土器出土状态



日焼原4号窯跡(東から)



日鏡原4号墓跡（東から）



日鏡原4号墓跡（西から）



1001



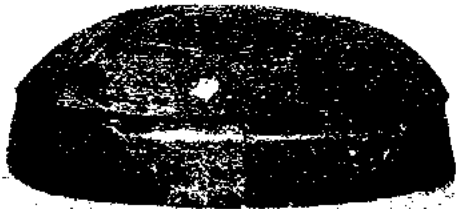
1016



1002



1017



1012



1018



1013



1020



1014



1021

日烧原1号窑跡出土土器1



1027



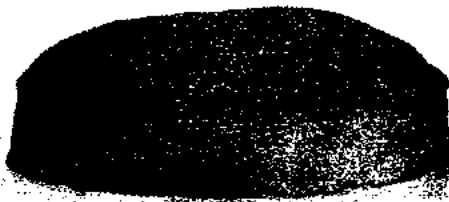
1047



1031



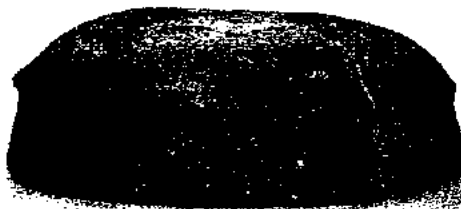
1051



1034



1052



1035



1070



1037



1071



1073



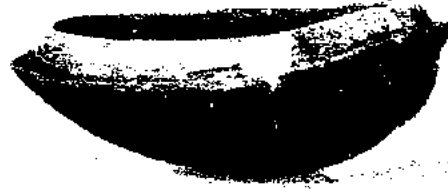
1076



1083



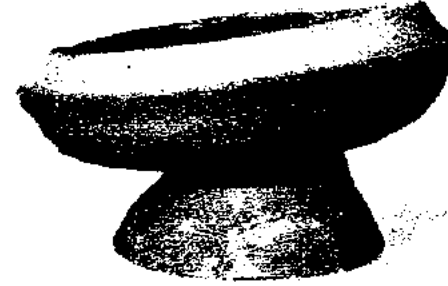
1077



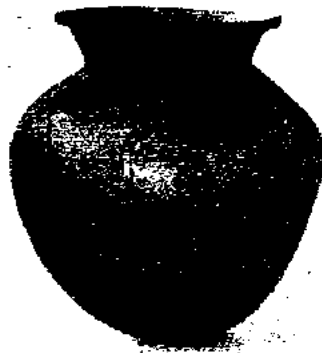
1084



1085



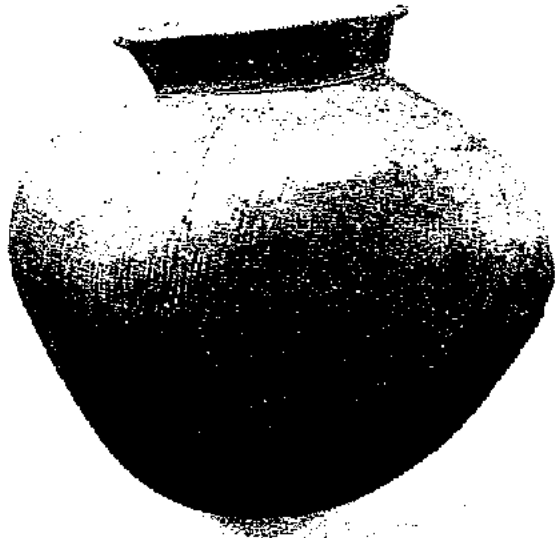
1086



1087



1088



1089



1090



1091



1092

日境原1号窯跡出土土器4



2001



2006



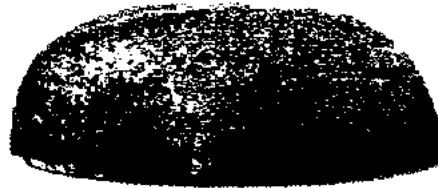
2002



2007



2003



2008



2004



2009



2005



2010



2011



2016



2012



2017



2013



2022



2014



2023



2015



2024

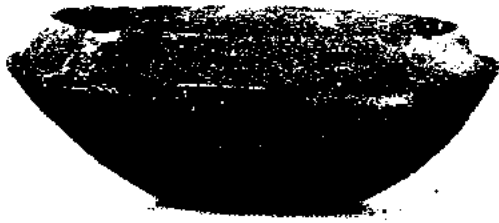
日烧原2号窑跡出土土器2



2025



2030



2026



2031



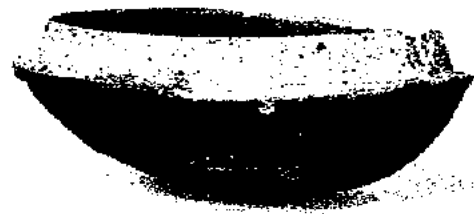
2027



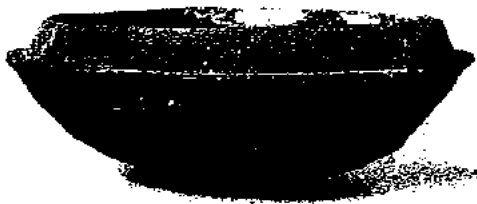
2032



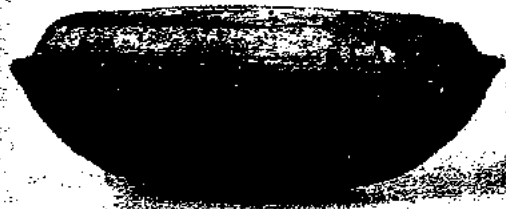
2028



2033



2029



2034



2035



2043



2037



2044



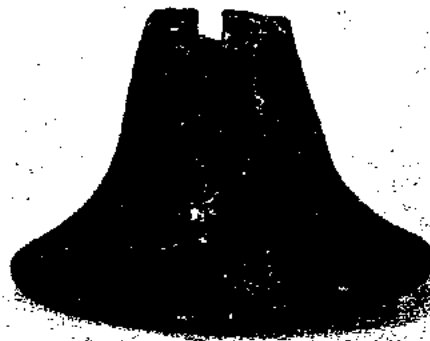
2039



2049



2040



2054



2041



2057



2042



2058



2068



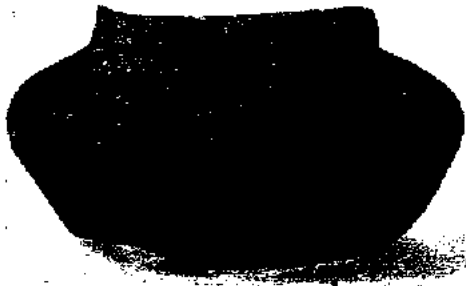
2060



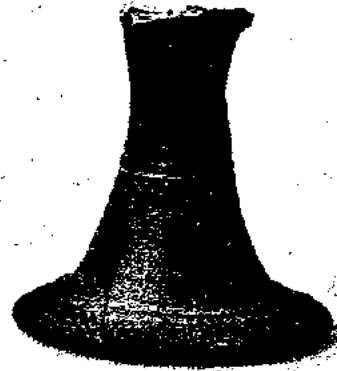
2070



2072



2061



2076



2062



2077



3001



3006



3002



3007



3003



3008



3004



3009



3005



3010



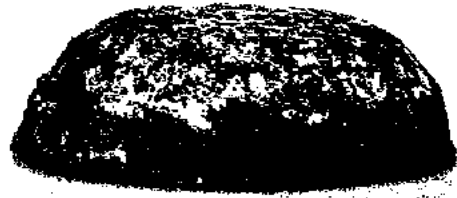
3011



3019



3012



3023



3013



3024



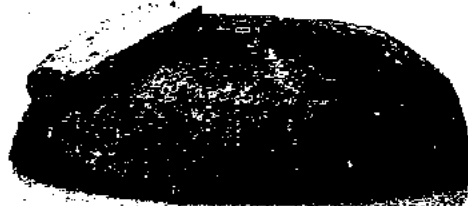
3015



3025



3018



3026



3027



3034



3028



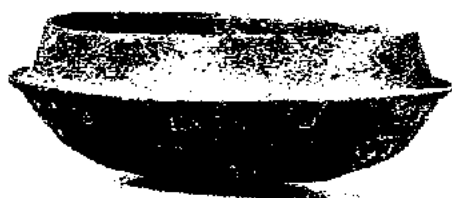
3035



3031



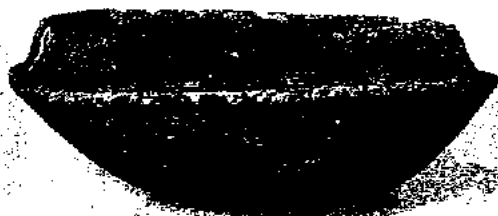
3037



3032



3038

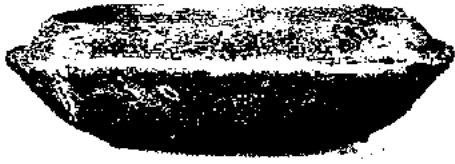


3033

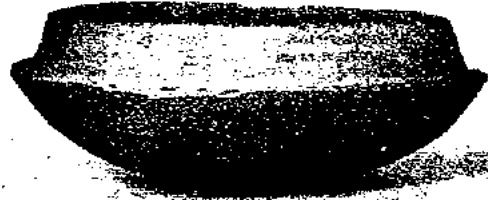


3039

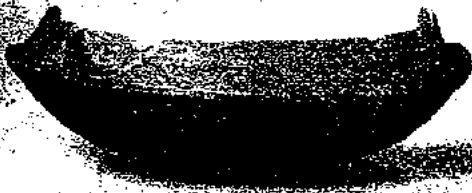
日烧原3号窑跡出土土器3



3041



3047 - 3048



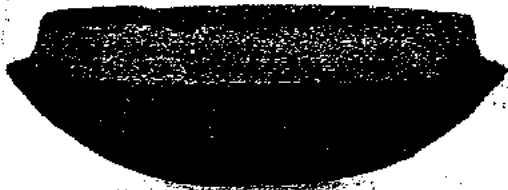
3043



3044



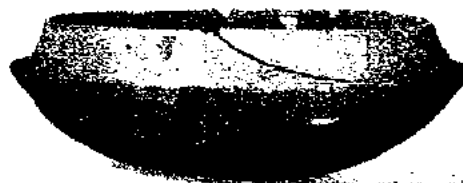
3049 - 3050



3045 - 3046

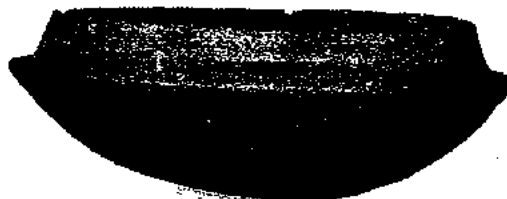


3051 - 3052



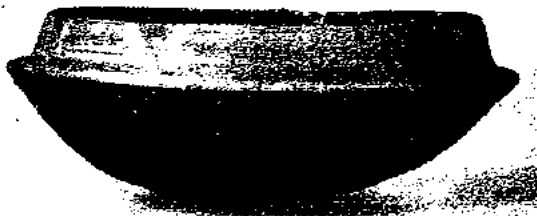
3053 - 3054

3059 - 3060



3055 - 3056

3061 - 3062



3057 - 3058

3063 - 3064

日烧原3号窑出土土器5



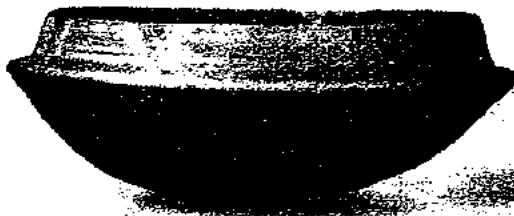
3053 · 3054

3059 · 3060



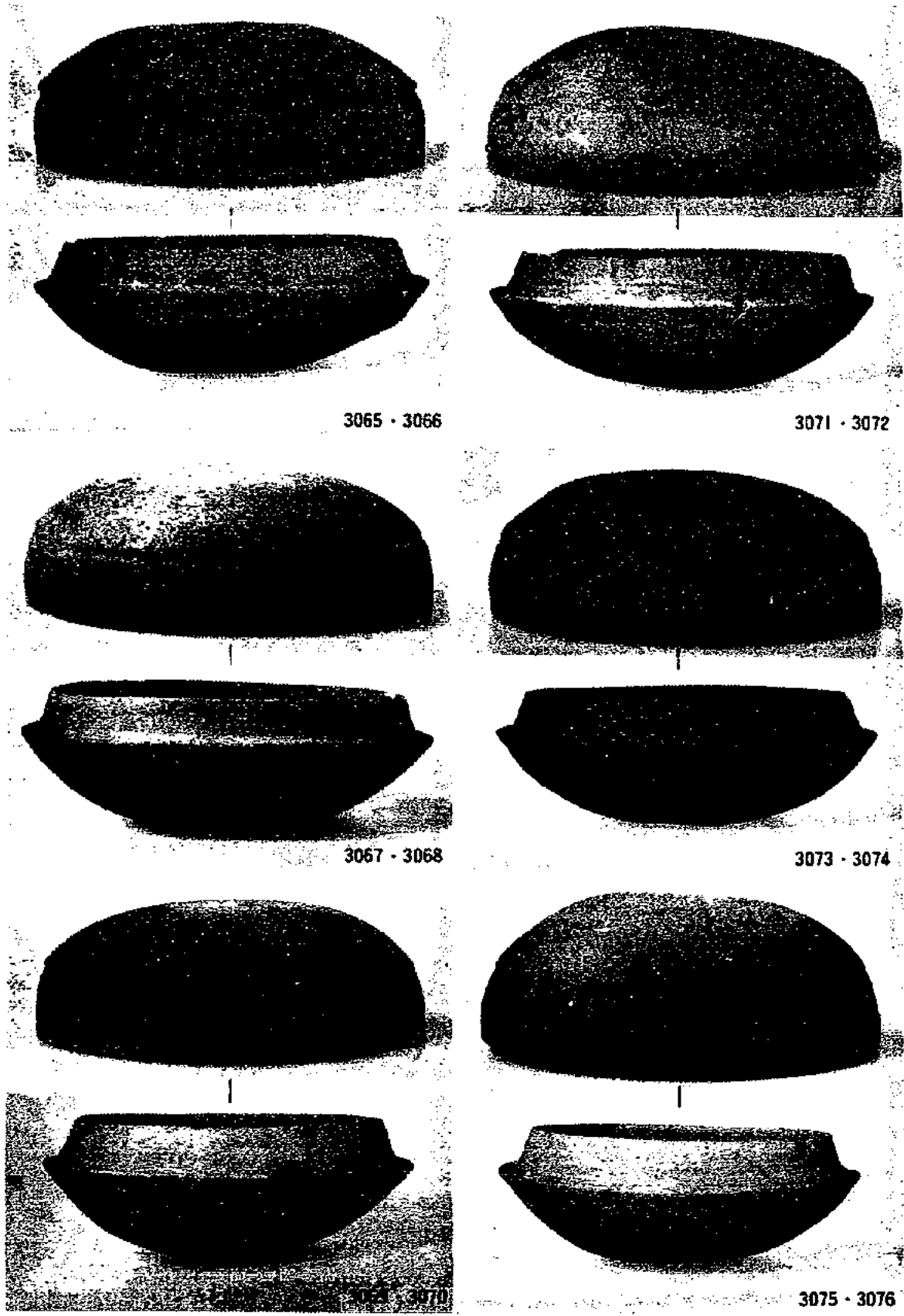
3055 · 3056

3061 · 3062

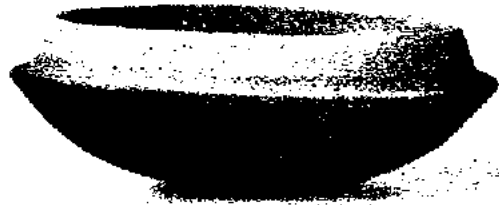


3057 · 3058

3063 · 3064

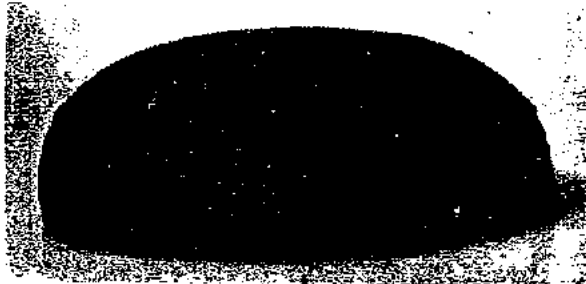


日城原3号窯跡出土土器6



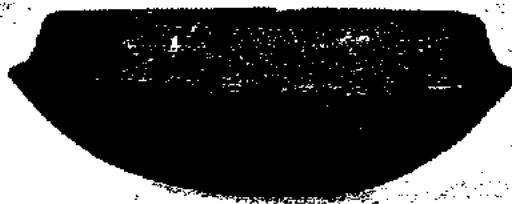
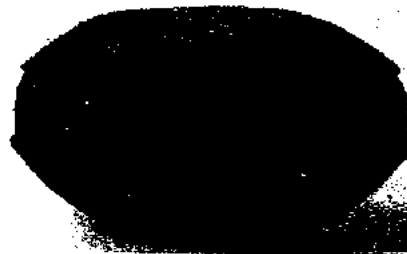
3077 · 3078

3083 · 3084

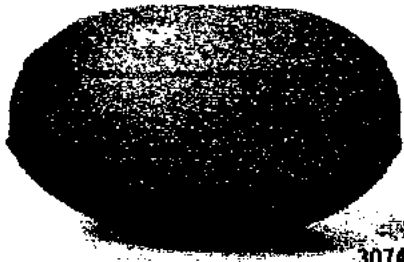


3079 · 3080

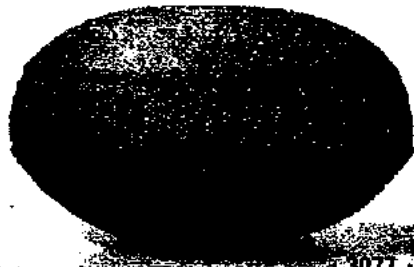
3085 · 3086



3081 · 3082



3074 - 3074



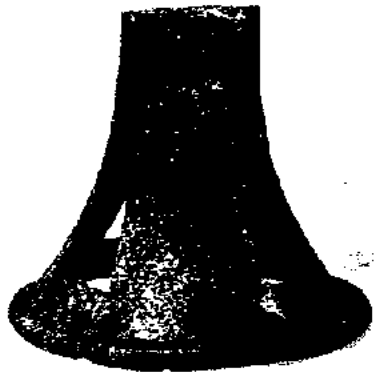
3077 - 3078



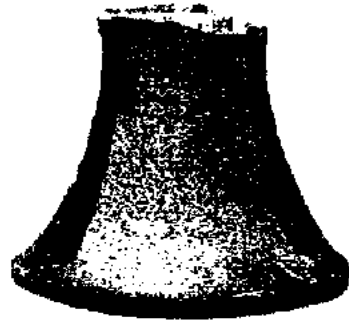
3079 - 3080



3088



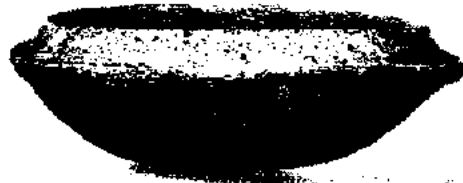
3091



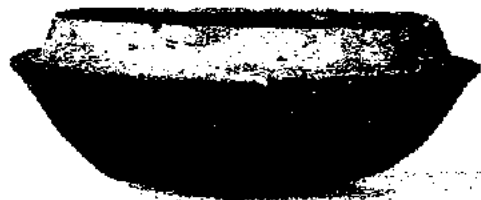
3097



3099



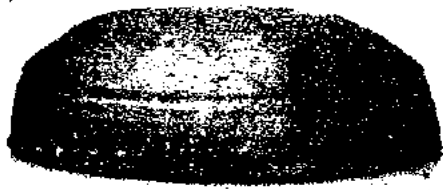
3104



3105



3108



4001



4007



4002



4008



4003



4009



4004



4010



4005



4012



4013



4021



4015



4023



4016



4024



4018



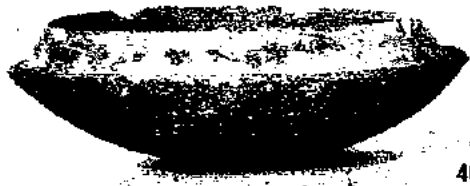
4027



4020



4030



4031



4038



4032



4040



4033



4041



4034



4042



4036



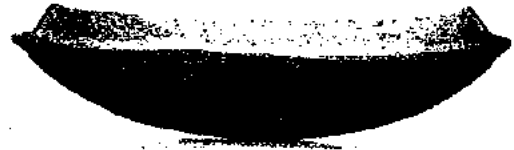
4037



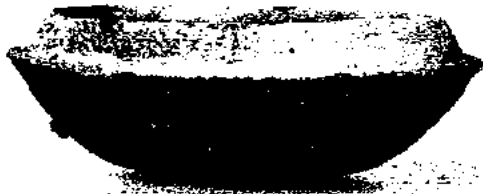
4043



4044



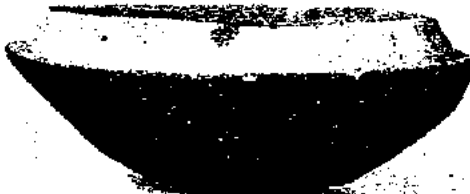
4049



4045



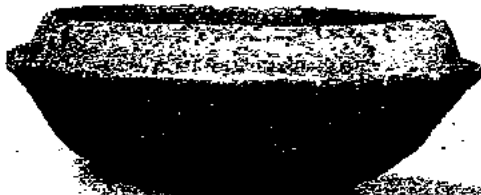
4053



4046



4056



4047



4057



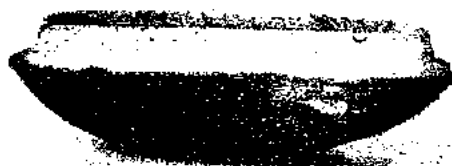
4048



4060



4062



4082



4065



4083



4067



4073

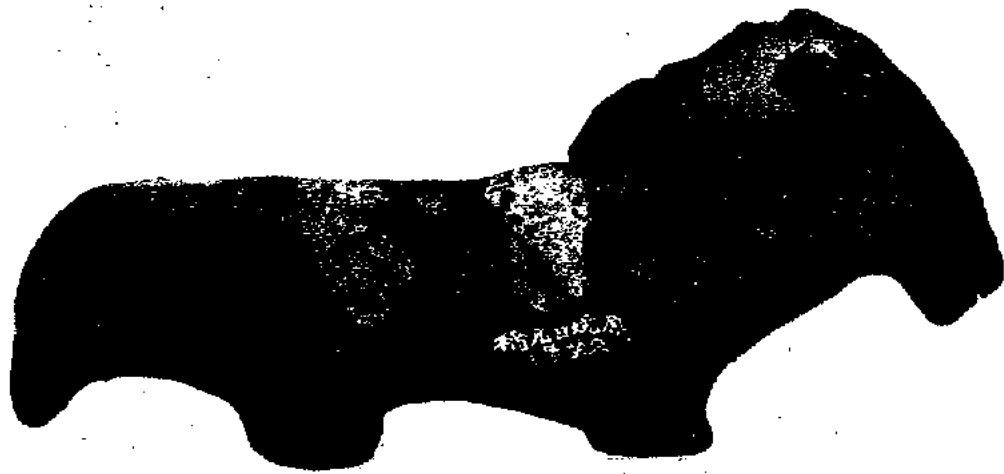
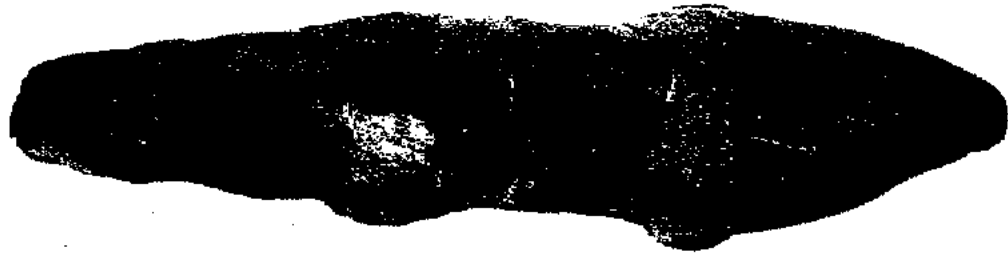
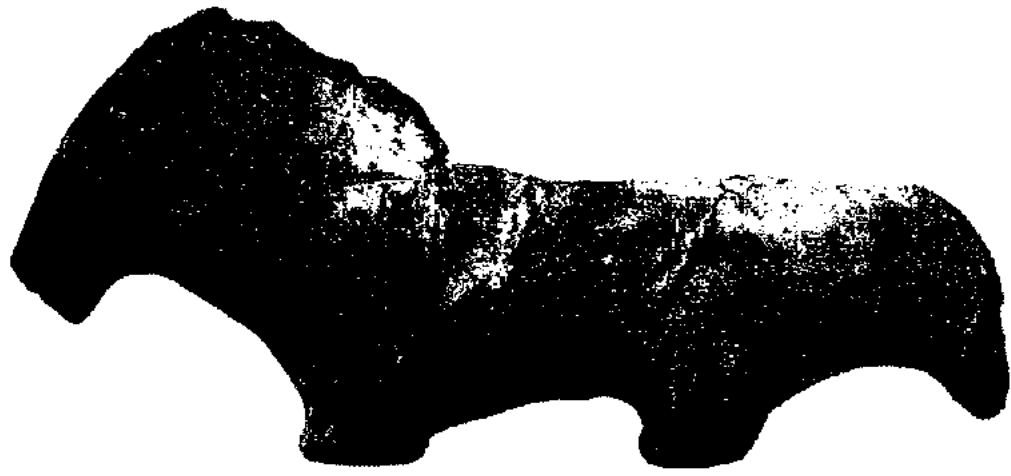


4075



4051

日烧原4号窑出土土器5



T4-6

日烧原4号竖穴出土土馬 (T416)



T4-6



T4-6



4087



4086



4088



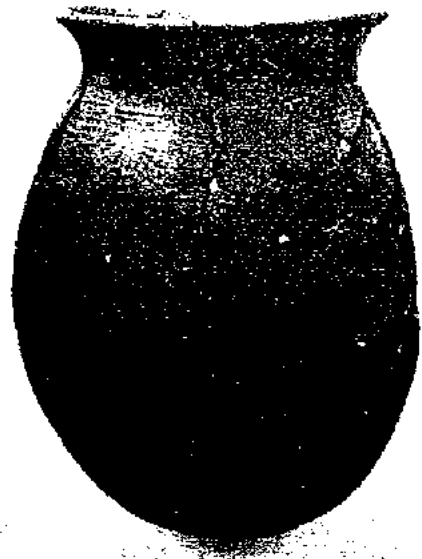
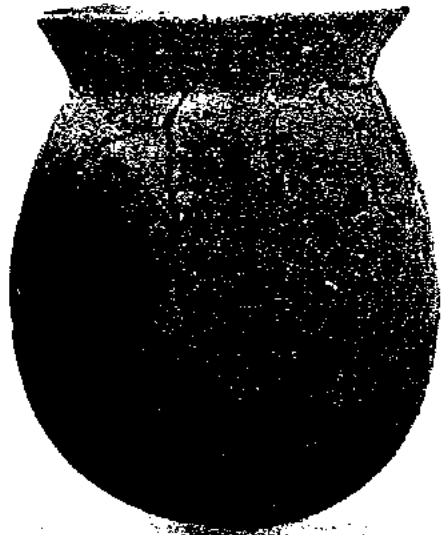
3111



2078



T415



K-1 (上) <第6图1>

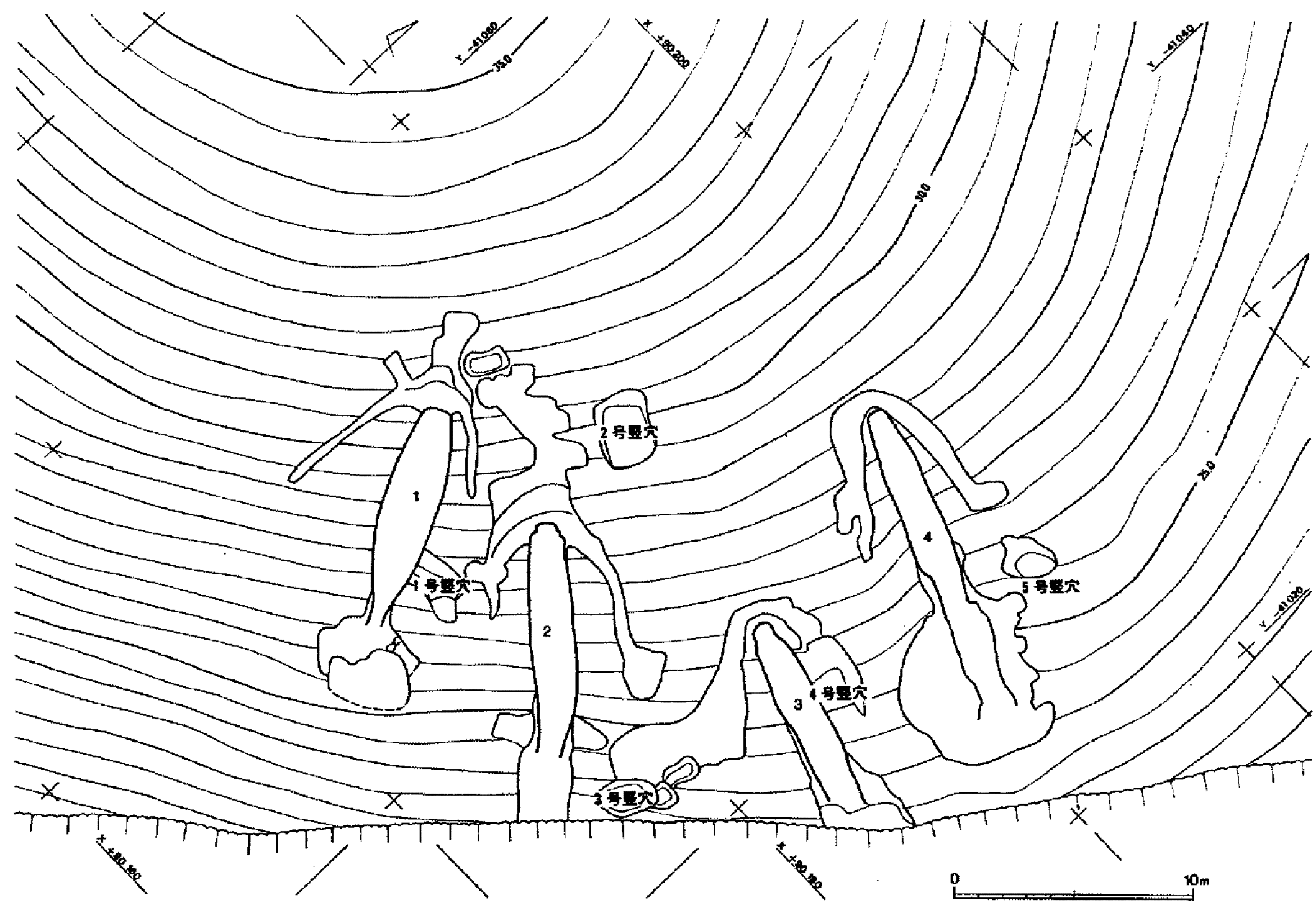
K-1 (下) <第6图2>



4085

T.106

日烧原窑群K-1, 4号窑迹, 1号竖穴出土土器



第3图 稻元日烧原照跡群遺構配置图 (1/200)

稲元日焼原

宗像市文化財調査報告書 第22集

1989年3月31日

発行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 新日本法規出版株式会社
福岡市中央区大手門三丁目3番13号